

法學博士子爵田尻稻次郎著

增訂
改版
經濟大意
全

東京
專修學校

260

327

特 17
524

法學博士子爵田尻稻次郎著

增改



經濟大意

全

明治
42 9 6
内交

東京專修學校

緒言

本書初版以來版を更むること五回にして既に數年を経過せり、其間世運大に進捗し我國の形勢復た昔日と其觀を同ふせず發達伸張の續見るべきもの少くとせず、然りと雖も一得一失は理勢の免れ難き所に於て萬般の事恰も過渡の情況を呈し需給平を得ずして消費其序を失ひ頗る寒心すべきものあり、抑々國礎の安泰は需給の平衡其宜きを得るに在り是に於てや彼の保守を以て有名なる英國人士の如きも大に鑑みる所ありて從來の研究方法を更め消費を基礎とし以て其性質程度を推究し生産方法の精粗を考查し以て其効果を鑑み分配機關の利鈍を研究し以て其效驗の

多少を判する等理觀を捨てずして事觀を本とし頗る經國の要領を得以て理勢の捷路に達せり、我國土地豐饒人士俊秀而して形勢能く世界貿易の樞軸たるに足り前途洋々大に望を屬すべきなり、然るに今や過渡の時期に際會し需給の關係稍く紊れ消費將に其序を失はんとす、經濟學を講ずる者達觀以て更に一大研究を要する蓋し此時より急なるはなし、須く心を百般事業の整理に致し以て固本の策を建つべきなり、仍て茲に經濟研究の面目を改むるの必要を感じ、則ち久習を重んぜず初學を輕んぜず世潮の趨勢に従ひ本書編纂の序次を更め聊か後進研究の資に供せんと欲す、是れ第六版を發兌する所以なり

明治三十六年一月

著者誌

第八版盡く依て訂正増補以て世に公けけす、抑々道の深遠なる之を得て究め難く之を究めて盡し難し、本著の如き固より遠く無漏の地に達する能はずと雖も後學研究の一階段と成り聊以て世を益することあれば幸太甚

明治四十二年七月

著者誌

増訂 經濟大意目次

第一章 總論

第一節	經濟學の釋義	一
第二節	經濟の目的	三
第三節	經濟の本分	六
第四節	經濟學研究の困難	八
第五節	經濟學の受くる攻撃	二
第六節	經濟學と他學との關係	四
第七節	交換	七
第八節	富	二一

第二章 消費

第一節	消費の釋義及其生産分配との關係	二六
第二節	消費研究の必要	二六

第三節 需用供給の説明……………二九

第四節 消費の區分……………三三

第五節 消費と生産との權衡……………三七

第六節 個人の場合に於ては消費を慎み生産及貯蓄を貴ぶ……………三九

第七節 貯蓄と吝嗇との別……………四二

第三章 生産

第一節 生産の釋義……………四五

第二節 勞力……………四六

第一目 勞力と資本、土地との關係併に勞力の釋義……………四六

第二目 勞力の種類……………四六

第三目 生産勞力及不生産勞力……………四九

第四目 勞力の目的……………五一

第五目 分業及勞力の分類……………五二

第六目 分業及勞力分類の區域……………五四

第七目 高等事業の分業……………五七

第八目 日當及單價支拂法……………五八

第三節 資本……………六〇

第一目 資本の釋義及分類……………六〇

第二目 固定及流動資本……………六二

第三目 資本の區分は事業の種類に由り其比例を異にす……………六七

第四目 資本を得るの困難……………六九

第五目 資本の効力……………七一

第四節 土地……………七二

第一目 土地の意義及其必要……………七二

第二目 土地の生産力……………七四

第三目 收穫遞減の法則……………七九

第四目 收約的及粗放的耕作……………八三

第五目 大農及小農の便否……………八五

第五節 生産三要件結合の必要……………八六

第一目 結合の實況……………八六

第二目 三要件勢力の差違……………八九

第六節 生産に要する諸般の設備……………九〇

第四章 分配……………九三

第一節 分配の通路……………九三

第二節 營業所得……………九四

第一目 營業所得の釋義及其説明……………九四

第二目 危険は世運の進歩に従ひ増加す……………九五

第三目 營業所得の歩合は世運の進歩に従ひ減少す……………九七

第四目 營業所得歩合の多少を決する原因……………九九

第五目 營業所得と他の所得との差違……………一〇二

第三節 勞銀……………一〇四

第一目 勞銀の釋義及勞銀基金……………一〇四

第二目 勞銀平均増減の原因……………一〇五

第三目 各個勞力者の勞銀の多少を決する原因……………一〇八

第四目 勞銀の高きは必ずしも營業者の不利に非ず……………一一三

第五目 人口の増減と勞銀歩合との關係……………一一五

第六目 勞銀歩合増加の利益を維持する能力の強弱……………一六

第七目 人口の増加は勞銀の歩合平均を減するの傾向あり……………一二〇

第八目 人口の抑制……………一二三

第九目 勞銀基金の増加は資本の増加と正比例を保つこと能はず……………一二八

第十目 機械の進歩と勞銀との關係……………一二〇

第十一目 勞力者生計の困難……………一二四

第十二目 職工同盟強請及同盟罷工……………一二九

目次……………五

第十三目	職工同盟の利害	一六〇
第十四目	共同法	一六三
第十五目	共同法に對する駁論	一六五
第十六目	共同店	一六八
第十七目	勞力者救済に關する次位の説備	一七三
第十八目	社會主義	一八一
第四節 貸付料		
第一目	貸付料の釋義併に小作料	一八四
第二目	競争地代法	一八六
第三目	年期小作法	一九一
第四目	慣習小作法	一九三
第五目	小作料は世運の進歩と共に増加す	一九四
第六目	持地耕作法	一九五
第七目	利子の釋義及其歩合	一九七

第八目	利子歩合の差違	一九八
第五節 信用		
第一目	信用の釋義及其性質	二〇〇
第二目	信用の本分	二〇二
第三目	信用の効力	二〇三
第四目	信用の危険	二〇五
第五目	對人及對物信用	二〇六
第六節 價格		
第一目	價格と市價との區別	二〇七
第二目	一般價格には増減ありて昇降なし	二〇七
第三目	市價の昇降	二〇八
第四目	價格の源泉	二一〇
第五目	價格の多少を決する原因	二一一
第六目	價格は物品の種類に由り其趨勢を異にす	二一二

第七節	貿易并に其機關	二二八
第八節	地方貿易	二二〇
第九節	内國貿易	二二〇
第十節	外國貿易	二二二
第一目	外國貿易の起因	二二二
第二目	生産費の多少が内外貿易上に呈はす所の結果の差違	二二九
第三目	外國貿易の成立は生産難易の比例に差違あるを要す	二三一
第四目	外國貿易に要する注意	二三三
第五目	自由貿易及保護方策	二三六
第六目	保護の目的を達せんと欲せば天然の利益を辭せざる可らず	二三八
第七目	保護は被保護者に特利を與へず、被保護品若く	

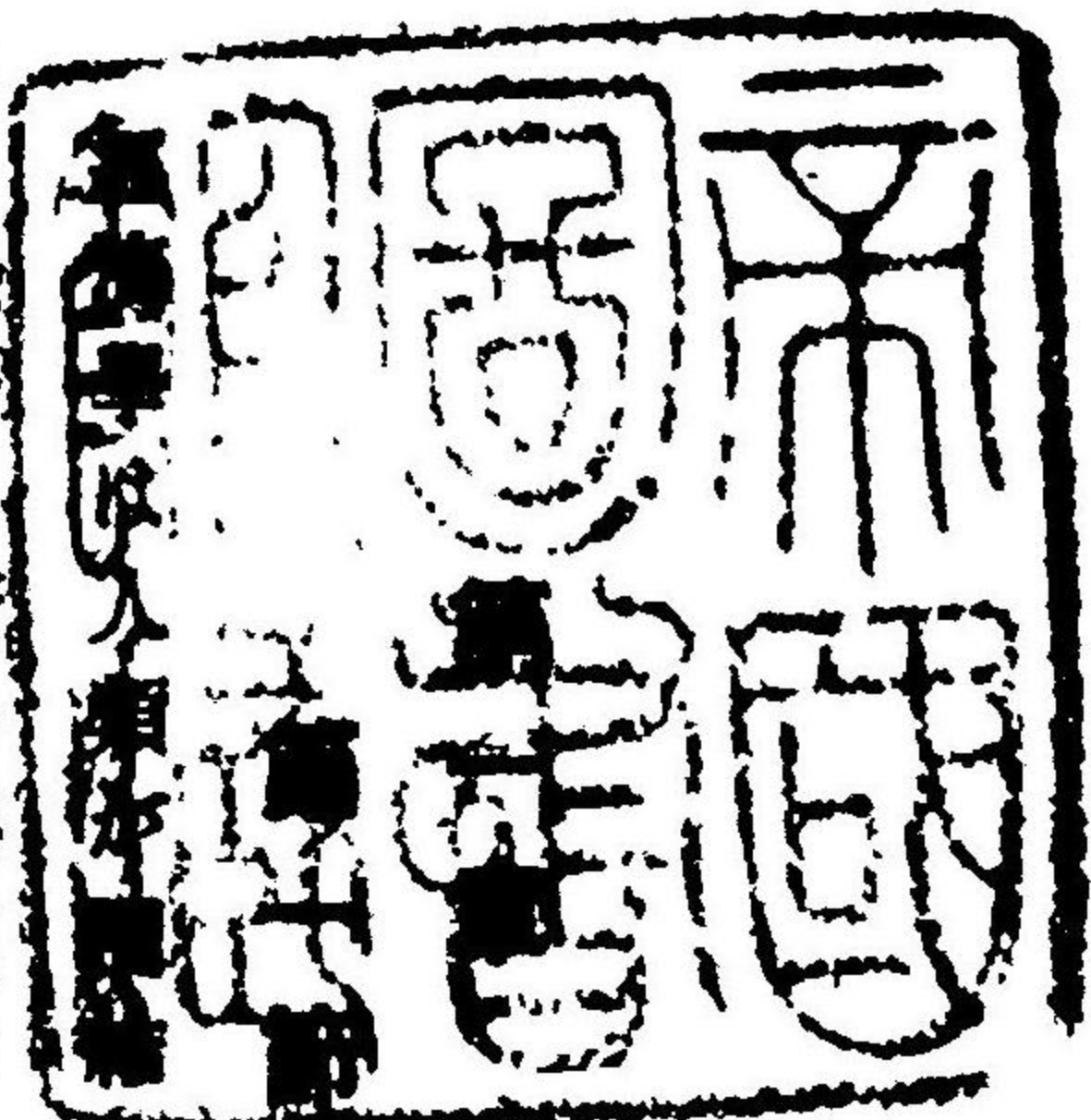
第八目	保護は營業の種類を増加せず、資本勞力使用の方向を定む	二四六
第九目	百般事業の發達は實業界の關係を複雑ならしめ保護の不便を増加す	二五〇
第十目	保護政策は一たび之を始むるときは容易に解く能はず動もすれば永久となるの傾向あり	二五三
第十一目	保護は物價を騰貴し輸出を妨げ外國競争を勝致し内國消費者を苦しむ	二五五
第十二目	保護は外國競争を排するの効力ありこの妄説	二七〇
第十三目	英米兩國に於ける保護の差違	二七二
第十四目	外國貿易には多少の檢束を要す	二七五

は其原料品を生産する土地の地主に利益を與ふ

増補 經濟大意目次 終

増訂 經濟大意

法學博士 子爵 田尻稻次郎 著



總論

經濟學の釋義

經濟學は人類が生活して一社會を成すに當り其有する所の關係を物件上より論ずる所の學問なり、又簡單に陳述すれば經濟學は經國濟民の原理を物件上より説く所の學問なり

明義の成

元來釋義は簡明を旨とし義豊かに文約にして貫穿縫綴以て無漏の地に入るを要す故に意餘りありて言足らざるの虞なきを得ず、依て今之が説明を下すは蓋し無用の業に非ざるべし、請ふ少しく之を辯せん

太古草昧の世に於ては城郭の居委積の守りなく人々各自に禽獸魚鼈を捕

獲し若くは草根本實を採集して之を食ひ、餘りあれば即ち之を與へ、足らざれば即ち之を他に仰ぎ所謂特有財産なる者の觀念なく未だ以て各自の長所と土地の物産とを交換し、業を分ち有無相通じ互に勞を省き所得を増加するの道開けず、偶々之あるも機かに男女老幼其業を異にするに過ぎずして、人皆個々別々に此世に生存し未だ社會の體裁を完成せず、斯の如き人民の生活は固より經濟學の範圍外と爲す然れども人口漸やく増加し既に一たび社會を團結し漸やく其發達を経るに至りては勢ひ交換の要を生じ互に長短相補ひ、有無相通することとなるは自然の然らしむる所にして苟も其發達に一度を加ふれば交換の要亦一度を増加す、故に釋義中故らに「人民團結して一社會を爲す」の句を用ひ以て太古に於ては經濟學の要殆ど絶無なりしこと及社會外の人には縱令自から其人一個の所得を増加して之が幸福を増進する方法存するなきにあらざるも、未だ吾人の認めて以て經濟學と爲す所のものあらざる所以を示したるなり、然れども世已に人民あれば衣食住の需要なき能はず、人民既に社會を組織するに於ては此需要を供給する方法なきを得ず、而し

て、其之を供給し之を需要するの際には必ずや人民相互の關係を生ぜざるを得ず、物件上の關係とは夫れ之を云ふ、又經濟學を以て人間の關係を論ずるものと爲すと雖も、人間には社會上、道徳上、法律上其他種々の關係あり、故に釋義中故らに「物件上より論ずる」との句を用ひ以て經濟學の範圍を定め、道徳法律等の事は敢て其論ずる所に非ずして經濟學は只管人間衣食住の需要供給に就き其關係する所を論ずるものなることを示す、經濟學の論ずる所夫れ斯の如し、請ふ今一步を進めて其目的に論及せん

第二節 經濟の目的

經濟の目的は最少の勞費を以て最大の結果を得るにあり、苟も此目的を誤らざれば宇内の事物盡く經濟の本旨に適せざるものなし、唯之を得るの方便に至りては實地の景況に由り千差萬別大に議論なきを得ず、夫れ目的は一定不動之を不朽に傳ふべし、方便に至りては即ち然らず自然の優劣、資力の厚薄、人口の多寡、民度の高低等に因り東西其便を異にし、南北其緩急を同くせず、然るに世上往々方便を目的と誤り、一時の方策を以て永世の目的とする者あり

目的と方
法の意

所願自由
源の鉄鋼

所願自由
源の鉄鋼

て世運の進歩を障害すること稀なりとせず、一例を舉れば彼の自由貿易又は保護方策を以て各々旗幟を樹つる黨派の如き即ち是なり

彼の自由貿易の説を唱ふる者は事物の發達を自然に任じ敢て人為の獎勵干渉を用ひず甚だしきに至りては外國貿易の如きも之が監督を須ひず、關稅の如きも之を徵集するを不可と爲し政治、財政、警察上の必要に關しては之を度外視し殆ど顧みず、内外の貿易を自由自在勝手次第にせば國家の富強期して待つべしと爲し唯之を自由にすることを以て目的とす。之に反し保護方策を唱ふる者は土地物産の自然の優劣、人口の多寡、國民の素質、資本の多少等を辨せず、苟も内國中に於て生産、製造し得べきものは之を外國に仰がずして盡く之を内國に得んとし、之が爲め國家の權道を繕りて有利事業の利を剃き、産りに不利の事業を獎勵し或は人口資本共に増加するに至りては國中最上の財源にのみ依頼すること能はずして次等の財源に及ばざる可からざるの理を解せず、或は時未だ至らざるに關者を惠むに汲々とし天賦の利益を辭して人為の不便を醸成することあるも敢て自ら之を悟らず、唯弱者を保護せば天下の

事足れりと爲す、夫れ理は事に隨て變じ事は理に隨て融く天下の事理豈に變通なくして可ならんや、是等の兩説は共に偏執論たるを免れずして固より採るに足らざるなり、順天の道設地の宜察せずんばある可らざるなり

抑も經濟の目的は自由に非ず、保護に非ず、最少の勞費を以て最大の結果を得るに在り、之を自由にし之を保護するが如きは固より一時の方策に外ならず所關縁に應し物を利すれば則ち足る、若し夫れ之を自由にして此目的を達するが如きの實あれば宜く之を自由にすべく、又之を保護して苟も此目的を達することを得るの確證あれば須らく之を保護すべし、夫れ實地の情況は千差萬別なり焉を萬遍一律、一定不動の法を以て之を萬世に推すを得ん哉、理に契ひ機に合し丈墨均石時に依り所に依り其宜を制せざる可らざるや論を俟たず、務に應し時に適し道を以て物を制す是れ理世の極意なり、國家の經濟を論ずる者小心翼々力めて事物の關係を詳にし以て彼の方法は現今の方法と比較し果して同額の資本勞力を以て多量若くは善良の物品を生産又は製造し得るの實あるや此方法は彼の方法に比し同額の資本勞力を以て事業上に

幾多の進歩を來すべきや、又は更に小額の資本勞力を以て同様の事業を爲し、若くは多量の物品を製造し得べきや、又新事業を起せば、其事業は果して在來の事業と同様又は之に優るの利益あるや、等の要點を研究し、然る後、其取捨を決すべし。凡そ經濟上の事業を爲すに當り、標準とする所斯の如し、漫に之を自由にし、漫に之を保護するが如きは、所謂規矩に求めて、方圓を得、權衡に求めて、輕重を得るに止まるものにして、固より道に違する者に非ざるなり、空しく大海の鹹味を嘗むるも、安んぞ龍宮の摩屈を得ん哉、夫れ眞理は寥廓として、萬像を笠翳の中に籠む一片の理、一部の像、何ぞ能く之を排するを得ん、察せずんば、ある可らざるなり。

第三節 經濟の本分

經濟の目的は已に陳述したるが如く、勞を減して功を増すにあり、彼の保護論者の如く、徒らに勞費を増加するに非ざるなり、故に若し字内に虛無より有物を生ずるの術あらば、經濟の目的茲に至りて極れりと謂ふべし、然れども斯の如きは、固より物理の許さざる所にして、有物を生ずるは必ず有物よりせざ

る可らず、是れ經濟の事業を舉げんと欲せば、必ず先づ勞費を至さざる可らざる所以なり、今此勞費を爲すに當り、先づ事物の原因結果の關係を示し、之に依りて禍を未然に防ぎ、便益を將來に得るの原理を講じ、又其方法を示すを以て經濟の「フオンクシヨ」即ち其本分と爲す、故に經濟は某事業は其地に適せず、今日の人口資本の景況に應せず、某事件は善は則ち善なりと雖も、時未だ至らず、是れ彼れより急なれば、先づ是れよりして、彼れに及ばすべし等の理由を示すに止まり、固より法律の如く、人の行爲を制裁するの力を有せず、依て今貿易信用等の經濟上の事業を舉げんと欲せば、必ずや力を法律に藉らざるを得ず、經濟に關する善良の法を得んと欲せば、法律も亦經濟學の力を藉らざる可らず、隻翼沖し難く、孤輪事を運ぶを得ん、請ふ一例を引きて、二者其本分を異にするの狀を示さん。

曾て西曆十八世紀中英吉利、葡萄牙兩國の間に締結せられたる有名なる「メスーエン」條約は、當時流行の互惠主義の好例にして、葡萄牙は英國製毛布の輸入税を免じ、英國は其報酬として、佛國產葡萄酒を排し、葡萄酒を葡國より輸入

例上の實

する事と爲せり。然るに葡國産の葡萄酒は之を佛國産の者に比して遂に濃厚なるに因り、其飯用の爲め英國人民一種の疾病即ち酒風症(洋名ガウト)と云ひ足部に非常の鋭衝を起す病症なるものを起すに至れり。此弊の起るや法律は之に處するに先づ葡國産葡萄酒の輸入、販賣及飲用を檢束し又は之を禁制する方法を施し、且つ條約の改正に着手し佛國産の葡萄酒輸入、販賣、飲用を獎勵するの法を講すべし。然るに經濟の之に處するは茲に出る能はず濃厚なる葡萄酒の飲用は大に國家の生産力を減する効驗あるの原由を説き以て淡泊なる飲料を用ふるの利益を説くに止まるべし。由是觀之法律は外形の如何を制し、經濟は内部關係の因縁如何を示すを以て其本分とす。即ち知る兩者の相關係する猶ほ風水の如し水風を待て波を起し風水に依て動相を現す、而かも水は其靜相濕性を衰らす、風は其動相燥性を失はず、又目手の如し、目石の白きを見るも其堅きを見ず、手石の堅きを知るも其白きを知らず兩々相輔けて事甫めて全し、察せずんばある可らざるなり。

第四節 經濟學研究の困難

實際的
の
出来
事

凡そ政治上、社會上に關する學問の研究は理化學の如く實際の遺例を引きて其所論を證すること能はず、多少想像推理の間に逍遙せざるを得ざるの不便あり、經濟學を研究する者亦此不便を免れざるなり。彼の理化學に於て空氣の壓力、物質の成立等を論ずるや只口頭の論理のみを以てせば聖者尙且つ之を解するに苦むべし、況や才の凡なる者に於てをや、然れども若し一たび排氣管若くは分析の試験を施すときは事跡判明多辯を要せずして凡庸の士尙ほ能く自ら之を悟らん然りと雖も今經濟學を論ずるに當りては即ち此の如くなること能はずして、其論ずる所多くは天下億兆の休戚に關する最も重大の事件に屬して輕々しく之を實地の試験に付するを得ず、只推理を以て其然る所以を論ずるに止まるの已を得ざるものあり、例へば經濟學の物價を論ずるや必ず物價の高低は需要供給の關係に因るものとし、懇々其理由の在る所を説明すべしと雖も、之を實地に證せんと欲す天下に號令して今年の田作は之を例年の半額に減すべしと云ふが如きは到底得て爲す可らざる事に屬す、故に其説く所理化學の如く適切なるを得ざるは其素質上已を得ざる所のもの

あり

抑々實地の情況は森羅萬像單純の道理常に表面に於て直接に其成績を全くするを得ざるなり、例へば人口繁殖し資本増加せば米穀其他の食品及原料品は必ず其價格を増加すべしとは經濟學の論ずる所にして又最も賭易きの道理なり、然るに事實は往々却て之が反對に出づる事あり、彼の英國の如きは之を西曆千八百四十六年の穀令(コーン、ロー)廢止以前に比すれば其人口資本の増加實に夥し、然れども穀類の價格は之を當時に比して今日は却て廉價なり(昔日は二クワートル、二石六斗一升二合餘、八十志以上方今は三十志内外)斯の如く道理の説く所と實際の成績と往々符合せざるものあるに由り、世人をして道理の頼むに足らざるの想あらしめ、之が爲め眞理の發達を障礙すること尠からず、是れ豈に井絡を短ふして而して水の潤したるを疑ふの類にあらざらん乎、焉ぞ知ん單純の道理をして實地に其成績を全くするを得ざらしむる所の他の道理あるを、即ち英國の穀類價格の景況道理と符合せざるものある所以のものは該令廢止以上穀類の輸入自由にして北米合衆國、印度、露國等よ

り大に之を輸入し昔日穀令の保護に據り僅かに耕作し得たる劣等の土地に穀類を耕さざるに由る、然るに今試みに生肉、野菜等の如き容易に輸入し能はざる物の價格を見よ、爾來牧畜耕作の業が昔日穀類を耕作したる土地に侵入(西曆千八百七十四年には穀作地九、四三二、四九〇、エイカ、二エイカ)は四反二十四畝強、永久牧場一三、一七八、四二二、エイカ、同千九百三年には前者七、〇六〇、五四三、エイカ、後者一六、九三四、四九五、エイカ)し來りたるが爲め生肉、野菜等は多少其供給を増加したるに相違なしと雖も、到底今日の人口に比して昔日の如く供給寛裕なることを得ず、是れ實に眞理の在る所は萬世を経て動かす可からず、一部局に於て外面其成績を實地に全くすることを得ざるが如き觀あるは他に繞密の關係の存在するに由る、何んぞ之を以て實地と道理と符合せすと云ふを得んや、抑々深遠なる原因の探究は世人の難しとする所なり、然れども測り難きの地に向つては須らく七穿八穴すべく半黃半青本色を曉らさるは學者の本意に非ざるなり、畢竟此等の困難は研究の足らざるに出づ、夫れ研究の功は猶ほ鏡を磨くが如し、磨けは則ち明體急ち現はれ好醜、大小、方圓、長短

應に隨て現前す、磨かされば則ち餘垢盡きす眞體を隔て、眞影を寫さす、百折不撓進みて以て研究を積み眞理の在る所を探究せば智海の雲霧急ち晴れ秋潭の月皎然として夫れ瑕なきを得ん、豈に路傍の岐路荆棘に迷ふを要せん哉

第五節 經濟學の受くる攻撃

經濟學は常に人間物件上の關係を論じ、談高尚なる信義に涉らず、首徹妙なる人情の域に入らず、貧者を見れば即ち曰く是れ汝が怠惰の罪なり汝宜しく努力せよ、又不幸困難に陥る者を見るも君は是れ不幸の士我に餘財あり以て君に呈すへし、宜しく之を以て君が嗜好に充て憂を慰むべしとは云はず、不幸實に慰むべしと雖も已に不幸に陥りたる上は已むを得ず宜しく一層の勉勵を加へ勤儉の道を守り以て此不幸を免るべしと云はん、是に於てか世人説を爲して曰く「經濟學は信義人情を解せず、只管ら利便を説くに汲々として世に物件以上信義情誼等の高尚温篤なる者あるを知らず」と、痛哉眞理の深きを批擬し漫に一極の端を窺ひ未だ會て天高ふして万象正しく海闊して百川之に

可らざるは經濟學の受くる攻撃

朝するを知らず、亦是れ隱微を解して着毛の裏面と作すの族ひ將た是等の人なる乎、元來經濟學が物件上の關係を説くは其範圍を守るものにして、其利便を説くに汲々たるは其本分を盡すに外ならず、何ぞ之を以て信義に反し人情を捨るものと云ふを得ん哉、只信義の極端度我慢の弊に陥らしめず、人情を濫用して怠惰を勤め以て勤勉の道を痲痺するの弊を防かんと欲するにある耳、信義人情固より經濟と併立せざるを得ざるなり、抑々經濟上尊むべきは信用を以て最とす、徳義厚からざれば固より信用を保つを得ず、誠に通ず之を信と云ふ人にして信なくんは其可なるを知らざるなり、大車輓なく小車輓なくんば何を以てか行くを得ん、夫れ然り而して人情は社會組織の大綱なり、經濟學は人間社會物件の關係を論ずるを以て其本分とす焉ぞ、此大綱の外に立つを得ん哉、人間の事元と悉く皆人情の近きに就きて之を處するを易しとし之を捨るを難しとす、經濟は難きを捨て、易きに就くを以て其本旨とす、焉ぞ人情に背馳して特更に事の難きを選ばんや、然り而して經濟學は人間衣食住の需用を充足する方法に關し其捷徑法を説くを以て任とす、古人云はずや衣食

足りて後ち禮節を知ると然らば則ち道德、人情、經濟の三者は相互に親密の關係を有し鼎足の勢を爲し以て長短あるを許さず、是れ所謂隨派分岐、事理雙融、難きを棄て易きに就き、諸學調和、混融自在、以て天下の利益夷齊同貫する者に非ずして何ぞ哉、豈に經濟を目して不道德、不人情なりと云ふを得んや、夫れ真理を觀るは猶ほ窓を隔て馬駒を看るが如し、眼を眨せば便ち過く豈に敢て忘るを得んや

第六節 經濟學と他學との關係

經濟の道德、人情と須臾も相離るゝ能はざること及其法律と内外の關係を有するは既に之を論せり、凡そ物孤立して能く其目的を得、獨立して發達の極度に達し能く社會を益するもの蓋し稀なり、事物の進歩は必ずや牽連調和互に相輔くる所なきを得ず、知るへし走るに手を以てせざるも手を縛すれば則ち走るに疾きこと能はず、飛ぶに尾を以てせざるも尾を屈すれば則ち飛ぶに遠きこと能はず、文學、理化學、哲學、歴史、美術、道德、人情、法律、統計、政治、財政等諸般の學者多少經濟學と相關するものならざるはなし、而して經濟學も亦此等

諸學の進歩を輔翼するものとす、若し夫れ文學の進歩なからん乎、真理の發見、妙計、奇策、名案、等數を盡すと雖も能く之を後世に傳ふるを得ず、造化の機密を探り人工を以て天工を奪ひ、難きを捨て易きに就き、無用を採りて有用と爲し、所謂最小の勞費を以て最大の結果を得るの術を求むるは力を理化學に藉らざるを得ず、哲學なくんば事物の關係を失し、其位地分明ならずして百折不撓の氣象を養ふ能はず、苟も此氣象なくんば經濟の事業決して擧からざるなり、又時勢の變遷を察し以て事の順序を質さんと欲せば、史學の觀念に富まざる可らず、美術の思想なくんば、質文に勝ち以て人の嗜好に投じ市場を制するの力を養ふこと能はざるべし、統計備らず、政治整はず、財産紊るゝときは經濟の事復た爾ふを得ざるなり、之に反し經濟の道開けず、難きを先にして易きを後にし、不便を採りて便利を捨つるが如きことあらば、國富の發達、財政の妙策、政治の改良等決して之を望むこと能はざるなり、夫れ鳥を捕ふるは羅の一目に依る而かも一目を以て羅を爲す可らず、十指長短あり然れども痛惜皆相似たり、由是觀之、經濟學は他の諸學と其進歩を共にし、鈞鎖連環して相離れず、甫め

て其發達を全ふすることを得、其目的を達するものと謂ふべし、請ふ今一例を引きて事物の發達は決して孤立し能はざる所以を證せん

昔時西曆千八百七年米人フルトン氏の汽船を發明するや船已に成り器械已に整ふ、故に數理を以て之を推すときは方今の艦艇巨艦と雖も得て之を當時に製造す可らざるの理なきが如しと雖も、實際に於ては此事なく、其能く巨大の汽船を製造することを得るに至りたるは僅に近年にあり、是れ頗る怪むべきに似て決して怪むに足らず、其故他なし造船業の進歩已に斯の如くなるに於ては固より人之を思はざりしに非らずと雖も、只當時製鐵の業未だ今日の如く盛ならざりしを以て、巨船を運轉するに足るべき巨大なる器械を製造し能はざりしに由る耳、爾來蒸氣槓の設置を得て困難全く破れ、甫めて今日の如く巨大なる汽船を製造することを得るに至れり、經濟學の進歩も亦之れに類するものあるを見るアダム・スミス氏の始めて富國論を著すや痛く貿易干渉の事を非難し貿易は須らく之を自由にすべしと説けり、然れども當時諸般の學未だ今日の盛況を呈するに至らざりしを以て、氏をして其望む所のもの

實例

は到底之を英人に窺む可らずとの歎聲を發せしめたり、然るに氏の世を辭せしより未だ百年を出でざるに英國の貿易は會て氏が望みしより一層の自由を得、數層の發達を加へたり、是れ他なし會てアダム・スミス氏の時代に望む可らざりし事件も星移り物替りて前陳諸般の學科大に進歩し和合して相捨離せず、經濟の學も亦共に進歩することを得たるに外ならざるなり、今や經濟學の解釋、經濟の目的、本分等のことは粗々之を論ずるを得たり、故に一步を進めて國家の經濟學に於て最も重要とする所の交換及富の事を論究すべし、請ふ先づ交換より之を説かん

第七節 交換

交換とは互に有無相通じ長短相補ひ自己の最も要せざる所の物を以て最も要する所の物を得、其最も易しとする所の者を以て最も難しとする所の者を得るの方法を云ふ、故に之を小にしては一家中若くは一社會中互に相輔くるの狀と成り、之を大にしては一國若くは國際の貿易と成る請ふ少しく之を辨せん

人類の生活を爲すや初めは棍棒若くは弓箭を取りて山林に入り禽獸を獲し其皮を剥ぎて之を衣とし、其肉を屠りて之を食とす。此時に當りてや一人獸を獲せば相寄りて其肉を食ひ、其血を吸ひ鼓腹互に歡樂を盡すを常と爲し、未だ其肉を鹽にし、其皮を滑にし以て之を貯ふるの術を知らず、故に當時に在りては交換の術は殆ど絶無値有と謂ふべし、之を狩獵の時代とす。然れども人口漸やく増加し、禽獸其數を減するに隨ひ衣食給せず、人々相搏つて尙且つ足らざらんとするの勢を爲すに至り、終に衣食の缺乏に驅逐せられて始めて獸類を收するの術を發明し、之に依りて凍餓の憂を免るゝことを得、之を牧畜の時代とす。此時に當りては已に家畜の所有起るを以て互に大小異類の家畜を交換し、又は家畜と他物と交換するの要を生ず。斯の如くにして能く一時衣食の缺乏を免るゝと雖も、牧畜の業は之を耕耘に比して土地を要すること頗る多く、凡そ五倍八五、人口増加するに従ひて衣食復た給せず、終に耕耘の業に移り、而めて其生を安んずることを得、之を耕耘の時代とす。而して其一たび耕耘の業に移るや土地の所有を生じ、又農具、牛馬、收穫物等各自特有の財産を生じ、已

人類の生活の
三大時

に之を其用せず以て交換の要益々起る、尙ほ更に社會に進歩を來し人間の需用増進するに従ひ農産物其他の原料品に人工を加へ以て其用を増し、此需用を満足せしむべき事業起らざるを得ず、之を製造業とす。又此等の業より生じたる物品を分配すべき商業起らざるを得ず、斯の如く進歩一層の度を加ふれば交換の要亦一層を増し、終に進みて一國中の貿易と成り、更に進みて國際の貿易と成る然り而して交換の事たる相互の利益なくんば決して之を永久に持續するを得ざるなり、然るに世往々此理を解せず貿易を以て一方の所得は一方の損耗なりと論ずる者あり、是れ大なる謬見なれば一言以て辯せざるを得ず

抑々交換とは釋義に於て陳述したるが如く有無相通じ、長短相補ふの術なれば固より損失を以て其目的とせず、今若し甲乙互に貿易し甲は常に利し乙は常に損するが如きことあれば甲乙の間貿易忽ち消滅するは最も親易きの理なりとす。夫れ物品の生産、製造は土地の外勢、氣候、山川、動植物等の景況を云ふと人民の性質、人口、資本の多寡等とに因り東西其便を異にし、南北其利を一

交換の成

立は双方
に利益あり
るを要す

第二章 論議

二〇

にせず、故に東方の難しとする所は西方之を易しとし、南人に餘裕あるも北方人は缺乏を感ずることあるは時に免れ能はざる所の現象なり、果して然らば東西南北互に有無相通じ、長短相補ふは雙方の便利たる固より論を俟たざるなり、試みに英米兩國の貿易を以て之を論せんに、英國は宇宙の富國、其資本に富むこと固より世界に冠絶す、而して人口亦稠密なり、米國は沃野千里加ふるに河川の利、大湖の便、國中に縱横浮遊し、天然の農利に富むは復た地球上多く見ざる所なり、故に英は工業に便にして米は農産に便なり、是を以て米國非常の保護税を行ひ以て英國の工業を苦しめ、最近米國の工業頗る發達せしに拘はらず、尙ほ兩國互に工業と農産とを交換し各々相利するは人の皆知る所なり、若し夫れ兩者の一方孰れか常に損失を蒙むらん乎、英米兩國間の貿易は決して永く成立すること能はざるなり、勿論一時甲乙の間孰れか一方に於て商機を過り損失を受るが如きことなきに非ずと雖も、是れ貿易の變事と謂ふべくして固より常勢と謂ふ可らざるなり、變事を以て常勢と爲すが如きは是れ愚見のみ固より堂に上るの説にあらざるなり

例

又適切の一小例を引きて交換は相互の利益たる所以を示さん例へば茲に一學生あり始めて英學に志し一書店に至り店主に問ふて曰く「ユニオン第一」リドルあるや、店主恭然として對へて曰くあり、貴客之を要するや、學生曰く余一部を要す其價幾何なりや、店主曰く五十錢なり、學生懐を探るに懐收て餘なるに非ずと雖も五十錢を出して之を購ふ、店主五十錢を受取り謝して曰く有難ふ、學生「リドル」を得欣然として去れりと假定せよ、是れ學生の爲には「リドル」は五十錢よりも其用多く、書店の主人の爲には五十錢は「リドル」一部より其用多きに非ざれば則ち能く此の如くなることを得ざるなり、果して然らば交換は釋義に於て陳述したるが如く雙方の便益たる敢て疑を容れざるなり

第八節 富

凡そ有形無形を問はず人類の用に供し得べくして他物と交換し得べきものは之を富と云ふ、富は之を別ちて有形無形の二種と爲す、蓋し有形とは什器商品等の如く形體を存して他物と交換し得る物を云ひ、無形とは才智、藝術、權

富の定義

利等の如く形體を有するに非ざれども之を用ひて他の物品を得るの力ある者を云ふ、例へば教師の藝能、年金者の権利の如く之を有すれば恰も什器商品の如き有體物を所有し之を賣却して收入を得るが如く、之を使用して收入を得べきなり。元來富は此の如く交換力に基するが故に昔日は全く交換力を有せずして富に非ざりし物も、世の進歩に従ひ富と爲るものあり、又昔日大に交換力を有し富の一部たりし物も、人智の進歩、嗜好の變更に隨ひ其交換力の一部若くは全部を失ひ無用の長物と爲るものあり、則ち石炭、石油、鑛産等の如きは昔日は人全く其用を知らず、偶々其物あるに於ては却て邪魔物として之を棄却せざるを得ざりしと雖も、理化學の進歩に従ひ此等の物品殆ど必要無く可らざる物と成り其所有者の爲め巨大の財源と成れり、然れども上人、高僧等の遺物、昔時寺院より賣出したる守札の類は中世の歐洲の如く宗教に沈溺し迷信強き時期に於ては非常なる價格を有せしと雖も、人智漸やく開くるに隨ひ此等は其術も美術上、歴史上の參考に供すべき者を除くの外復た人の顧みるものなきに至れり、又流行物の交換力の如きは年月と共に大に變更す、彼の

萬年青、蘭、兎其他衣服、美術品等の流行に係る物の交換力が時と共に變動するは人の皆知る所なり

抑々富は交換力に基し時勢の變動に隨ひ變更すること此の如し、然りと雖も苟も交換力を有する物は皆富にして天下に人間の需用に應ずるもの増加せば是れ之を富の増加と謂はざるを得ず、然るに中古に於ては全く富の性質を誤り金銀を以て唯一の富と爲し、只之を得るを以て國家の富を増加するものとするの黨派を生ぜり、之を主錢黨と云ふ、英語に所謂「モルカンチリスト」なる者即ち是なり、而して其主義は即ち主錢主義にして英語の「モルカンチル、シナム」是なり、凡そ金銀は一般の購買力即ち交換力を有するを以て富の一部分たるに相違なきも、黄金、真鍮を療す可らず、白玉、千箱何ぞ能く冷を救んや、以て直ちに煮て食ふ可らず、織て着るを得ず、只能く他物と交換するを得るのみ、然らば則ち交換の器具即ち貨幣の原料とするに適すと雖も、之を以て唯一の富と爲すことを得ざるや、論を俟たず、茲に一奇話あり、請ふ左に掲載して主錢主義の妄を辨せん

昔時大阪に大洪水あり、甲乙二人共に一大木に攀ちて之を避く水去らざる
こと二十有四時間、甲は握飯三箇を所持し、乙は真金を携ふ須臾にして甲乙共
に飢を感じ、甲は先づ握飯一箇を出して其一半を食ひ、以て氣力を養ひ、静に水
の退くを待つ、乙之を見て飢に堪へず、顧みて甲に向ふて曰く、汝の握飯一箇を
我に與へよ、我能く汝に十金を與へんと、甲答へて曰く、水退くこと正に幾日を
期するや、知る可らず、然るに今我十金の爲に握飯一箇を汝に與へなば、我は汝
と共に餓死せん故に、我之れを汝に與ふるを得ずと、故に乙は更に購ふに百金
を以てせんとす、甲尙ほ肯んせず、次に乙千金を以てせんと請ふ、甲少しく心動
くと雖も、乙の窮を知りて尙ほ之を聽かず、乙益々氣力を失ひ、將に餓死の域に
迫らんとし、茲に至りて終に真金を抛ち、漸くにして握飯一箇を得たりと

是れ固より一夕の小話に遇すと雖も、亦以て金銀の特に唯一の富とするに
足らざることを論すべく、又主錢黨の好むが如く、只金銀を得るを以て國家の
富を増すものとし、國中の貨物は擧げて之を輸出し、唯金銀のみを國中に堆積
するが如きことあらば、終に前隊の乙某の如き憐むべき境遇に陥るの虞なき

例

を得ざるの實を示す所の好話柄と謂ふべし、然れども幸にして外國貿易の隆
盛なる今日に於ては、主錢黨の好むが如き事を實地に目撃すること能はざる
なり、何となれば、苟も其國に貨物減少し、金銀漸く増加するに於ては、忽ち金銀
の交換力を減じ、其結果物價騰貴と成り、之が爲め國中の金銀を以て外品を購
入するの資に供するを便とし、忽ち物品輸入の増加を來し、以て自然に金銀流
出の道を開く可ればなり

第二章 消費

第一節 消費の釋義及其生産分配との關係

消費とは其目的原因の如何を問はず物品を使用し其用を減し又は單に其用を減するの義なり、則ち凍餒を防がんが爲め衣服食物を使用し衣服を製せんが爲に布類を使用し、食物を製せんが爲に五穀、鹽類等を使用するが如きは皆之を消費と云ふ、元來消費は生産の目的にして、生産は消費の源泉なり而して分配は其方便となる、蓋し目的なければ以て事物の發達を促すこと能はず源泉なければ以て其基本を固うすること能はず而して方便なければ其目的を達すること能はざるなり、消費の生産分配に關係する夫れ斯の如し

第二節 費消研究の必要

人類が團結して一社會を成す哉、世に衣食住の要なからざらん、况ん哉、一歩を進めて國家を組織するに於てを哉、抑々國家の強弱とは前記三大需用の豊富なるに缺乏するとの間に外ならず、農工の業盛にして採集の業之に加はり

商業發展にして國民の消費方南めて全きを得べし、而して之を涵養する者は生産にして之をして盛大ならしむる者は分配の業なり、然りと雖も生産は消費を以て目的とせざる可らざるは既論の如く、目的なきの生産は徒勞に屬する哉、論を俟たず、故に經濟を論ずる者は先づ生産分配を論ずるに前ち國民の必要とする消費は如何なる物にして如何なる點にある哉を詳かにせざるを得ず、元來國民最大の需用は衣食住の三點にあり、而して其物體は農業採集業工業より出でざるはなし、國に若干の民あれば農産、礦産、林産、水産、工産若干の消費を要するは數の最も賅易きものとす、勿論以上五大産業の生産物は盡く之を一國內に求むるを要せざるべしと雖も、必ず哉工に足らざる所は農を以て之を補ひ、農に足らざる所は工商を以て之を充さざるを得ず、知るべし、英國の如きは後者の好例にして、印度の如きは前者の好論たり、獨逸は最近人口大に増加（一年百分の一半の比例なり）し西人の調査に據れば食量の不足すること一週年中約百日なり、然れども工商の盛なる此不足を補ふて餘りあり、佛國は氣候温暖百貨に富み加ふるに其民の勤儉なる需給其宜を得て國礎甚だ鞏

固なり。北米合衆國は其本部のみを以て之を見るも面積英國に約二十五倍し農利に富み、礦産、林産の豊富なる四海に冠絶するのみならず、最近工業亦漸やく發達し、諸般の物産既に其人口の倍數を養ふに足る。而してフヒリツピンの富アラスカの特産之に加はるありて、只に國內消費に充るに足るのみならず、遠で四海の供給者たるの地位に在り。我國は今哉過度の期に在りて、需給の關係其平を得ずと雖も、臺灣の農利、北越油田の富、北海道農林の利、樺太の漁利以て收むべく、百事當然の緒に就くに方りては、又以て多大の餘力を見るを得べく、前途の望實に洋々たるものあり、然りと雖も、王制に曰く、國九年の蓄なければ不足と曰ひ、六年の蓄なければ急と曰ひ、三年の蓄なければ國其國に非すと曰ふ、例へば今茲に人口五千萬を有する大國ありて、連年農産物八九千萬圓を輸入し、工商の收入を以て之を補ふ能はず、之が爲に輸入超過となり、而かも其國債權國として海外より元利の支拂を受くるに非ず、却て債務國として元利支拂の爲に巨額を海外に支出するを要するの地位に居るものとせば、需給の關係消費の情況決して其宜きを得たるものと云ふを得ず、正に努力して以て

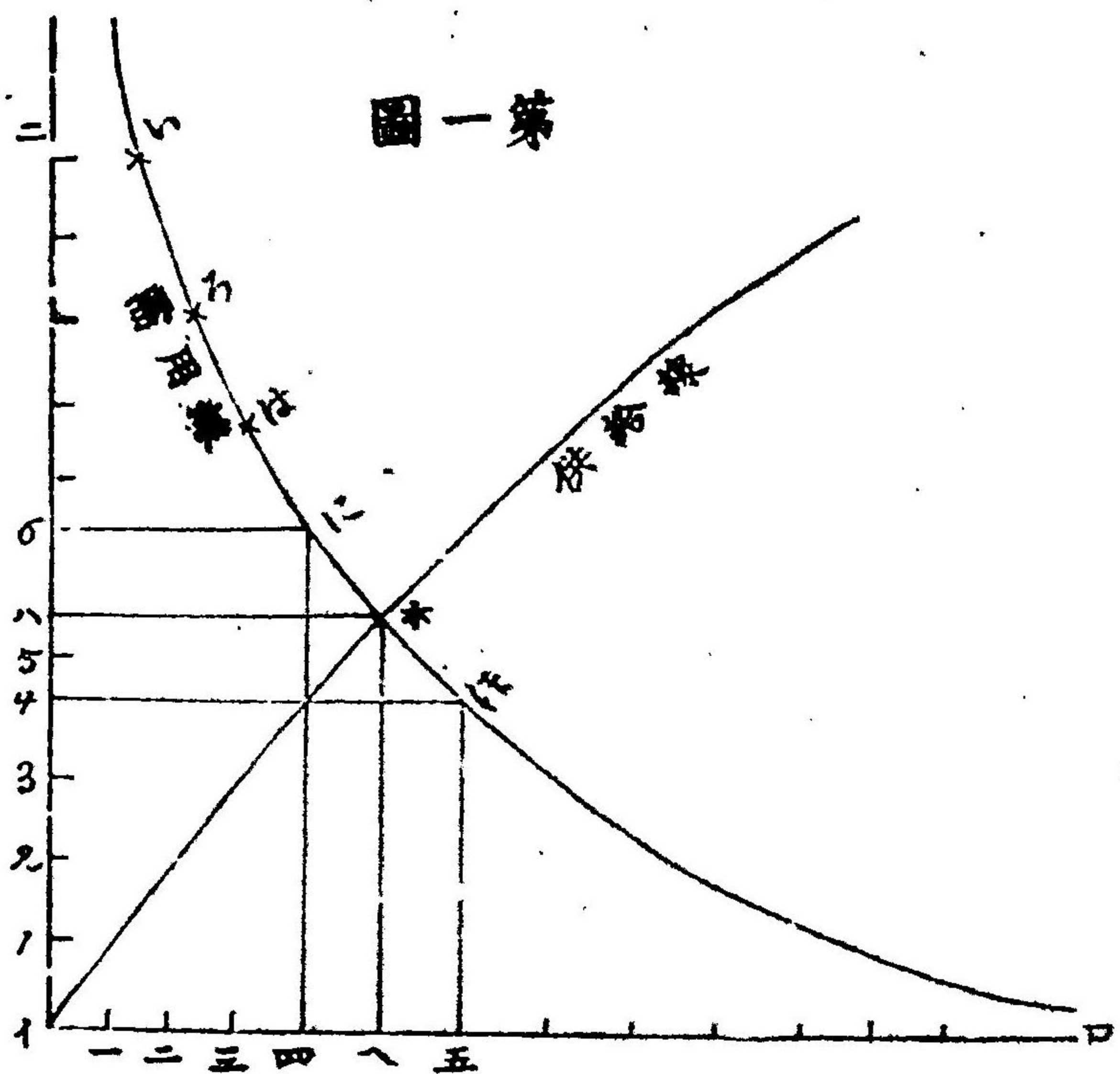
其缺を補ひ需給の關係をして穩當ならしめ、以て國民の消費力を養はざる可らざる哉論を俟たず

第三節 需用供給の説明

國家を維持經營するに方り、需給關係の重要な既論の如し、依て今一步を進め消費に關する事項を論ずるに先ち、大體に就き之が説明を試みるは、敢て無用の業に非ざるべし、請ふ少しく之を説ん

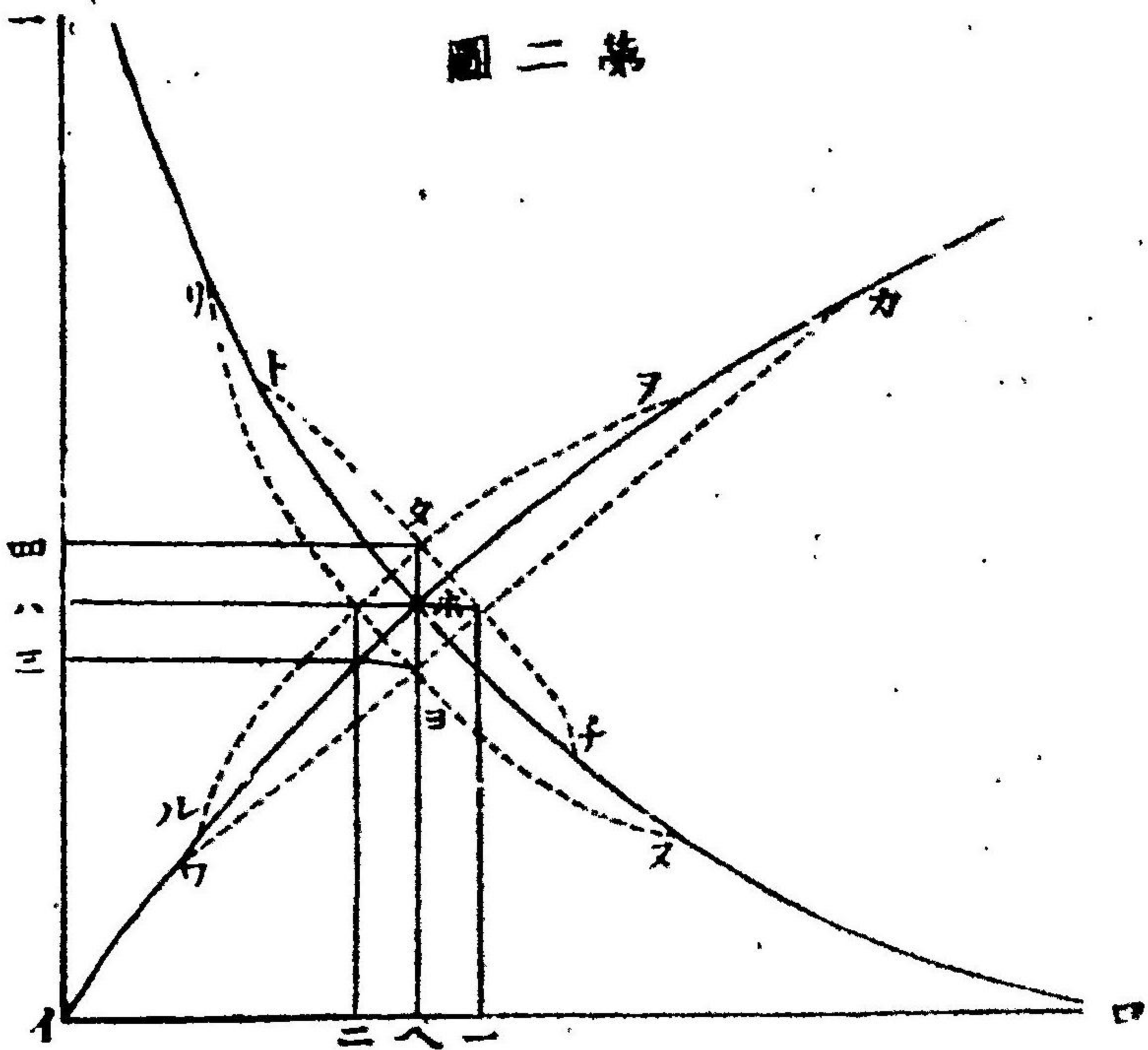
夫れ需給は相互に原因結果の關係を爲し、需用を充さんと欲せば之を得るの供給なかる可らず、而して供給は需用を以て目的とし、目的なきの供給は得て望み難し、西人之を論じて同體一物とし、需給は恰も満月と三日月との如く、月球に異體あることなく、只觀る人の地位に由り其形狀を異するのみと、蓋し至言と云つべし

兩者の素質夫れ斯の如し、然り而して其實際の運動は需給共に價格に依りて増減し、需用は其増加に従て減少し、供給は則ち増加す而して兩者の遭遇する所は則ち市價の定まる所にして、其不都合は需給兩者の爲め共に便ならず



請ふ圖解を以て之を示さん
 第一圖に於て「イ」の横線は
 價格を示し其位は「イ」より「ロ」に
 向て増進す「イ」の縦線は供給
 を示し「イ」より「ニ」に向て増進す
 「イ」の點に於ては價格零なるを
 以て需用は無限なりと雖も供
 給生せず價格「一」の點に進み「イ
 一」成れば最早需用は無限な
 ること能はず然れども其低廉
 なるが爲め僅かに「イ」の供給
 を生じ需用は「一」の高點にあり
 て供給は「一」の點に止まり僅か
 に「イ」の低位を保つを以て需

給遭遇せず價格「イ」成れば供給「イ」なるも需要は「ろ」にありて需給尙は
 符合せず斯の如く價格進むに隨ひ需用は順次に降下して「ホ」に至り供給は暫
 次に昇騰して「イ」即ち「ヘ」同分量となり此所に需給甫めて吻合し市價は
 即ち「イ」の位を以て定まる今試みに需給の情況には毫も變化なきに市價「イ
 五」となれば需用は「ハ」の點まで下降し「イ」の供給の外之を消費するを得ず「イ
 ハ」の供給は空しく生産者の手裏に残るべきを以て彼は生産費若くに損失を
 以て之が處分を爲さざるの可らざる悲境に陥るべし之に反し市價「イ」に止
 まれば需用は「ニ」の點に昇り「イ」の供給を取り盡すの勢と爲る然るに供給は
 「イ」に止まり「イ」又は之なきを以て當初の消費過は後日の供給不足の因と
 成り非常の困難を生ずべし需給の離合概ね斯の如し察せずんばある可らざ
 るなり
 又需給の變化より來る情況を示せば左の如し
 供給に變動なきに需用「ト」の點線の如く増加するとき「イ」の價格にて
 は需用「タ」の點に達し「イ」の價格を以て「イ」の供給を消費し盡すべし之に返



し需用「リヌ」の如く降下するとき
 きは「イハ」の價格にては需用は
 「ヨ」に止まり「イ三」の供給を以て
 消費を満足し「三ハ」の供給は生
 産者の爲め相當の利益を生せ
 ざるべく「イ二」の價格にあらす
 んば「イハ」の供給を消費し盡す
 に至らざるべし、又需用の情況
 變せざるに獨り供給のみ「ルヲ」
 の點線に隨ひ増進するときは
 「イハ」の價格にては需用「タ」の高
 點に昇り「イ四」の供給の消費し
 盡すに至るべく「イ二」の價格に
 て「イハ」の供給を取り盡すべし。

之に返して「ツカ」の點線に隨ひ供給減するときは「イハ」の供給を得るには「イ一」
 の價格を支撐はざるを得ず「イハ」の價格にては僅かに「イ三」の供給を得るに止
 まるべし、然れども「リヌ」「ツカ」の如く需給共に同比例を以て減少したるときは
 市價に變動なく、只「イ三」の如く供給を減じ「トチ」「ルヲ」の如く需給同比例を以て
 増加したるときも亦市價に變動なく同價格を以て「イ四」の如く増加したる供
 給を消費するを得べし、由是觀之需給の増減は價格に隨ひ、其變動は該當物品
 の價格に關係す、常識の示す所實地に現はるゝ所之を學理に照すに符節を合
 するか如し復た何をか疑はん、購ふ進んで消費の要領に論及せん

第四節 消費の區分

消費は之を大別して生産消費、不生産消費の二種と爲す、蓋し生産消費とは
 生産の爲め物品を消費するを云ふ例へば船舶を製造するに板、鐵、麻等を要す
 るが如し、此等の物品は敢て消費するに非すと雖も、之を造船の爲に使用する
 ば板は變じて船體、甲板等と成り、鐵は器械金具等と成り、麻は綱具等と成りて
 其元來の形を存せず、又造船に従事する各種の勞力者の使用する食品の如き

は全く消滅に屬すと雖も此消費なければ船舶を製造すること能はざるを以て之を生産消費者と爲す、農を以て之を論ずるも例へば農業者の五穀を生産するや種子肥料を使用し又勞力者を養ふ所の衣食住の消費を要す、此等の消費なければ生産の進行得て望む可らざるなり

不生産消費とは生産を目的とせず又生産的勞力者を養せず遊戯、逸樂等の爲に物品を消費するを云ふ、例へば遊山、野遊、花見等と稱し身體を養ふが爲に要する、外無用の飲食に耽るが如きは是れ即ち不生産消費なり、論者或は云はん此等無用の飲食を爲す人と雖も決して生産を輔けざるに非ず、何となれば此等の顧客あるが爲め飲食店の設置を要し、其設置あるが爲め飲食品等の需用を増加す可ればなりと、夫れ或は然らん然りと雖も是れ決して一國の利益に非ざるなり、請ふ少しく之を辨せん

是等の顧客なければ此等の飲食店を要せず其成立を見ざるは勿論なりと雖も之に使用する所の資本勞力は決して之なきが爲め使用を失ふものに非らず、其需用なければ他の生産事業に使用せらるべし、何となれば飲食店の需

用なければ當初より之に資本を放下せず、其高は他に使用を需めざるを得ず、或は之を銀行に預け入れ銀行は之を貸下け又は之を以て手形の割引に従事し大に一國の生産を補助するを得べく、或は之を直接に農工商生産の事業に使用することを得べく、又會社の株式等を買入れ以て實業を助くることを得ればなり、然るに前記の顧客あるが爲に生産の發達を鼓舞獎勵し得る所の資本は僅に菓子店、酒店に相當の利益を與ふるに止まり大に其効驗を失ふべし、無用の消費は生産に害あること斯の如きのみならず又國民の身體にも利あらざるなり、抑々遊戯、逸樂の事たる若し之をして身體を養ひ、精神を慰め以て國民の健康を増し其心神を高尙に赴かしむるに足るものならしめば一般進歩の爲め利あるは勿論、經濟上にも亦多少の裨益あるや疑を容れずと雖も、苟も此効驗なく之をして身體に益なく良心の耻つる所のものたらしめ、又無用の消費を誘導するの媒介たらしめば是れ即ち有害物なり、而して其消費は皆是れ不生産消費にして吾人の力めて避けざるを得ざる所のものなり

右の外時若くは事柄の消費、意思の消費、自然の消費と稱するものあり、蓋し

時及事柄
の消費

時若くは事柄の消費とは形は顯然と存すと雖も、時の経過したるが爲め又は或事柄の起りしが爲に事物の用を失ひ又は大に之を減するものを云ふ、例へば昨年の暦か今年の一月一日より其用を失ひ、昨日の新聞紙が今日は其價を失ひ、例令昨日通讀せずとも今日は昨日程の面白みを有せず、大部の書籍中一二冊缺本となり又は靴、手袋等其片雙を失へば殘部は存在して尙も其形を變せずと雖も大に其價格を失ふが如き是なり

意思の消費とは物品は尙も其形を變せずと雖も、人民の意思の變化に由り大に其價格を減少するを云ふ、例へば流行の變遷に由り同物品の價格に變動あるが如き即ち是なり、此類の消費の強弱は人民の性質に由り各國に於て非常の差異あり、佛國の如きは流行の變動を感ずること甚だ厚く、和蘭の如きは甚だ薄し、凡そ人民の流行に染み易きは其變化を好み、幾分か活潑進取の氣象あるを示すものにして、絶對に不利の性質に非ずと雖も、屢々流行の變更に遭遇せば之に關係ある物品の價格非常に變動し、工商其目的を誤まり或は不測の損失を被り或は僥倖の大利を得、以て多少投機空商の弊を醸成するは免れ

意及自
然の消費

能はざる所の勢なり、夫れ活潑進取の氣象たる人之を有用の事業に用ふるは眞に可なり、然れども漫りに之を流行物に用ゆるが如きは決して希望すべきに非ざるなり、自然の消費とは氣候、氣象の作用に由りて家屋、什器等を損ひ又は害蟲の災に由りて物品、作物を害ふ等を云ふ、實に熱帶地方の濕雨は木材を腐朽して木茸を生じ、器具爲に膨脹して微を生じ、其他莫大の損害を醸す、又害蟲の殿宇を覆し、蝗蟲の爲め飢饉を來たすは夙に世人の知る所なり

第五節 消費と生産との權衡

生産には消費を要し、消費は生産を以て之を支ふるは既論の如し、然らば則ち兩者の間に權衡を保ち、生産をして其目的を誤らしめざる程の消費なきを得ず、棉花耕作に對し相當の紡績事業あるか如きは最好の關係なり、今夫れ兩者其權衡を失ひ、百般物品中の或物の生産高にして之を消費すること能はざるの度に達せば、供給需要に超過し、忽ち其價格を減じ、生産者の爲め多少の損失を來たすべし、又或る物品の生産高にして之を他の生産品に比して少しとせば、其需用供給に超過し、價格騰貴し、其使用者に多少の不便を生ずべし、例へ

ば一國の人口資本の景況に由り十萬の家屋を要するとし石材木材其他の建築用品相比例して百疊敷の家屋十萬棟を建築するの消費に充て以て過不足なからしめは差支なしと雖も、獨り瓦の生産多きに過ぎ其供給のみ能く右の大きさの家屋十五萬棟を建築するに足るに至らば則ち瓦は石材木材等に對して其價格を失ひ其生産者は多少の損害を被るべし、之に反して瓦の生産高値に八萬棟の家屋建築に供給するに止まらば則ち其價格騰貴して建築者の損失を來たすべし、故に生産は消費の源泉なりと雖も不比例に或物品の生産を増加せば生産者の損失となり、不比例に之を減少すれば消費者の損失となる。

以上論ずる所の生産超過は是れ一部分のものなり、一般の生産超過は經濟上決して起らざる所の現象なり、何となれば曩に例せし百疊敷の家屋十萬棟を建築する場合に於て建築用品悉皆相比例して十萬棟の家屋を建つるに足るの供給ありしに更に進みて建築材料各種の供給に二割の増加を來たし、其他衣食に供する物品の生産も共に二割を増加せりとせば一方の供給増加は

一、一部の生産は過剰な
一、全体の生産は過剰な
一、一部の生産は過剰な

他方の消費力増加に由り悉皆需用せられ百疊敷十萬棟の家屋の代りに百二十疊敷の同敷の家屋又疊敷は増さずとも従前より二割方上等の家屋を建築するを得べし、由是觀之世人の所謂生産超過は一部分の超過なり、一般生産の増加は消費力を増加し大に質すべきものなり、故に恐るべきは只一部分の超過にあり宜しく戒むべきなり。

第六節 個人の場合に於ては消費を慎み

生産及貯蓄を貴ぶ

消費生産の關係輪車相待つの勢あるは既論の如しと雖も、元來生産は消費の源泉たるを以て生産少しく消費に勝ち以て其源を固くせざるを得ざるは論を俟たざるなり、方今の如く外國貿易の盛大なる時代に於て最も然りとす而して個人の場合を以て之を論すれば少しく前陳の論意と其趣を異にせざるを得ざるものあり、請ふ少しく之を辨せん。

前節に於て論ずる所の消費と生産との關係は全局面より之を論ずるものにして國民一般の生産力は其消費力となり其貯蓄は株券、債券若しくは銀行

の預金となり共に生産の資に供せらる。今個人の場合を以て之を論ずれば其消費を支ふるには必ず生産力なきを得ず、生産を多くして消費を少くすれば其差違は即ち貯蓄と成り、餘財愈々多ければ生計愈々寛裕なるは多辯を要せず、堯水九年湯旱七載の災野に青草なきも人に飢色なき所以のものは何ぞや、儉以て性を養ひ、静以て身を修むればなり、故に個人の場合に於ては力めて消費を減じ、生産を増加するに利あり、唯其消費を減ずるの限度は衣食住必要の必要を減じて其身體の健全を害するに至らず、又各人地位相當の裝飾を缺き以て社會の嫌厭を來たすが如きことなく、情誼交際の禮を缺き以て社交の利益を失はず、事業に缺く可らざるの器具、機械、材料を備へずして以て其生産力を減ずるが如きことなく、又神心の懋養、發達の道を塞ぎ以て心事の發揚を妨げざるにある耳、此限度を超へて消費を減ずるは一身上は勿論決して全局の利益に非ざるなり、而して個人の餘財は積みて以て社會の富となり、大に生産を補助す彼の銀行なるもの巨萬の金額を有し之を以て手形を割引し、或は生産事業に對し資本の貸付を爲すは大に生産の發達を資くるものなり、而して

資金使用
の三方法

其資は何の所より之を得るやを尋ねるに各人の餘財即ち其貯蓄を收拾するにあり、之を收拾して以て全局の消費と生産との權衡を保つを得べし、若し夫れ個人にして消費を増加し之をして其生産に超過せしめんか、饑饉忽ち來りて吾人を攻むべし、豈に恐れざる可んや、請ふ一例を設けて貯蓄の便なるを示さん

茲に金千圓を有する者ありとせん、之を使用するの道三あり

第一 之を養應等驕奢、逸樂の資に供すること

第二 之を庭園裝飾の如き不生産事業の資に供すること

第三 之を農工の如き生産事業の資に供し、又は之を銀行に預け、若くは公債證券の如き確實なる證券を購買すること

是なり、此千圓の所有者若し第一の道を選まば、唯八百屋、魚屋、料理人等に通例の營業所得を與ふるに過ぎず、此養應なくとも、彼等は早晚之を得べし、唯之あるが爲め、少しく早目に之を得るに過ぎざるべし、而して其消費する所の物は全く不生産消費に屬し、却て少しく其價格を増加するの理由ありて、生産勢

力者に供給する物を減少するの勢あり第二の道を選まば勞力者に食料を與ふと雖も是れ亦不生産勞力にして國家の生産を發達するに足らず第三の道に依らば或は直接資金(株券)に投ずるは其目的投機に非ざる以上は直接生産に従事すると同様なり何となれば株券に放下する金員は直に營業に使用せらるゝものなればなり)に生産を増加し年々其増加の度を進むるを得べく、又之を預金とすれば銀行より割引貸付の爲に之を支出し貯蓄者より見れば間接に生産を助け又は國家の事業を助け永久に其利益を傳ふることを得べし由是觀之個人の場合に於ては特に消費を戒め生産貯蓄を尊ぶべきは更に多辯を要せざるなり

第七節 貯蓄と吝嗇との別

個人の場合に於て生産貯蓄の以て尊はざるを得ざるや前節に於て論究せしが如し、即ち儉者は其身を正うし其心を清す然れども世に所謂吝嗇家なる者あり蓋し吝嗇とは義理を辨せず情誼を汲まず只管自己の爲に錢貨を愛惜するを云ふ是れ大に經濟の趣旨に反す經濟は目下の支出にして能く將來の

利益とならば固より之を辭せず義理情誼を盡すが如きは大に利益を將來に傳ふるものなれば決して之を爲すを不可とせず唯情に迷ひ原因結果の如何を問はず姑息に流るゝの弊を戒むる耳其貯蓄を勤むるか如きも前節に記する所の諸件を缺き尙ほ之を爲すべしと云ふに非ず唯冗費濫用を戒むるにあり孔子禹を云ふ飲食を菲ふして孝を鬼神に致し衣服を惡ふして美を駭冕に致し宮室を卑ふして力を溝洫に盡すと是れ眞の儉約なり吝嗇と儉約との差違斯の如し然れども之を冗費濫用と比するときは尙ほ或は恕すべきものありとす凡そ吝嗇の守錢奴は生前敢て一人を養ふより多くの物品を消費せず爲に物價を騰貴せしむるの虞なく其貯蓄若し銀行にあれば生産を資すべく之を公債に放下せば以て國家必要の費用を補助すべく之を株式債券(投機的に非ざる以上は)に投ずれば以て民業發達の資に供すべく之を私庫に藏するも其死後に至りて之を生産事業に使用することを得べし然るに濫費浪費を事とする者は生前に於ては徒らに一人の消費に必要なる物より多くを消費して約體なく甚しきに至りては不生産的遊民を養ひ死後毫も世に傳ふるも

のなく、其存する所のものは只負債のみにして、即ち其生産せし物と消費せし物との差減を殘す耳。吝嗇濫費共に經濟の趣旨に反すと雖も濫費に至りては最も害あり、獨り眞正の貯蓄は所謂福を惜む延壽の道にして個人に利あるは勿論延きて國家に益あり、努めずんばある可らざるなり。

消費の要項概ね斯の如し而して其源泉は即ち存して生産に在り生産の事固より大に研究せざるを得ざるなり、抑々生産事業は力を自然に藉らざるを得ざるもの頗る多く農業に於て最も然り、然りと雖も金融、運輸、通信機關等の如き人爲の施設を加へざるを得ざるもの亦少しとせず而して工業の如きは學術の應用、他人爲の施設に俟つもの最も多し、請ふ次章に於て其梗概を述べん。

第三章 生産

第一節 生産の釋義

生産とは新に貨物を産出し、在來の物品を利用するの道を發明し、又は之に人工を加へて其形を換へ其用を創成し、若くは増加する方法なり（ロツシエル氏の説に據る）。生産の物たる夫れ斯の如し、其新に貨物を産出するとは農夫が耕耘の術を施し五穀、野菜等を産出するを云ひ、在來の物品を利用するの道を發明するとは石炭、石油若くは藥草の如き天然物使用の道を發明し無用を變して有用と爲すの類を云ひ、在來の物品に人工を加へて云々とは本皮を以て紙類を製造し、土砂を變して硝子と爲し棉花を以て綿絲を造る等を云ふ、要するに生産は地球上已に成立せる物の效用を増し人類の満足を求むるの方法にして、其方法手段は之を人爲に藉るもの固より少からずと雖も之を消費分配等に比し經濟事項中其效驗を自然に待つもの最も多く、採集事業及農業の如きは即ち最中の最たり、故に其研究の要目甚だ多く、而して消費の源泉及

分配の目的物と成り國家の隆替に重大なる關係を有す、其要目を明にし其施設を全ふするは實に經國の要務、理世の秘訣たり、請ふ次に逐ふて之を説かん

第二節 勞力

第一目 勞力と資本、土地との關係併に勞力の釋義

生産に必要缺く可らざるもの三つあり、何ぞや、曰く勞力、曰く資本、曰く土地是なり、三者相待つて以て生産上鼎足の勢を爲す、蓋し勞力ありと雖も資本なくんば生産未だ了せざるに當り、以て其勞力を支ゆる能はず、資本ありと雖も土地、勞力なくんば終に之を用ゆるの所なし、請ふ勞力より之を論せん、凡そ大小となく一事業を爲すには必ず多少の腦力若くは體力を要せざるなし、書を讀まんと思せば必ず腦力を用ゐざるを得ず、畑を掘り、薪を割らんと欲せば必ず手足の勞を要すべし、此の如く腦力、體力を使用することを經濟學上名づけて勞力と謂ふ

第二目 勞力の種類

勞力を分ちて左の七種とす

勞力と資本
土地との關係

勞力の釋

第一 發見、發明

發見とは其物既に世に存在すと雖も人未だ之を知らざるに當り始めて之を見出すを云ふ、彼のコロンブスが米洲を見出し、フランクリンが電氣の大空に充滿せるを見出せしが如き即ち是なり、發明とは人の未だ爲さざる所のものを爲し、其尙ほ造り出さざる所のものを造り出すを云ふ、弘法大師が「いろは」の假名文字を造りワットが蒸氣機關を造り出せしが如き即ち是なり、蓋し發見、發明は勞力中最も貴重なるものにして、其世を利する亦悉くは此二者の右に出るものなかるべし

第二 採集業

採集業とは伐木、鑛業、漁獵の如く自然の天然物を採るを云ふ

第三 原料品の生産

農業、林業、採集業の伐木は只天然の木を伐るを云ひ、林業は樹木を培殖し、茸類、木實等の如き森林の副産物を收穫する等の事を爲し、只伐木を爲すのみに非ず、の如く製造品の元料と爲るべきものを産出するを云ふ、養蠶、牧畜

第二節 勞力 第一目 勞力と資本、土地との關係併に勞力の釋義
第二目 勞力の種類

の如きも亦此業に属す

第四 製造

埴泥を以て陶器を製し、木材、金屬等を以て器具、機械等を製するが如く、在來の物品の形を變ずるを云ふ

第五 土木

道路の開鑿、家屋の建築等一切の工事を云ふ

第六 分配

商賈が物品を運搬、賣買し互に有無相通じ、長短相補ひ又は消費者に貨物を賣却する等を云ふ、即ち輸入者、製造者、農業者等より卸賣商に貨物を賣御し、卸賣商より小賣商に小賣商より消費者に賣渡す等皆分配の業とす、土地、家屋等の貸附人、金貸營業人等も亦此類に属す

第七 義務、就業

役人、僧侶、教師、辯護士、僕婢等の如き者の勞働を云(以上ロツシエル氏の説に據る)

凡そ此等七種の勞力は互に相待ち以て生産の業を助く、蓋し農ありと雖も工なくんば農産に人工を加へて其用を増し以て人間高度の需要に應ずるを得ず、又工ありと雖も商なくんば農工の物産を其需要地に致すこと能はず其結果兩隣は飽食暖衣して北隣には饑饉凍餒の慘狀を呈するが如き弊を見るに至るべし、然らば即ち此等七種の勞力互に相待ちて甫めて國家の安寧を維持し、德義を厚ふし教育を盛にし、國民の健康を保全し、經國の事得て談すべし、若し夫れ否らざれば又何を以てか農工商百般の業を盛にすることを得ん

第三目 生産勞力及不生産勞力

各種の勞力が互に相助くる斯の如し、然るに學者中往々勞力を大別して之を生産勞力と不生産勞力とに二分し、彼の農工の如き直接に物品を産出し又は製造する者を以て生産勞力と爲し、役人、教師、醫師の如き間接に生産を助くる者を以て不生産勞力と爲す者多しとせず、然れども是れ唯其勞力の一圖營業上の直接間接の關係あるを示すに過ぎずして、役人、教師等の勞力を以て國より無用とするに非ざるなり、即ち役人は國家の安寧を維持し以て直接に生

産者と身體財産を安固ならしむるを務とし、教師は少年子弟の智識を啓き技能を磨き以て營業上新法妙案の發明を助け併せて其徳義心を養ひ以て相互の信用を厚くし、營業上に効驗を増加す、醫師は生産者の健康を保全し其病日を減じ以て勢力の効驗を増加す、然れども之を一般人口に比例し、此等間接生産者の數が不比例に多きは國家の慶事に非ざるなり、畢竟世に此等の勢力を要するは人間に免れざる不完全の事あるに由るものなれば、吾人は進みて人間最高度の地位に達し以て斯かる間接生産者の數を減少するに努めざる可らず、蓋し人智進まざれば迷信多く隨て僧侶を要すること多く、健康高からざれば醫師の數を増加せざるを得ず、悪人多ければ多數の法官、辯護士等を要すべし、古人云はすや一人を以て耕して百人食すれば其害を爲すや秋螟よりも甚しと實に至言と云つへし、故に國民をして性質の純良と身體の健康とを兼有せしめ大に間接生産者の數を減せざるを得ず、然らば則ち此等の人は其高尚なる教育と聰明なる智力とを以て直接に農工商の業に従事することを得べくして大に國家の富強を發達するを得べし、教師、醫師等の如き高尚なる事

不生産者
少力者の
減少

業を爲す者は寧ろ農夫及職工の如き直接生産者に勝るの功あれば之を以て生産上無用視することを得ざるには相違なしと雖も、畢竟是等の世に需用多き所以のものは人民の徳義、智力、健康が高度に達せざるに基むるもの多しとす、故に吾人は成るべく其原因を矯め人口に比例し直接生産者の數を増加することに努めざる可らざるなり

第四目 勢力の目的

勢力の目的は力めて徒勞を避けて其効驗を増加するに在り、故に勢力は之を有効要急の事業に用ふるを要し、之を無効不急の事業に用ゆ可らず、水を擔ふて河頭に賣り、雪を擔ふて共に井を埋む何の効か之あらん、彼の保護方策黨が時未だ到らず、漁利未だ盡さざるに農業を起さんとし、人口足らず土地餘ありて農利未だ收め盡さざるに既に工業を起さんとし、又煙草に適するの地に強て桑を植へ、麥に適するの土地に茶樹の培養を奨励し、以て番茶一斤を得るに大枚三弗を費し、而かも經營數年終に業成らずして空しく之を枯死せしめたるが如きは皆是れ米國の實例なり、是れ勢力を無効不急の業に費したるの

最も甚しきものと謂ふべくして、其經濟の旨趣に背戻すること實に大なるものなり、嗚呼勞力の使用上其方針を選ばざる可らざる所以のもの亦一に此に在り元來勞力の効用を増加せんと欲せば其之を用ゐんとするの業を選むこととの緊要たる論を俟たず、然れども其選擇の如何は時勢の狀況に因り千差萬別或は經濟上、財政上の思想を後にし、兵事政治上の急務を先きにせざるを得ることあり、或は一般の社會の進歩の爲め剰下の計算上の利益を犠牲に供し以て永遠の大利を圖らざるを得ることなしとせず、理世の要は千差萬別一片の理論を以て豫め之を座上に論定すること能はざるは論を待たず、然れども凡そ何れの場合を問はず勞力の効用を増加し得るの方法二あり講せざんばある可らず、其第一を分業とし、第二を勞力分類とす請ふ少しく之を辨せん

第五目 分業及勞力の分類

分業とは各就業者をして各々其分を守らしめ、心身共に其事に専らならしむるの方法なり、果して心身共に其業に専らなることを得ば人各々其術に精

分業

勞力の分

巧なるを得る期して待つべし、而して苟も其術に精巧なることを得ば善良なる貨物を廉價に製造することを得るや必せり、聞く彼の留針の製造に於ては同時に十人の勞力を用ゐて分業すれば以て一日五萬箇を製造すべく、分業せざれば以て僅に二萬箇を製し得るに過ぎずと、嗚呼分業の利益亦實に大なる哉、而して分業の發達したるものを勞力の分類と爲す、元來分業の利益たる前陳の如く夫れ大なりと雖も、單に分業と云へば男女老幼、強弱を問はず、甲者一業務に従事し、乙者他の一業務を爲せば以て其意に背かざるべし、然れども斯の如くしては男女老幼、強弱各々其固有の性質と長短とに従ひ業を分つを得ずして天與の長所を盡すを得ず、是等の特質と長短の存する所とに従ひ業を分つを勞力分類と云ふ、例へば留針の製造に於て針金を製造するにはば大なる腕力を要するを以て、之が爲には壯年の力量ある者を用ゐざる可らず、其針金を適當の長さに切るが如きは腕力を要せず、又非常の熟練をも要せざるが故に老幼と雖も尙ほ之を能くするを以て之が爲め壯年の力量者又は高價の勞銀を要する熟練家を用ふるが如きは頗る牛刀の憾なきを得ず、然れども針

の先きを尖らし又之に頭を付くるの業は熟練家に非ずんば得て之を爲す能はざるを以て之が爲には熟練家を用ひ、留針指しの紙に穴を穿ち又は之を入る、箱を張るには壯年男女よりも却て勞銀の廉なる婦女子に特長あるを以て之には婦女子を用ゆるを良しとするが如き等是なり、由是觀之男女老幼、強弱、熟練、不熟練等に因り各々其業を分ち以て小舟岸に在り大艦洋を渡るの利を收めざるを得ず、云つへし勞力分類は以て分業の最も發達したるものなりと

第六目 分業及勞力分類の區域

分業及勞力分類の利益大なること凡そ此の如し、然りと雖も一面市場の情況と營業の性質とに因り、一面社會一般の利益の爲め極端に之を推すこと能はざるものあり、抑々生産の目的は消費に在りて損失に非ざるなり、然るに世運未だ開けず需用尙は旺盛ならざるの社會に於て大に分業を施行するが如きことあれば之が爲に貨物の生産過剰を生じ一部の供給需用に超過して營業者の損失を來すべし、若し夫れ分業及勞力分類の法にして同比例を以て悉く各營業に行はれ、百般の營業者皆同比例を以て其供給を増加し、互に購買力を増進して相互の供給を相互に需用し盡すが如きことあれば決して損失を來すの恐なかるべしと雖も、斯の如きは假令同業者中たりとも決して實地に望むべきことに非ず、況んや百般の事業に於てをや、又農業の如きは決して工業の如く十分に分業を行ふこと能はざるものとす、例へば田作の種蒔に熟し之を以て専業とする者ありと雖も、晩春、初夏の候播種の時節を除くの外、春夏秋冬共に爲すべきの業なきを奈何せん、今若し種蒔の時節に於て此種蒔専門家に其以て一年を支へるに足る丈の給料を與ふること、せば徒に農業の勞銀を高くし、偶々以て農産の發達を妨ぐるに過ぎず、故に總て季節時期に依り勞働を異にする所の事業は彼の年中一人の勞力者引續きて同一の業務を爲し得る所の製造業斯の如く精密多岐なる分業を爲すこと能はざるなり、夫れ農は季節に依り又時期に依りて大に其業務を異にせざるを得ず、耕耘其時を異にし、晝夜其業を等ふせず、側ら牛馬を飼ひ、農間にありては或は山に樵り、耕を市に鬻ぐが如く、一身を以て種々異様の業を爲さざるを得ざるは世人の

一、比較的に實地を以て

一、比較的に實地を以て

く各營業に行はれ、百般の營業者皆同比例を以て其供給を増加し、互に購買力を増進して相互の供給を相互に需用し盡すが如きことあれば決して損失を來すの恐なかるべしと雖も、斯の如きは假令同業者中たりとも決して實地に望むべきことに非ず、況んや百般の事業に於てをや、又農業の如きは決して工業の如く十分に分業を行ふこと能はざるものとす、例へば田作の種蒔に熟し之を以て専業とする者ありと雖も、晩春、初夏の候播種の時節を除くの外、春夏秋冬共に爲すべきの業なきを奈何せん、今若し種蒔の時節に於て此種蒔専門家に其以て一年を支へるに足る丈の給料を與ふること、せば徒に農業の勞銀を高くし、偶々以て農産の發達を妨ぐるに過ぎず、故に總て季節時期に依り勞働を異にする所の事業は彼の年中一人の勞力者引續きて同一の業務を爲し得る所の製造業斯の如く精密多岐なる分業を爲すこと能はざるなり、夫れ農は季節に依り又時期に依りて大に其業務を異にせざるを得ず、耕耘其時を異にし、晝夜其業を等ふせず、側ら牛馬を飼ひ、農間にありては或は山に樵り、耕を市に鬻ぐが如く、一身を以て種々異様の業を爲さざるを得ざるは世人の

若く知る所なり、分業の以て均一に之を百般の事業に及ぼすことを得ざるや
又多辯を要せざるなり

若し又分業を極度に推すときは人類をして殆ど器械同様の境遇に陥らし
め其精心の情奮は勿論甚しきに至りては健康を害し天壽を奪ふの結果なし
とせず、思はずんばある可らず例へば茲に一人あり幼少より活版屋に備はれ
年五十に至るまで活字拾ひのみに従事し他に一事を爲さざりしとせんか、此
者固より其業には非常の熟練を得るに相違なしと雖も、人間の仕事とし云へ
ば活字拾ひの業を除くの外殆ど一事を知ること能はざるに至るべし、斯の如
きの人物社會に多きは決して好まじきことに非ざるなり、又茲に一人あり市
街の掃除を専業とし、數年此業に従事せりとせんか、此者亦下水掃除に非常の
熟練を得るに相違なかるべしと雖も、元來掃除業の如きは固より精巧勢力に
非ざるを以て之が爲め非常の熟練を要せざるや必せり、故に此者をして永く
自ら不健康なる事業を爲さしめんより、時々違ふたる人足を備ふ方便利なる
べし何となれば下水掃除の業たる一時之に従事するも敢て健康を害する程

極度の分
業に人
道に
害あり

の業にあらずと雖も、數ヶ年の久しきに涉り斷へず之に従事するが如きは頗
る不健康の業たるを免れざればなり、果して然らば分業を極度に推し人類を
器械の如くに爲し、又は其健康に害あるの度に及んでは、或は器械を以て之に
換へ、或は其分業の度を緩め或は爲に轉業を圖り以て此害を避けざる可らざ
るなり

第七目 高等事業の分業

如上は専ら手足の勞に關する所の分業に就て論せしと雖も、政治財政法律
醫術等の如き高等事業にも自から分業の利なきを得ず是等高等事業に従事
せる者にして各其分を守り、其學を講じ其術を磨き以て其業の進歩を計るは
勿論なれども、其事たる廣く他業と相關係し決して各自孤立するを得ざるも
のたれば、苟も普通の學を經過せずして當初よりは是等高等専門の學に入るは
又得策に非ざるなり、勿論資力、年齢其他已むを得ざる事故ある者が普通の學
を終ずして直に専門の學を修むるが如きは格別の事なれども、成るべくは普
通學を以て其學問の基礎を廣くし、然る後高等専門の學に入り深く其蘊奥を

高等専門
の學に
關する
に於て
は、上
に於て
は、可
能の
限
を
以
て
之
を
修
む
る
に
當
り

極めたる上にて高尙の事業に従事せんことを要す若し否らざれば自己の修めたる専門外に事業あるを知らず又他業の効力を解せずして之が爲め自己の事業を擴張する能はざるの虞あり故に分業は固より之を尊ぶべきも高等事業に至りては彼の一業は他業の關係を見るに及ばず専ら一科の學を修めば他は之を顧みるを要せずと云ふが如きは大に其當を得ざるものとす然れども一人にして各専門の學を修め各高等の事業に従事するが如きは到底人間の爲し能はざる所なれば先づ普通學を以て其學問の基礎を作り此廣き基礎の上に自己の専門を築くを要す家々の門路長安に通ず普通學科以て修めざるを得ず關係の學科亦其概要を知らざるを得ざるなり然れども縦合驛驢鼠を捉うるも則ち跛猫に及はず専門の學以て修めすんはある可らざるなり

第八目 日常及單價支拂法

茲に又勞力を用ゆるに日常及單價支拂法の別あり日常とは一日若干の勞銀と定むるを謂ふ大工の手間賃の如き即ち是なり單價支拂法とは仕事の出來高に應じ一箇若干と其勞銀を定むるを謂ふ疊屋が墨一枚の刺賃を若干と

定め出來高に應じて勞銀を受取るが如き即ち是なり今兩者孰れが利なりやと謂ふに其間互に得失ありて一概に一を取り一を捨つる能はず然れども要するに單價支拂法に據るときは製品粗造に流るゝの弊あれば精巧を尊ぶ所の物品に關しては日常を良しとて數量を目的とする所の物に關しては單價支拂法を良しとす又農業、獸類の皮刺等の如き事業には單價支拂を主張する者ありと雖も此等の事業に於ては通例日常の方却て便利なるが如し例へば一段歩の田地を耕さば幾許一段歩の稻を刈れば幾許一石の米を俵造りにすれば幾許と豫め其手間賃を定め置き出來高に應じて勞銀を與ふることゝせば大に其業を勵み頗る便利なるの想なきに非されども斯の如くするときには耕すときは深く鋤を打込みて十分に土を碎くことを爲さず刈るときは注意周到なるを得ず動もすれば穂を落し或は之を害ふの虞あり又俵造りを爲すときは勢ひ粗略の弊に流れ易く往々多量の米粒を地上に散失する等の如きことなきを保せず故に人口尙ほ未だ稠密ならずして耕地甚だ廣く只早く多量を受むるを貴び米粒の散失等は敢て之を意とするに足らずと爲すが如き

時期に於ては單價拂を便とすべしと雖も、農業既に高度に達したるの今日に於ては却て日當を以て便とす又彼の皮剥事業の如きも單價支拂にては勞力者が徒に數の多からんことを争ふて、動もすれば皮を破り害ふの虞あり、故に數量のみを貴ぶ時代に於ては多の場合に於て單價拂を可と爲すも、上等の皮革を要するの今日に於ては日當の方却て利ありとす

因に云ふ瓦斯管、水管等敷設の爲め地面を掘鑿する場合の如きは單價拂法最も便利なり、何となれば深さ何尺何寸廣さ何尺何寸と云ふ如く單位最も精粗の別を要せざればなり

第三節 資本

第一目 資本の釋義及分類

資本とは過去の勞力の結果にして未だ消費し盡さず以て將來の生産を資くるが爲に使用し得べき者を云ふ、而して其類分は左の如し(ロ、ン、ヌ、ル、氏の説に據る)

第一 土地改良の結果、即ち原野を灌漑し、鹽沼を疏通し以て水田と爲し、森林

を開拓して陸田と爲し以て耕耘の用に適せしむる等の類是なり、凡そ此等の改良は皆是れ過去の勞力の結果にして將來の生産を資くるものとす

第二 建物即ち住家、倉庫、器械室、商店等を云ふ、凡そ此等のものは又是れ皆過去勞力の結果ならざるはなし、然り而して住家なくんば資本家、勞力者の生活を保つこと能はざるべく、倉庫、器械室等なくんば將來の生産を資くること能はざるなり

第三 道具、器械及器具、是等も亦過去勞力の結果にして皆將來の生産を資くるに必要缺く可らざるものとす、蓋し道具とは鐵、鋸、錐、鋸等の如く直接に手足を以て使用する者を云ひ、機械とは米搗き機械、紡績機械等の如き者にし、て人力、蒸氣力、電氣力、水力等の如きは只運轉の原動力を生ずるに止まり、本源に於て之を用ふれば相傳へて他の部分に及び複雑なる組織と雖も容易に之を運轉するを得る者を云ふ、器具とは鍋、釜の如く直に或る用を爲すが爲に使用せらるゝ者を云ふ

第四 實用に供すべき家畜、家禽即ち鶏、豚、牛、馬の類を云ふ

- 第五 粗生産品即ち製造の原料に供すべき物にして棉花、地氈、材木等の類を云ふ
- 第六 助成品即ち紺屋の染草、獵夫の彈藥、農家の肥料の如く、其業に於ける目的物の一部分を構成せずと雖も、其者の力を假らざれば其業を成し、其目的物を得る能はざる者を云ふ
- 第七 飲食物即ち之を以て生産者が生産の業に従事し居る期間、其飢を支へる者を云ふ
- 第八 商品即ち商賈が其倉庫に蔵置し又は店頭に羅列して購買者を待つ物品を云ふ
- 第九 貨幣即ち交換の媒助、價格の標準として世上に流通する者
- 第十 無形資本即ち才智、藝能の如く之を使用して一身を立て又は國の財源を發達し得る者又は有名なる會社の得意の如き者を云ふ

第二目 固定及流動資本

資本の原理は概ね前陳の如し、而して之を大別して固定資本及流動資本の

二種と爲す、其所謂固定資本とは家屋、器具、機械等の如く一度之を設置せば久しく使用に耐へ消費甚だ遅緩なる者を云ひ、流動資本とは勞力者に勞銀を支拂ふ所の基金及原料品の如く一時の用に供し速かに運轉し、或は其處を換へ或は其形を變ずる者を云ふ、斯の如くして流動資本は勞銀基金及粗生産品の二類に細別せらる蓋し勞銀基金とは一國資本の總額中勞力者の報酬即ち勞銀の支拂に充つべき分を云ひ、原料品とは製造の原料と爲るべき物品を云ふ、然れども此場合に於ては原料品の購買に充つべき基金と見る方便利なるべし、請ふ今一國資本の成立を明にせんが爲め左に一方式を設けて之を示さん

因に云ふ勞銀基金の存在に就ては多少の議論なきに非ざるも其微妙深遠なる純理は暫らく之を論外とし方今の實況勞力者は其従事する事業の成品賣却代價の分配を俟つを得ず、就業中に資本家より勞銀の支拂を受け其生活に充るを以て勞銀は現實未來の生産の結果より出でず、一たびは現在の資本より支出せらる故に勞銀基金の實在は之を現在資本中に認めざるを得ず

〔ホ〕 勞銀基金
 〔ハ〕 流動資本
 十
 〔ニ〕 原料品
 〔ロ〕 固定資本
 =

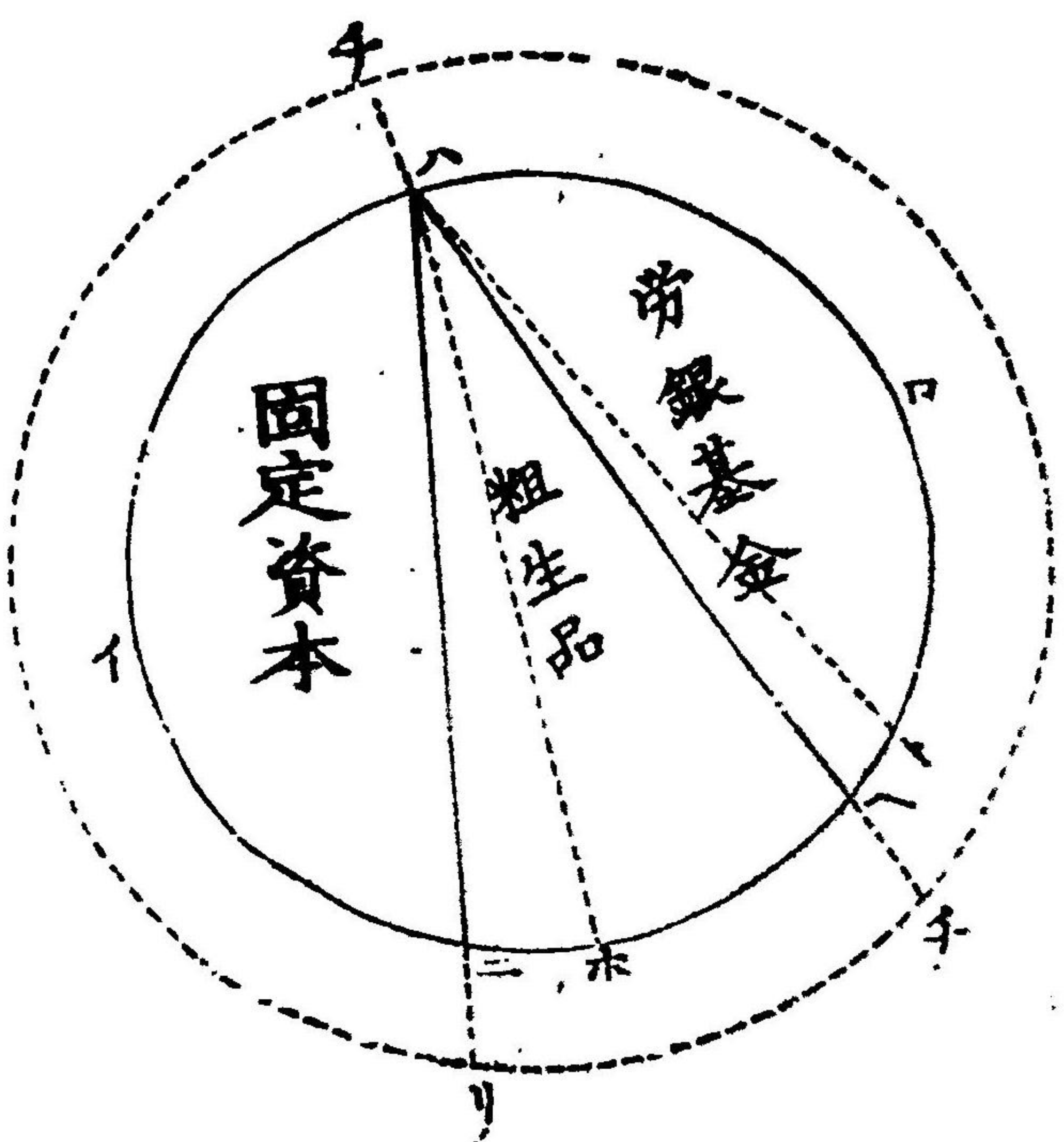
〔イ〕 一國資本總高

資本の區分せらるゝ情況概略斯の如し、此の方式中〔ロ〕〔ハ〕の關係即ち固定資本と流動資本との關係能く其比例を保ち調和して互に相翼くることなれば、生産の發達得て望む可らざるなり、是れ所謂霧海の南針、夜途の北斗なり、又何をか疑はん、例へば〔ロ〕が不比例に大にして〔ハ〕の内容殊に〔ニ〕即ち原料品の不足を告ぐるが如きことあらば、之が爲め却て一時〔ロ〕即ち機械の運轉を停止し又は既設の機械中其一半若くは三分一のみを使用し、他は皆徒に腐朽に歸せしめざるを得ざるが如き惡境に陥るなきを保せず、之に反し〔ニ〕が不比例に大なるときは爲に〔ロ〕即ち固定資本の缺乏を生ずるは勿論、〔ホ〕即ち勞銀基金も〔三〕

の爲に蠶食せられて機械勞力共に缺乏を來し徒に原料品を以て倉庫を充満し資本の運轉を遲鈍ならしむべし、又〔ホ〕が不比例に大なるときは之が爲め機械の進歩、原料品の改良に供すべき資本を缺乏、農工百般の事業は得て發達す可らざることゝ爲るべし、而して〔イ〕即ち一國資本總高の未だ増加せざるに假に〔ロ〕を増加するが如きことあれば、勢之を〔ハ〕に供すべき者より取らざるを得ず、隨て〔ホ〕の基金に缺乏を生ずるは必然の數なりとす、是に於てか其折角増加したる新設の機械も之が爲め其運轉を爲すの元資たるべき原料品を得ること能はず、勞働者も亦其勞力を試みるの所を失ひ巧妙の機械却て有害の障礙物と爲るの歎あるを免れざるなり、今事の解し易からんが爲め圖解を以て其然る所以を示さん

左の圖解に於て、イハロヘニの圖線書を以て一國資本の總額とし、圖線の書中〔ハイニ〕の部分で固定資本とし、〔ハニヘ〕の部分で原料品とし、〔ハロヘ〕の部分で勞銀基金とし、先づ其分配の模様にて資本の三區分其當を得たるきのとせん然るに、イハロヘニの圖線書依然として動かざるに、俄然〔ハイニ〕の部分を増加し

第三圖



力者の困難は勿論、甚しきに至りては或は之が爲め、勞力の效驗を失ひて終に

て「ハイホ」の部分を以て固定資本の區域とせば、原料品と労働基金との部分の減少は數の免れ能はざる所にして原料品は「ハホト」に、労働基金は「ハロト」に其區域を狭縮せらるべし、今若し原料品の部分を變せず又は新に増加したる固定資本の所要に應ずるが爲め此部分を従前より大に爲せるとせば、労働基金の部分の益々減少して勞

は資本家の損失となるが如きことなきを保せず、故に前陳資本三區分の比例を失はず、生産の效驗を減せず一國の經濟を紊さず以て安全に固定資本を増加し得るは唯一國の資本總額を増加するより他に方策の存するなし、即ち上圖に於けるが如く資本總額たる「イハロヘニ」の圓線畫を増加して「チリヌ」の圓點線畫と爲すときは以て右三區分は毫も其比例を失ふことなく、均しく増加して固定資本は「チリ」原料品は「チリヌ」労働基金は「チヌ」の部分を保つことを得へし、吾人の望む所のものは實に此増加にあり、資本總額は依然として動かす只其一部分に不比例の増加あるか如きは固より吾人の望む所に非ざるなり

第三目 資本の區分は事業の種類に由り其比例を異にす

資本の區分せらるゝは前陳の如しと雖も、其主として農業に用ひらるゝと工業に用ひらるゝとに於て分配の比例を同くせず、北米合衆國及濠洲諸殖民地の如く沃野千里に連り人口尙は稀薄なる國に於ては農利の盛なる論を俟たず、抑々農業は工業の如く高價の機械を要せずして其要する所のものは主

として勞力にあり故に是等の國に於ては勞銀基金の割合之を資本總高に比較して多からざるを得ず。白耳義、英吉利の如き國に於ては則ち然らず、人口餘りありて土地足らず、其工業の盛大なる蓋し勢の已を得ざるものあり、夫れ工業は巨大高價の機械を要し資本總額中固定資本の其重要なる部分を占むるは又數の免れ能はざる所なり故に前掲第三圖の如く資本總高増加するときは其増加したる部分は主として工業の爲に用ひられ、固定資本の區域其増加の大部を占め、原料品、勞銀基金の部分は只固定資本の増加を支ふるだけの増加を見るに止まるべし、之に反し其増加したる資本が主として農業の爲に使用せらるゝときは勞銀基金の區域に重なる増加を來すべし、果して然らば甲乙兩國に於て其資本總額は同額なりと雖も、其國重要なる營業の種類に従ひ又同一國に於ても資本總額の増加するに及び其主として農業に用ひらるゝと工業に用ひらるゝとに於て勞力者の利益に著しき差違あるものとす、然れども尙も資本にして増加するに於ては勞力の需要を増し、此増加したる資本は假令主として固定資本の爲に使用せらるゝも幾分か勞力の需要を増加す

べく、而して此増加したる固定資本をして其用を爲さしめば將來に於て大に資本を増加すべく、此増加は結局勞力の需用を來し其利益を増進するや論を俟たず、只其使用の方向に依り利益の度合に多少の差違ある耳

第四目 資本を得るの困難

資本は過去の勞力の結果にして未だ消費し盡さざる物なれば之が獲得は只勞力を施して之を得、之を生産するを以て足れりとせず必ず其得たる物を貯蓄せざるを得ず、然るに時草昧に屬し、農工の業開けず、人民食を山野水邊に求むる時代に於ては固より今日の如く前世貯蓄の餘澤を受け農の生産する物は工更に之が用を増し、工の製造する物は商之を其需要ある處に致し、事業連絡以て其生計を易くするの術あることなく、隨て獲れば隨て消費し、唯是れ衣食を求むるに汲々として未だ餘裕あることを得ざりしなり、而して貯蓄は目下現に得べきの快樂を棄て、其尙は知る能はざる未來の爲を計るものなれば、開明の人と雖も尙ほ或は之を難しとす、況んや未開野蠻の人民に於てをや、彼の亞米利加、亞弗利加等の土人が始めて耕耘の業を開明國の人に學びた

る頃に當り、五穀の種子を得れば即ち之を食食したるが如きは又以て怪むに足らざるなり抑々勞働は日常の生計の爲に之を爲すも尙且つ之を難しとす況んや事を將來に期し勞働の結果を貯蓄するに於てをや、其困難なる更に數層を加ふるものあるは言を俟たざるなり、然るに資本の蓄積は此兩者を兼要す其得易からざること知るべき耳、故に人智漸く開け未來の以て慮るべきを知り、制度文物漸く整ひ、節儉の結果を未來に收め得るの期望確乎動かす可らざるの世にあらざれば則ち貯蓄の念を喚起すること極めて難しとす、加ふるに其始めに於ては殆ど必要の衣食を缺き以て之を貯蓄せざるを得ず、資本増殖の難き夫れ斯の如し、然れども之を増進するの術亦自ら備はる、何ぞや教育を盛にして、人智の發達を謀り人民をして未來の以て慮らざるを得ざる所以を知らしめ、制度文物を整頓し以て資財の道を開き國民をして現在の勤勉節約の結果を將來に全くするを得せしむるにあり、果して然らば資本の増殖亦何ぞ之を難しとせん、夫れ資本の貯蓄は勞力と忍耐との結果にして、勞力、忍耐の獎勵は人智の發達と制度文物の整頓とに依らざる可らず、之を夫れ方めす

或は轉に一事業を偏愛し、或は勞力者に特惠を與ふるか如き(八時間勞働問題の如し)其他種々の奇策、怪説を唱へて以て資本の増殖、事業の擴張を謀らんと欲するが如きは是れ固より資本増殖の道に非ず、所謂木に縁つて魚を求むるの類にして只に其効なきのみならず、偶々以て世を惑はし民を愚にするに過ぎざるなり、人あり一説を唱へて資本の増殖、事業の發達を謀らんとするに際し其説果して勞力を獎勵し、貯蓄を誘導するの實あらば余雖則ち之に左袒すべし、苟も其實なければ是れ全く無用若くは有害の説たり、又何ぞ顧みるに暇あらんや

第五目 資本の効力

元來資本は生産將來の資に供する者にして、生産事業の進行中勞力者に衣食住を給し、工業の爲には原料品農業の爲には種子、肥料等を給するが如き、生産をして循環連絡以て間斷なからしむるは總て是れ資本の力なり、試に思へ餘寒未だ除かずして冬衣未だ重きを感せざるの日、商賈の店頭早や已に春衣を備へ、織機既に夏衣の製造を試み、製絲の機械は已に冬衣の爲に忙はし、事業

の循環連絡する夫れ斯の如し、而して其能く斯の如くなることを得せしむるものは是れ資本の力に非ずして何ぞや、資本缺乏するときは春衣を賣り盡したる後に非ざれば夏衣の製造を爲すこと能はず、又夏衣を賣却し畢るに非ざれば冬衣の爲め製絲機械の運轉に着手することを能はざるべし、農商の業に於けるも亦然り、農は春夏の候其田を耕し其稻を養ひ餘りに收穫の終るを待ち、商は貨物を千里の外に送り春然として其收利を期することを得るせのは過去の勞力と節約との結果即ち資本の力に頼らずんばある可らず、由是觀之資本は事業を連絡し、之をして循環其時を失はしめず以て生産を増加し、國家の發達を助くること多大なり、是れ之を以て生産上三大要件の最と爲す眞に故あるなり

第四節 土地

第一目 土地の意義及其必要

生産に缺く可らざる第三の要件を土地とす、蓋し土地とは原野、山林、沼澤、河川、海洋及其包有物を總稱す例へば茲に一國あり例令資本に富み人口亦稀薄

なりとするも、若し耕すべきの原野なく、採伐すべきの森林なく、採掘すべきの鑛山なく、獵すべきの山野、漁すべきの河海なくんば資本も放下するの途なく、勞力も用ゆべきの處なきを奈何せん、土地の生産に必要な多辯を要せず、然れども若し始めよりして右の如く耕すべきの土地、獵すべきの山野、河海全く之なきに於ては固より人口の増殖、資本の蓄積得て望む可らず、人口、資本の事得て論すべきに非ざるなり、然りと雖ども其已に一國を成したる後に於て、人口資本共に餘りあるも土地足らざるが如きことあれば頗る不便を感ずるものなしとせず、彼の英國、白耳義の如き即ち是なり、故に工商を盛にし以て其不便を避く、就中白耳義の如きは人口最も稠密、全國平均一英方哩五八九人、西曆千九百年他國の棄て顧みざる土地と雖も尙ほ能く資本、勞力を加へて其耕耘を務むるは人の熟知する所なり、即ち彼のフランドルス海岸に沿ひたる砂地の如きは殆ど砂漠に類し草木も得て其生を保つこと能はざるの瘠磽の土地なりと雖も、白耳義人士の勵勉なる尙ほ之を棄てず、初め先づ之に「ブルーム」樹(漢名金雀花、灌木にして黄色の花あり能く砂地に産す)を植付け其根に依りて

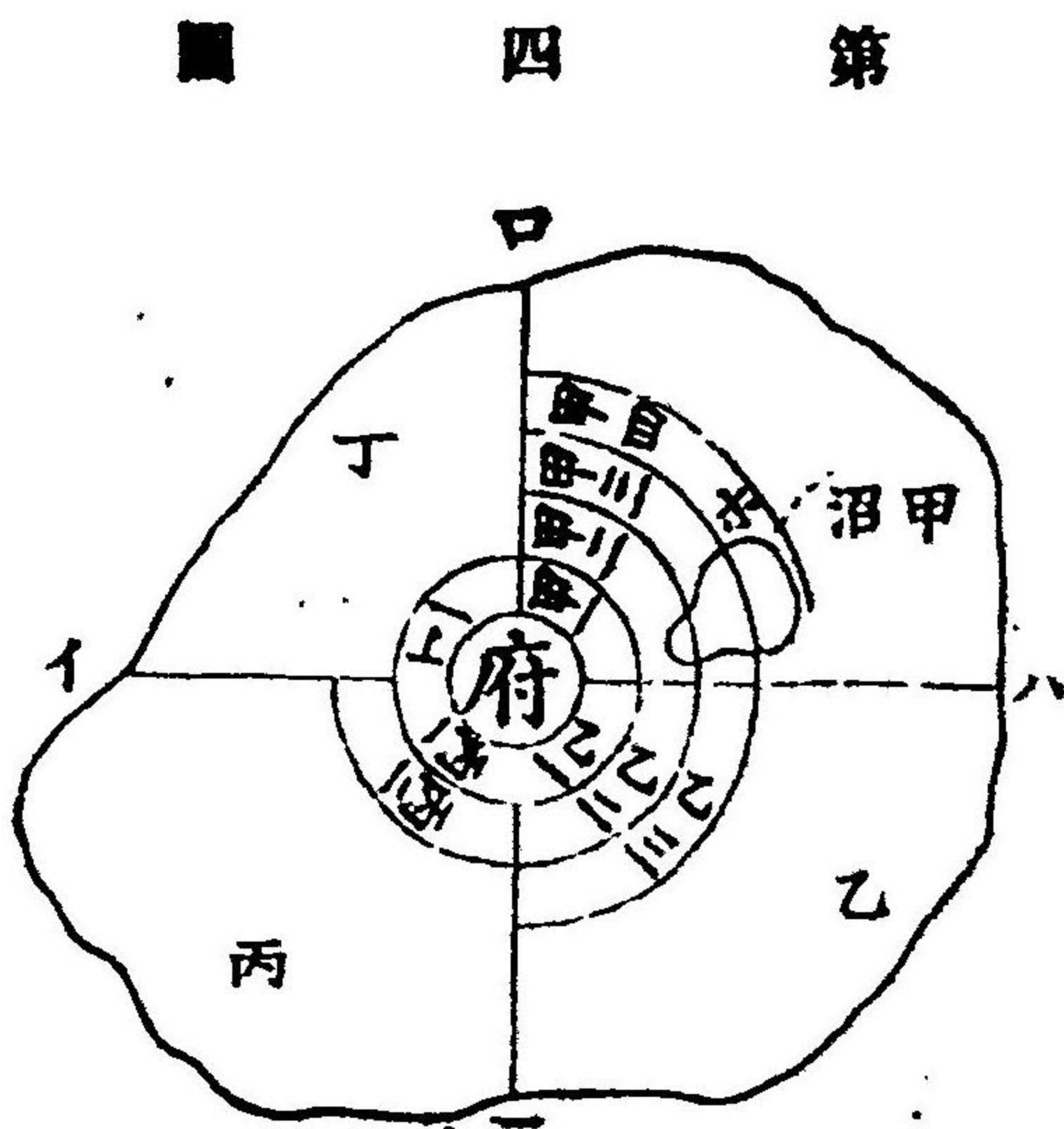
砂を固め、其葉腐朽して其地の肥へるを俟ち、藪に植付けたる「ブルーム」樹は之を耕とし、多少の肥料を施して蔗を培養し、其地に羊家を放牧し之に此の蔗を與へ以て動物的肥料を地上に散布せしめ、其地の一層肥へるを俟ちて初めて之に麥を耕作す、其勞實に想ふべきなり、之に反して北米合衆國の如きは固より土壤廣大にして沃野千里に連なり、斯の如き土地は棄て、之を顧みず只膏腴の地を選びて之を耕作する耳、是を思ひ彼を思へば生産上土地の關係國情に依りて異なること思ひ半ばに過ぐるものあり察せずんばある可らざるなり

第二目 土地の生産力

凡そ土地の生産力は地味の肥瘠に由りて厚薄あること勿論なりと雖も、單に土地の養力のみを以て之が生産力の多少を斷す可からず、其經濟的地位も市場と交通するの難易及資本勞力の景況等亦以て之を考察せざるを得ざるなり、元來生産力とは生産物が其生産者に利益を與ふるの力を謂ふ、試に今唯其の地味の膏腴なるのみを以て生産力多しとせんか、亞非利加洲、若くは南

亞米利加洲の中央の如き其草木の繁茂する、禽獸、蟲蛇の多き其最たるもので云はざるを得ず、耕作を以て之を例せば、メキシコの或る地方の如きは一家の主人僅かに一週二日の勞力を以て能く一家數口を養ふに足る、其生産力實に驚くべし、是れ他なし元來同地方は芭蕉實を消費すること多く、芭蕉の實は廣袤相均しき土地に之を耕して麥に比して其收穫能く二十五倍の人口を養ふに足ればなり、而して其耕作は之を麥に比して其難易固より同日の論に非ず、只新芽を發する季節に幹根の四周の地を少しく軟柔ならしむれば則ち足る由是觀之、其地方土壤の豐饒なる地球に恐くは其右に出づるものなかるべし、然れども今若し此等の土地に至り五穀を耕し以て之を開明國の市場に屬がんと欲せば、當初資本、勞力を之に移すことの難きと、收穫物搬出の不便なるに由り、非常の高價を求めざるを得ず、果して然らば勝を市場に制すること能はずして、忽ち敗を招き以て損失を來すや必せり、是れ地位の便不便は土地の生産力に大關係ありて、地味膏腴の一事のみを以て其功を全くする能はざる所以なり、斯の如きは固より極端の例を示すものにしては稀有の場合なり

と雖も、理に於て敢て妨げなく又一國一郡にても前陳の理は十分に其働きを
示し居るものとす、請ふ今圖解を以て其然る所以を示さん



左の圖に於て「イロハニ」の廓内を一國とし、其中心に人民集團して一府を爲すものと假定し而して其土地を豊饒の度に因り甲、乙、丙、丁の四等に區別するとせん、然らば即ち第一に市民の耕すべき部分は甲等の土地にして府内市街に接したる「甲一」の部分たるべく、其人口漸く増加するに隨ひ「甲一」の地を以て之が衣食を支ふるに能はざるに至るときは「乙二」又は「甲二」の部分耕作すべし蓋し、乙等の土地は其豊饒の度に於ては固より甲等の土地に及ばずと雖も「乙一」は其府内市街に接するの故を以て「甲二」よりは運搬の便あれば「甲二」の豊饒なるも

「乙二」に比しては土地の遠隔なるを以て其收利の力「乙一」に越ゆること能はず故に「乙一」と「甲二」とは生産者の爲め同一の地位に立つものと謂ふべし、又人口更に増加して「甲一」及「甲二」若しくは「乙一」の地を以て其衣食を支ふること能はざれば「甲三」「乙二」若しくは「丙一」の地を耕すに至るべし、是れ「丙一」は前陳の理由に因り生産者の爲め「乙二」及「甲三」と其收利の方を均しくすればなり、而して人口更に一層の増加を告るに至りては「甲四」「乙三」「丙二」若しくは「丁一」の地をも耕やさざるを得ざるべし、之を要するに耕作の地積は一國人口の増加するに従ひ土地豊饒の度と其位置の便利とに因りて漸次に擴張するものとす、是に於て土地の生産力は只地味膏腴の一事を以て之を決すること能はざる所以を知るべきなり

然れども土地の生産力を断するには資本、勞力の景況亦以て考へざる可らざるものあり、請ふ其然る所以を説かん、例へば前記の圖中甲等の土地中に「カ」の如き一沼ありと假定せよ、若し此沼を疏通し以て其地を水田と爲さば其膏腴なる蓋し此田地の右に出つるものなかるべく、且つ右の例に據れば此沼は

又府内市街に遠からざるか故に、果して之を水田と爲すに於ては非常の収益あるに相違なかるへし、然りと雖も元來沼澤を疏通して水田を開拓するか如きは多少の歳月、巨額の資本、勞力、精巧なる藝術等を要する所の事業なれば、其未だ資本、勞力の供給裕かならず且つ測量、治水等の術未だ十分に開けざるの時代に於ては開墾の如く目下の收穫なく未來の收利を期する所の事業を企圖するは頗る困難の事業なるを以て、只其沼の周圍を耕すを以て満足せざるを得ざるの已む事を得ざるの情なしとせず、是等の事情あるを察せず資本、勞力未だ裕ならざるに已に此等の改良に着手するか如きことあれば却て目下衣食の急に迫り終に中途にしに其事業を廢せざる可らざるに至らん又原野の灌漑、森林若くは山岳を隔てたる土地の開墾等總て巨額の資本、勞力を要するものは假令其地味は現在の耕地より數等膏腴なるも未だ以て直に之を耕すこと能はず、資本、勞力の増加を俟て精巧なる藝術の補助を得、尙且つ運搬の便に依らざる可らず、由是觀之資本、勞力の景況も亦土地の生産力を斷するに重大なる關係を有する所以を知るに足るへし、即ち土地の生産力は地味に肥

瘠、地位の便否、資本、勞力の景況如何に由りて定まるものと謂ふべきなり

第三目 收穫遞減の法則

夫れ土地は能く草木を養ふの力ありと雖も、之に人工を加ふるに非されば以て吾人の用に供するに足らず、即ち之を耕し以て耘り、之に播種し以て培ふ等皆是れ人工に依らざるはなし、之を稱して耕耘の業と云ふ、而して之を爲すには農具、種子、肥料等の資本なかる可らず、又勞力なかる可らず、以て之を土地に施し茲に資本、勞力、土地の三者相待ちて耕耘の業甫めて成るものとす、然れども土地の生産力亦自から限度あり、假令之に際限なく資本、勞力を加ふるとも決して其割合に之か收穫を増加すへきものに非ざるなり、例へば農夫の勤勉なる者は一人の力を以て年中斷へす一町歩の土地を耕し、之か作物を彼れ是れ轉換し、交互之を植換へ以て寸間も土地を遊はせることなくして甫めて最大の收利を得るとせん、果して然らば一人に付き耕地一町歩を超過せば農夫の力足らざるべく、一町歩に足らざれば全力を盡すに處なし、更に一例を設けて一國の人口尙ほ稀薄にして五町歩の土地に一人の農夫ありとせん、此の

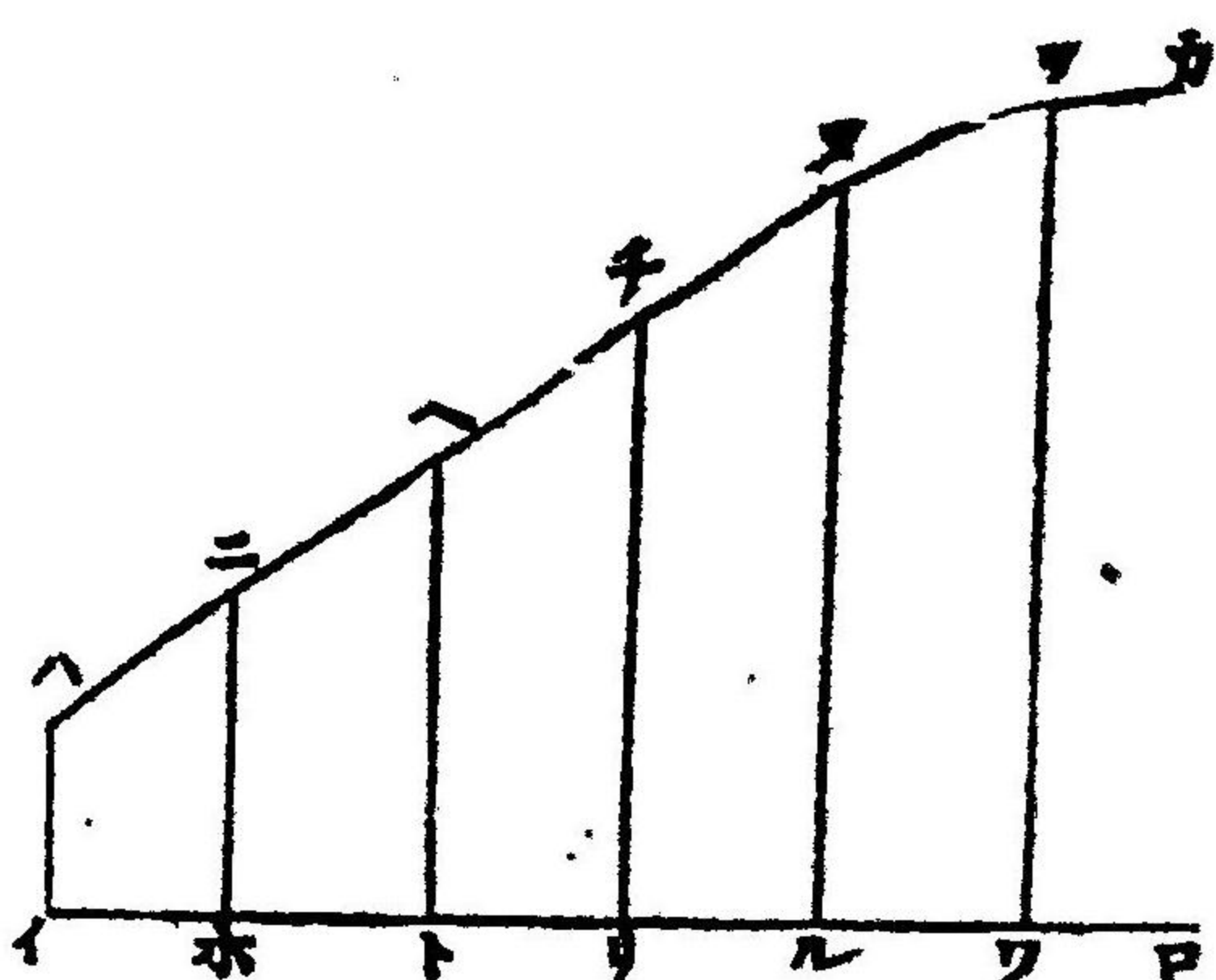
如き時期に於ては人口其一を加ふる毎に農産物を増加すること一人の全力を盡し得る丈けに達すべく、換言すれば五町歩の土地に五人の耘夫を出すに至るまでは耕夫一人を加ふれば其れ丈け土地の生産力を増加し共同の力更に其増加歩合の大なるを得べきなり。然れども人口漸やく増加し一町歩に二人若くは二町歩に三人の耕夫あるに至れば勢力餘りありて土地足らず、一人の勢力にて耕し得べき地面を一人半又は二人にて耕さざるを得ず、夫れ一株の稻は之を二株にするを得ず二本の大根は之を同一場所（一）に植ゆること能はざるなり、只少しく好くし能ふは従前より深く土を堀り、精密に土塊を碎き、草を抜き、害虫を除き、培養十分なるを得るよりして幾分か稻穂若くは大根を大ならしむることを得るに止まるべし。肥料の分量に於ても亦自から限度あり徒に之を増加するも收穫を増すべきものに非ずして過量の投肥は却て作物に害あり、例へば三百キログラム（二）キログラム（三）は凡そ我が二斤半（四）の「グツノ」を「グツノ」は海島の糞にして白露國の名産なり、用ゆれば三年の間に「エクタール」（五）「エクタール」は凡そ一町に當るに付き乾草の收穫二千四百六十九キログラムを

増加するを得べきを通例とす、故に今六百キログラム（六）の「グツノ」を用ゆれば收穫は右に倍したる増加を爲すべきかと云ふに決して然らず、其肥料増加の割合に收穫を増加することを得ずして僅に二千八百七十キログラム（七）に増加するに過ぎず、又鹽を肥料に用ふる場合に於ては四十キログラム（八）を極度とし若し其極度以上に及べば分量を増加する毎に收穫を減じ、分量愈々増加すれば收穫愈々減少し終に土地をして耕耘の價なきに至らしむ、是れ農學上の實際に依るものにして本論の資とするに餘りあり

由是觀之土地の生産力は自から限度ありて徒らに資本、勢力の多きを加ふるも正比例を以て際限なく其生産力を増加し得べきものに非ざるなり、只資本、勢力の使用を増加し耕耘益々其精を加ふるときは幾分か其生産高を増加し得べきも、苟も人口と土地との割合にして前記の比例に達せし以上は假令資本、勢力を倍すとも之を以て最早當初の如く其生産高を倍するに至るが如き増加を見ること能はず、之を名けて收穫遞減の法則と云ふ、蓋し學問上法則とは萬世を経て變せず、事正に斯くあるべしと定むるものを指して云ふなり、

而して之を遞減の法則と云ふ所以のものは前陳の如く資本、勢力の使用は之を増加し得るも其増加の割合に收穫の増加せざるに由るなり、踏ふ今一圖を以て遞減の景況を示さん

第五圖



上に達せしときは生産高へトと成るべく、人口四人即ち「イリ」に達せしときは生産高「リ」と爲るべく、人口五人即ち「イル」に達せしときは生産高「ル」と爲る

上の圖に於て「イロ」の線には人口を盛り「イ」より「ロ」の方へ一段一段に人口の數を増加するものとし「ハイ」「ホニ」等の線は生産高を示すものと假定す、今人口の割合五町歩に一人の耕夫ある場合、即ち「イ」の位に居るときは其生産高は之を「ハイ」とせば、人口増進して五町歩に二人即ち「イホ」に達せしときは生産高「ニホ」と爲るべく、人口三人即ち「イト」に達せしときは生産高「ト」

べし、斯の如く人口漸次に増加して此點に達するまでは勢力者一人を増加する毎に各々其全力を盡して生産に従事することを得べしと雖も既に此點に達したる上、尙ほ多く勢力者を増加するとも之に従事する勢力者は最早其全力を盡すこと能はざるに至り、生産の高は「ワ」の如く僅に増加するに過ぎず今「イハ」「ニホ」等の線の上端に一線を施せば「ハカ」の孤線を得べし、是れ生産の増進を示す所の線なりとす、此線の「ハ」より「ユ」に至るまでは生産高、勢力に比例して増進し、勢力倍すれば生産の高も亦倍加すべしと雖も「ユ」より先きに進めば最早勢力者の増加と同一の割合にて生産高を増加するを得ずして唯「ユカ」の如く微々たる増加を實地に見るに止る耳、夫れ人は其父生んで而して師之を教ゆ、父養ふ能はず師教ゆる能はざる所の人口は國を損ふ察せずんばある可らざるなり

第四目 收約的及粗放的耕作

土地の生産力に限度あること既論の如し是に於てか人口漸く増加し土地乏しきを告ぐるに方り第四圖に例せし「丙二」「丁一」等の如き劣等の土地と雖も

之を耕耘に用ひざるを得ず、又「甲一」「乙二」の如き優等の土地を有する者と雖も人口の増加第五圖に掲けたる「イル」以上に達せば、其上人口増加すと雖も新地の以て耕耘に供するものなく其所有地を餘さず四隅に至るまで悉皆町噺に之を耕さざるを得ざるなり耕作の景況此の如くなるに至れば之を脱して收約的耕作と云ふ即ち耕作の高度に達したるものなり方今歐洲諸國(露國を除く)の農況既に此極點に達せり其工商の業を奨励せざるを得ざること亦宜なりと謂ふべし之に反して人口足らず土地餘りあるの時期即ち第五圖に於て示したるが如く人口尙ほ「イト」「イリ」に止まりて未だ「イル」に達せざる間は土地廣濶なるを以て劣等の地は之を耕すを要せず優等の土地と雖も各自所有の田畑を四隅に至るまで間隙なく耕作するの勞を厭ひ、唯其中央の最も耕し易き所を耕し、餘力あれば更に新地を取り又其中央の最も耕し易き所を耕すを便とす、斯の如き農況を稱して粗放的と云ふ、即ち耕作尙ほ寬度に止まる者にして、米洲諸國の農況の如き即ち是なり、斯の如きは一見粗漫なるか如しと雖も決して然るに非ず、唯人口土地の關係に由り經濟眞理の作用を實地に示す

もにして固より其所とす

第五目 大農及小農の便否

農産品は概ね食品及原料品に屬するを以て大農的に其生産を爲すに便利あるか如しと雖も、葡萄酒、藍玉の如きは原料品の不良に由り非常に其價格に影響するものなれば、葡萄酒、藍草等の耕作の如きは最も注意を加へざるを得ず、然るに之を非常の大仕掛に爲して手入、監督行届かざるか如きことあるときは品質精良なることを得ずして之が爲め却て耕作者の損失と爲ることあるへし、故に此等の耕作には却て小仕掛を用ふるを可とす、其能く大農的仕掛を用ひて便利なることを得るものは雜穀、蕪草等の如く粗大の物品の耕作是なり、蓋し此等の耕作は特に精巧の勢力を要せずして大に機械力を使用することを得へく、且つ其監督者も馬上にて東西に驅け廻り以て一人にして廣く勞方者の監督を爲すことを得へければなり、之を要するに品質を第一とし、分量を次にするか如き農産品の場合に於ては小農的仕掛を便とし、分量を第一とし、品位を第二とするか如き農産品は無論大仕掛を可とす、故に耕作を

爲すには宜しく物品の種類性質に由り仕掛の大小を決すへし、然れども凡そ事業は之を大仕掛にて爲せば生産費を減少するものなれば彼の品質を以て第一とする物品と雖も、資本家、勞力者と収益を分ち共同法の如き法を設けて兩者の利益を一にせば勞力者の粗漏怠慢よりして其生産物の品質を貶するか如き弊を避くるを得べくして大仕掛に其業を營むを得へし、蓋し共同とは後に詳説する所あるべしと雖も之を略陳すれば勞力者に當然の勞銀を與へたる上若し資本の利益にして例へば五分以上に昇れば其五分以上の分の幾分を割きて勞力者に與へ以て資本家、勞力者と營業の収益を分ち其利益を共にするの謂にして生産の効驗を増加する上に於て多大の効力あり

第五節 生産三要件結合の必要

第一目 結合の實況

以上論ずる所を以て之を觀れば勞力、資本、土地の生産に要用なるや疑を容れず、三者相待ちて鼎足の勢を爲し其内孰れか一を缺くに於ては生産の業成り難し、其之を全ふするは實に經國の要務なり、夫れ英國は世界の富國にして

其資本に富むこと四界に冠絶す、而して勞力に亦乏しからず、然るに之を人口に比して土地缺乏し食品供するに足らず之を外國より輸入し以て其不足を補ふ就中麥の如きは其消費高過半を輸入に仰き、細民の生計は之を北米合衆國其他の新國に比し稍々困難の狀なきを得ず、元來英國の勞力者は合衆國の勞力者に比して勝るものあるも劣ることなし、然るに尙且つ此狀を呈する所以のものは食品の廉ならざる之が一因たらずんばある可らず、北米合衆國は新開の國にして沃野千里唯人の之を拓くを俟つ、近年に至り資本漸やく増加し勞力は尙ほ古國の如く夥多ならずと雖も亦特に之か缺乏に苦まず西印度諸島の英國殖民地の如きは土地固より餘あり、而して資本は之を母國に仰きて其供給に苦まず、然れども曾て一時は勞力足らずして土地漸く荒蕪に歸せんとするの勢を呈せり、是れ蓋し該島諸地に於て自然の人口乏しきが故を以て然るに非ず、全く西曆千八百三十三年英國政府が非常の英斷を以て奴隸制度を廢せしに由る

元來彼の奴隸業の如きは其愚昧なる殆ど獸類と伍を同くし生計の度甚だ

低く値に飢渴を凌ぐを以て足れりとする、而して西印度諸島の地たる固より天産に富み草根木實以て彼等の口腹を満足せしむるもの甚だ多し、彼等一たび解放に遭ふて自由の身と爲りしより唯逸樂に耽りて勞を執るを好まず、假令高價の勞銀を以てするも能く彼等の勞力を誘ふに足らず既に奴隸たるに非ざる以上は鞭撻以て彼等に勞働を強ゆるを得ず、然るに西印度の氣候たる彼の亞弗利加人種なる黒奴は之に介意せずと雖も、白哲人種の如きは固より熱帯地方の勞働に堪へず、厚報を以て之を誘ふも尙且つ之を得るを難しとす、是に於て乎終に人口ありと雖も勞力の不足を生ずるが如きの奇觀を呈せり、抑々奴隸の制度たる人類を以て牛馬視するものなれば其不道理なるは固より論を俟たず、早晚之を廢せざる可らざるは論なしと雖も、其尙ほ土地廣潤食品餘りあるの時期に於ては奴隸は生産上の利器たる敢て疑を容れざるなり、故に其制度に寛嚴の差ありと雖も、此時期に於ては世界中何れの地に於ても奴隸制度の行はれざるもの殆ど稀なり而して人口漸やく増加し食品漸く貴きに至りて其制度自ら消滅するを通例とす、歐洲古代の歴史、北米合衆國北方の

景況等此事の慮ならざるを示すに足れり、然れども彼等需用の低き一たび鞭撻を免るれば之を幸として勞働を厭ふこと彼の西印度黒奴の如くなるは又以て怪むに足らざるなり、故に之を解放するにも自ら時期あり尙も救へずして慢然之を放つが如きは慈惠に似て則ち然らず恰も市に赤子を放すに異ならず、却て之が爲め彼等の不幸を惹起し其極終に一國の經濟に影響せざるを得ざるなり、察せずんばある可らざるなり

第二目 三要件勢力の差違

之を道理に質し之を實地に驗するに勞力、資本、土地の生産に要用なるは大畧前陳の如し、然れども開明の度に依り三者の勢力自ら差異なきを得ず、正時に草昧に屬し人類の生計主として天恵に頼らざるを得ざるの時期に於ては土地の勢力最も大なりとす、此時に方りてや事業の循環連絡せるものなく獸類に遇へば則ち之を搏ち魚類を見れば則ち之を捕ふる等、只時々其遭遇するものに對して勢力を施すに止まり、資本の如きは稍く粗造の弓矢、棍棒等に過ぎざるなり、以て當時人民の生計を爲す、一に天産即ち土地の産出するものに

頼らざるを得ざる所以を知るに足る。既にして耕作の業漸く進み粗造の製造少しく其萌芽を發するに至りて勢力の勢力始めて盛なり、蓋し當時に於ては農業既に其緒に就き耕田、播種、收穫の事業循環連絡し來るを以て其勢力最早に獲獸、捕魚の類に非ず、之を施すに自から時期あり、然れども製造の業に至りては固より未だ巧妙の器具機械あるに非ず、専ら勢力の分量と手先の精巧とを要す故に勢力の貴き蓋し此時を以て最とす而して世運大に進歩し事業廣大なるに及びては、或は成功を數年の後に期し、或は賣買を萬里の外に試み或は商工上の雌雄を萬國と争ふ等、遠大の事業大に増加すべし、是に於て巧妙なる器具、機械、堅牢なる船舶、貨車の必要を生じ、運輸、通信の道を開く等巨額の資本を要す、此時に方りては實に人工を以て天工を奪ひ天恵の薄きも大に障害を爲す能はず、精巧の勢力も機械の爲に壓せられて其能に倣り其優に利する能はず、資本の勢力亦實に盛なりと謂ふべし、而して四海の氣運今哉已に此第三期に入れり資本の勢力年に其盛大を致す亦宜なる哉

第六節 生産に要する諸般の設備

生産の要項概ね斯の如し、抑々生産は經濟事項中自然に頼る者最も多し、雖も學術應用の廣大なる亦之に若くものなし、故に各種専門的研究を要し運輸、通信の便、金融、保險、倉庫、生産組合等の施設亦之に伴はざる可らず、其所謂専門的研究にも上中下の三級を要す、蓋し上級は事業の發達進歩の爲に必要にして發見發明を促すに便あり、中級は事業の管理監督に必要にして下級は則ち現行事業の效力を進むるに便あり、三者相依りて以て鼎足の勢を爲し苟くも長短あるを許さず、運輸、通信の便は以て生産事業をして需給の情況を詳かにし吾人をして過不足の不遇を免れしむ、今哉通信の便は一片の飛電以て千里を致し、米國の如きは、(最近西曆千九百一年鐵道事務大に發達し一噸一英里の運賃僅かに一錢四厘八毛六の割合なり、之を往昔物品其生産地を離る、百哩にして其價を加倍せしに比して其便利固より同年の論に非ざるなり、又金融機關の如き農業信用及工業信用は商業信用と大に其趣を異にし、後者は資金の運轉活潑にして固定することなしと雖も、前者は長期の貸付を要し資本固着す、而して其償還の如きも商業の如く之を一時に爲すを得ず年賦償還

の必要あり、是れ勸業銀行、農工銀行、興業銀行等の設けありて、其他村落信用組合等の必要ある所以なり。是等専門的機關の特色は自から専門の研究に屬し之を此所に數言せず。雖も拙著財政と金融坤第二編第二卷第一章以下參看、要するに特質を有する者に對しては特別の設備を要し、事物をして其所を得せしめ、事其目的に應じ、其効驗を増すを必要とす。其他保險倉庫等の設備生産上に必要なる多辯を要せず。夫れ民化して而して政に従ふ、前記諸般の設備は則ち民を化する所以の道なり。努めずんばある可らず。方今四海各國競ふて此等施設の發達伸張を圖り、汲々として怠らず營々として倦ざる所以のもの亦偶然に非ざるなり。

第四章 分配

第一節 分配の通路

前章に於て陳述せしが如く生産の目的は消費にあり、然りと雖も生産は漫然之を分賦するを得ざるは猶ほ水の分配に河川、溝渠を要するか如く必ず哉當然の通路なきを得ず、而して之を分つに相當の機關なきを得ず、爾ふ次を逐ふて之を論せん。

生産に資本、勢力、土地を要する所以は既に之を説明したり、凡そ是等の者は皆偶然に獲得せらるべきものに非ず、故に之を使用せば必ず之に報ゆる所なくんばある可らず、其之に報ゆるは必ず、天下の生産物に依らざるを得ず、然れども生産物は漫然人々の望に應じて之を分つこと能はず、其之を分つには各々其道に依らざるを得ず、則ち分配の通路は之を分けて左の三種とす。

第一 營業所得

第二 勞働の報酬即ち勞銀

第三 貸付料

是なり、苟くも生産物の分配を得んと欲せば必ずや是等通路に依らざるを得ず、今是等の通路を開かんと欲せば、或は自ら資本を投じ多少の勞働を爲し以て一業を營み、或は人の爲に勞働を爲し、或は所有の財産を他人に貸付けざるを得ず、請少しく各種に就て其真相及特質を陳述せん

第二節 營業所得

第一目 營業所得の釋義及其說明

營業所得は營業者の放下する資本と其勞働及危險に報ゆる所の報酬なり、蓋し營業者の勞働とは營業の組織を按じ其損得を鑑み、或は出納の計算を司り、勞力者を監督する等を云ふ、其危險とは業の成否を未來に期し目下現に其嗜好に供し得べき所の資本を事業に放下するを云ふ、凡そ一業を爲すには資本を要せざるはなし、抑々資本は過去の勞力と節儉との結果なり、之を放下するに何ぞ其報酬なきを得んや、其勞働を爲し危險を冒すは固より其報酬あるを期す、其之を期せずして勞働を爲すは蓋し絶無價有の場合と云ふべきなり、

故に營業所得は資本の利子よりは勢其歩合多からざるを得ず、營業者が資本を放下し勞働を爲し、危險を冒し以て得る所の報酬は即ち營業所得なり、然るに天下の富は皆生産に成り、各種の所得は富の一部分を得るにあり、故に營業者の所得は其源を生産に發す、然らば即ち營業所得は生産を分つの一通路たること論を俟たざるなり

第二目 危險は世運の進歩に従ひ増加す

往古社會の組織未だ全からず、農工商の事業未だ發達せざりし時に方りては生産は各自の消費を目的とし、一步を進るも尙ほ工は廣く商の注文を受けるに至らず、商は店頭に顧客を待ちて廣く市場に出入せず、所謂受身の事業を經營し、社會漸く發達し農工商百般の事業稍々其緒に就き、分業行はれて各種の營業連絡するの時に至るも營業者尙ほ未だ廣く世界の市場に注目し其景況を察して生産に従事することなく、通例は先づ需用の起るを待ちて生産を爲す之を注文の時代とす、此時代に於ては資本を放下するに付きて冒さる可らざる所の危険の度も自から亦今日の如く甚しからず、然りと雖も方今に

於ては分業益々盛にして事業の種類愈々増加し、百業互に競ふて資本亦増加せしを以て徒に他の注文を待ちて時日を費すを常とせず、豫め市場の景況を觀測して大に資本を事業に投じ、其生産品を以て市場に雌雄を決するを常價とし生産事業に従事する復た昔日の如く自己消費の爲に之を爲し、又は營業者先づ需用を待ちて其生産品を出すが如きことあるは甚だ稀にして、通例は生産者先づ世上の需用を察して其生産を爲し、生産に従事すること常に需用に先つを以て生産者の報酬を期すること亦昔日の如く確實なる能はず、隨て之を往日に比すれば危険の度も亦増加したりと謂ふべし、然りと雖も是れ世運進歩し、資本増加し、需用頻繁なるの致す所なれば決して嘆すべきに非ず、却て大に賀すべきことなりとす、夫れ昔日の如く生産は専ら注文に依るものとせんか事業の循環連絡するは決して之を望むこと能はず、其注文なき時は器械の運轉、勢力の使用を停止せざるを得ず、果して然らば生産の費用大に増加して終に物價の騰貴を致すや必せり、今や即ち然らず生産者の業を營むや競争に基りし、市場の景況に依り一品を出せば更に他品の生産に従事し、事業前

後相連絡して圖窮あることなし、斯の如くにして國富始めて發達することを得べく、物價始めて騰なることを得べし、然れども營業の景況斯の如きに至れば多少營業者の爲め危険の原素を増加するは又已むを得ざるの勢なり

第三目 營業所得の歩合は世運の進歩に従ひ減少す

既に陳述せしが如く營業所得は營業者の使用する資本の報酬、營業者が其事業の管理監督の爲め要する所の勢力の報酬及其冒す所の危険の報酬より成立つものなれば、右三者の中孰れか増減するときは其歩合も亦増減せざるを得ざるは最も賭馬きの理勢なりとす、然るに既論の如く營業の危険は世の進歩に従ひ益々其度を加ふるを以て世運の進歩は一見營業所得の歩合を増加するものゝ如しと雖も是れ決して然らざるなり、抑々世運の進歩が營業上に危険の度を加ふると云ふ所以のものは方今の生産は主として市場の景況を卜し之が好機に投せんとするものなれば、昔日の如く始めより需用者の確定したるものあること稀れなりと云ふにありて、敢て世に需用なく、賣買を爲し得ざる物を生産すると云ふの意に非ざるなり、故に生産中は未だ確然たる

需用者あらずと雖も其之に従事するときには既に市場の景況に依り最も需用多き物を最も多く生産し進行するを以て一たび之を生産して市場に出すに當りては、苟も生産者にして商機の如何を見誤らざる以上は方今需用の頻繁なる各種生産の關係互に深密なる決して其生産物を久しく賣捌く能はざるが如きことなかるべし、果して然らば彼の危険の度を増加すると云ふが如きも其大部分は理論に屬し事實に於ては外部より想像したるが如く甚しきものに非ざるなり、又營業者の勞働も事業の進歩するに従ひ大に増加すべしと雖も、一方より之を論ずれば營業の組織益々其精を加へ、智力亦大に進歩し昔日の難しとする所は今日復た之を難しとせざる等の事實あり、又使用人即ち勞力者の如きも教育の進歩に由り昔日の如く鞭撻若くは監督の嚴密なるを要せず、加ふるに彼の共同法の如き方法を施行せば大に監督の勞を減ずることを得べし、由是觀之同額の營業を爲すに今日の昔日より容易なる敢て疑を容れざるなり、然り而して今日の生産は已に市場に賣買を試みるが爲に之を爲すものなり、需用廣大百般の事業活潑の勢を呈するの今日に於ては資本の

歩合と數
の差

運轉又昔日の如く運鈍なるものに非ず、其額亦決して昔日の比に非ざるなり、凡そ資本は假令一運轉に所得の歩合少しとするも數運轉の所得を積めば以て勢大利を得るに至るべく、且つ小額に重き歩合を得るより、大額に輕き歩合を得れば其所得より得る所の金高は却て大に増加すべきなり、故に所得の歩合即ち投資額に對する百分比例は減少するも營業者の收入金額は之を減ずることなく、其所得額を増加すると同時に生産費に減少を來し物價を低廉ならしめ、國民亦其生計の度を進むることを得べくして此減少は實に經濟上賀すべきものと云はざるを得ず、世人常に勞銀歩合の高きを憂とし營業所得歩合の高きを顧みず蓋し誤まれり

第四目 營業所得歩合の多少を決する原因

世運の進歩に伴ひ營業所得の歩合減少することは既論の如しと雖も、何れの場合に於ても其輕重を決する原因なきを得ず、請ふ左に之を陳述せん

第一 營業者が其營業上に有する學識、經驗及天稟の性質才智

凡そ百般の業を營むや多少其事業上の學識と經驗とを備へざる可ら

す殊に百業著しく進歩して其經營の複雑なる今日に於ては學識、經驗の必要を増すや疑を容れず、試た茲に一紡績事業を營む者ありとせん、彼れ若し學識なくんば其器械の改良を計り、製造品の精巧を致すこと難く、營業一般の改良を按ずること能はずして徒らに古法を墨守して敢て之に改良發明を加ふることなくんば事業の進歩得て期す可らざるなり、若し又彼に經驗なくんば實地の不便を看破し、事業上圓滑の働きを爲すこと能はず、且つ世の嗜好の變動を察し、機に投じ精巧の良品を以て市場を制すること能はざるべし、已に其人學識、經驗を兼ね備ふと雖も、其天稟の性質勉勵を好み熱心其業を執ることを快とし、且つ能く人の信用を博し、使役する所の勞力者は合せずして能く其分を盡し、機に臨み變に應じ事業の緩急に處し、勞力使用の寬嚴等を計るの才智なくんば又決して營業所得其多きを致すことを得ざるべし、故に危險難易の度を等くする同業中と雖も、營業者の學識、經驗、性質、才智等の如何に因り營業所得に著しき差違あるや多辨を要せざるなり

第二 營業危險の多少

事業を營むには資本を放下し其報酬を未來に期せざる可らざるを以て其間多少の危險を冒さざるを得ず、其危險の度に因り所得の歩合を異にするは運の最も賭易きものと謂ふべし、茲に甲乙の營業者あり、甲は米穀、薪炭等の如く最も需用の廣き物品を取扱ひ、乙は美術品、上等衣類の如き需用狭く且つ商況の浮沈に由り最も其需用に影響すべき物を取扱ふとせん、甲は商況の浮沈、世人嗜好の變更に由り變動を受くること軽く隨て其所得を變ずること少しと雖も、乙に至りては即ち然らず右等の變動ある毎に大に其影響を受くべし、故に甲の業に於ては所得の歩合低しと雖も敢て妨げなく、乙の業に於ては高き報酬を得るに非ざれば以て其業を維持すること能はざるべし

第三 永久及一時の事業

是れ亦賭易きの數なり、例へば等しく宿屋事業たりと雖も東京馬喰町旅宿の如きは週年旅客の斷ゆることなく、收入次を得て豫め之を期する

に難からず、其投する所の資本に對して所得の歩合輕さも収入の總額は尙ほ業體相當の利益を收むるに足るべし、然れども温泉宿、避暑場の宿屋の如きに至りては季節に依り來客の數に甚しき増減あり、或は年中兩三個月間に週年の計を爲さざるを得ざる場合あり、以て宿泊の料割合に高きを當然とす

第四 營業の合意、嫌厭

凡そ事業を爲すに植木屋、彫刻師等の如く其營業者の意に適合するものあり、又屠獸、肥料取扱等の如き頗る不快にして嫌厭すべきものあり、是等の業に於て假令甲乙の間其經營の難易、危険の度相同しきも甲の業に於ては報酬必ずしも多からずして尙ほ人能く之に従事すべく、乙の業に於てはは所得割合に多からざれば之に従事する者なかるべし、由是觀之營業上の學識、經驗、危険の多少等は營業の便否、適否、資本の多寡等を論せず、其所得の歩合を定むるの原因たること敢て疑を容れざるなり

第五目 營業所得と他の所得との差違

營業所得は勞銀及貸付料の如く豫め其高を知ること能はず、之を知るは其業を了り精算を爲せし後にあり、故に營業所得を以て生計を營む者は勞銀若くは貸付料に依る者の如く豫め其収入を計りて日常の費用を定むること能はず、其現に所有する所のものを以て平生の生計を營まざるを得ざるなり、即ち勞力者の地位より之を見るに勞銀減少し又は解僱に遭ふことなきを保せざれば未來に得る所の勞銀を頼みて喰込を爲さざる様平生其費用を償むべきは勿論なりと雖も其就役中は次回の支拂日(歐米各國にては勞力者は毎土曜日に給料を受取るを通例とす)に至れば若干の金員を得へしとは豫め之を期することを得べし、故に前以て之を見當として信用買を爲すも平時に於ては強て差支なかるべし、又貸付料を以て生計を營む者は尙も非常の事あるに非ざれば先づ期限には豫期の金額を得るに相違なかるべし、然れども營業者に至りては決して右等の如き前以て其収入高を豫期すること能はざるなり、果して然らば營業者は勞力者其他の者より一層生計の費用を平生に償みて尙も將來の収入を見込み徒に現在の所有物を多く消費するが如きことを爲

す可からず、而して其收入を獲得するも一時に之を消費せずして之を次回の收入を得るまでの費用に充てざるを得ず、若し夫れ然らざれば其資本を喰込み營業減縮の禍に遭遇することなきを保せず、豈に慎まざる可んや

第三節 勞銀

第一目 勞銀の釋義及勞銀基金

勞銀とは一日の勞働時間を若干(例へば十時間)と定め之を單位とし一ヶ月或は一週間に積算し或は毎日之を與へ又は勞働の分量若干に付き若干と金額若くは物品の量を定めて勞力者に與ふる所の報酬を云ふ

斯の如く勞銀は勞力者が其勞働に對して得る所の報酬なり、然るに此報酬は一國現在の富の中より之を支出し、富は生産より生ずるを以て勞銀は生産を分配するの一通路なるや明なり、而して生産より報酬を得る者は獨り勞力者に止まらず、既論の如く營業者も其報酬を得る所は生産に在り、資本家の報酬も亦生産に依らざるを得ず、故に勞力者の得る所のものと他兩者の得る所のものは其に一國生産の一部分たらざるを得ず、而して第三章第三節第二目

勞銀の釋義

勞銀基金

に於て論じたる資本の區分に據れば流動資本の一部なる(ホ)は即ち勞力者の得る所のものにして之を勞銀基金とす

第二目 勞銀平均増減の原因

勞銀基金は既論の如く一國資本の總高と固定資本原料品の高とに相應する所の割合を保たざるを得ず、而して其如何に勞力者に分配せらるゝやに至りては勞力者の數と照應せざるを得ざるなり、若し夫れ基金の高に變動なくして勞力者の數を増さんか勞銀の平均は必ず減少すべく、之に反し基金に増減なく勞力者の數を減せんか勞銀の平均増加すべし、又勞力者の數を變せずして基金の高を増さんか勞銀の平均は増加すべく、之に反して基金の高を減せんか勞銀の平均減少すべく、而して勞力者の數と基金の高と同比例を以て増減せば勞銀の平均變動することなかるべし、故に勞銀の平均を増加せんと欲せば基金の高を増加するか勞力者の數を減するか、孰れか其一に出でざるを得ず、然りと雖も勞力者の數を減するは國家の慶事に非ず、基金を増加するも亦容易の業に非ざるなり(英國の統計家マールホル氏の調査に據れば概近

世界の富の増加は年々凡そ二十四億五千萬弗にして八億二千五百万弗は北米合衆國三億七千五百万弗は佛國三億二千五百万弗は英國二億弗は獨逸國其他七億七千五百万弗は他の諸國の増加なりと云ふ。況や國家の進運は原料品の價格を増すと同時に固有資本の爲め割合に多額を要するの勢ありて勞銀基金は多少増加するに相違なきも、資本の他の部分と同一の割合を以て増加することを得ざるに於てをや、勞銀基金の増加決して容易なりと謂ふを得ず、今事の解し易からんか爲め請ふ一方式を以て勞力者の數、基金の高及勞銀の平均が互に相關係する景況を示さん

次の方式に於て「ホ」を勞銀基金とし「ヘ」を勞力者の數とすれば「ヘ」を以て「ホ」を除し得たる「ト」は即ち勞力者の得る所の勞銀の平均高なり、然らば即ち「ト」の多少は「ホ」「ヘ」の大小に由ること明なり、故に若し「ホ」に變動なくして「ヘ」を増加せば、増加したるものを以て同額のものを除することとなり「ト」は必ず減少す、之に反して「ヘ」を減少すれば減少したるものを以て同額のものを除するを以て「ト」は必ず増加す、若し又「ヘ」に變動なくして「ホ」を増減すれば必ず「ト」を増減す、然れば

ト ども「ホ」「ヘ」共に同一の割合を以て増減せば「ト」には變動を生ずることなし、事分明四邊通せざる所あるなし、唯
 = 能く之を經いん
 ホ、

平均勞銀の増減する原因斯の如し、故に勞銀の歩合を増加せんと欲せば須らく勞銀基金の増加若くは勞力者の減少を計らざる可からず、之を外にして如何なる嚴法奇策を用ゆるも勞銀歩合の増加は數の許さざる所なり、消息數あり盈虚争ひ難し、然るに世之を解せず或は最低勞銀法、勞働時間制限法等を主張し又漫に同盟罷工を企て資本家に迫りて勞銀の増加を強請し若くは之が當然の減少を拒むが如き暗愚拙劣の手段に出る者なしとせす、是等の方法は他に自然の勢力能く之を助けるものあるにあらざれば假令一時其目的を達することあるも、固より數理の許さざる所にして永久の効力なく、却て生産自然の分配を妨げ、資本の増殖を障害し、勞銀基金の増加を妨げ、勞銀歩合の平均を減少すべし、瞑目停観須らく之を心に観るべきなり、若し夫れ人あり勞銀歩合増加の方法を説くあらば先づ其方法は果して勞銀基金を増加するに足

るや、不當なる人口増加の傾向を減ずるの効力あるやを詳かにし、然る後ち其有効無効を断すべし、高般の巧説争ふて實の如きも苟も其説をして是等効驗の一を生ずるに足らざらしめば畢竟是れ空を敲きて響を作し木を撃て聲なきの類のみ決して奏功を期する能はず、夫れ誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり察せずんばある可らず

第三目 各個勞力者の勞銀の多少を決する原因

勞銀の多少を決する所の原因は全局より論すれば勞銀基金と勞力者人口の關係如何とにあるは既論の如しと雖も其局部場合に付き勞銀の多少を決する所の原因自から在りて存す、請ふ之を説かん

第一 勞力の難易 勞力の難易は其分量と時間とを以て之を算す即ち同

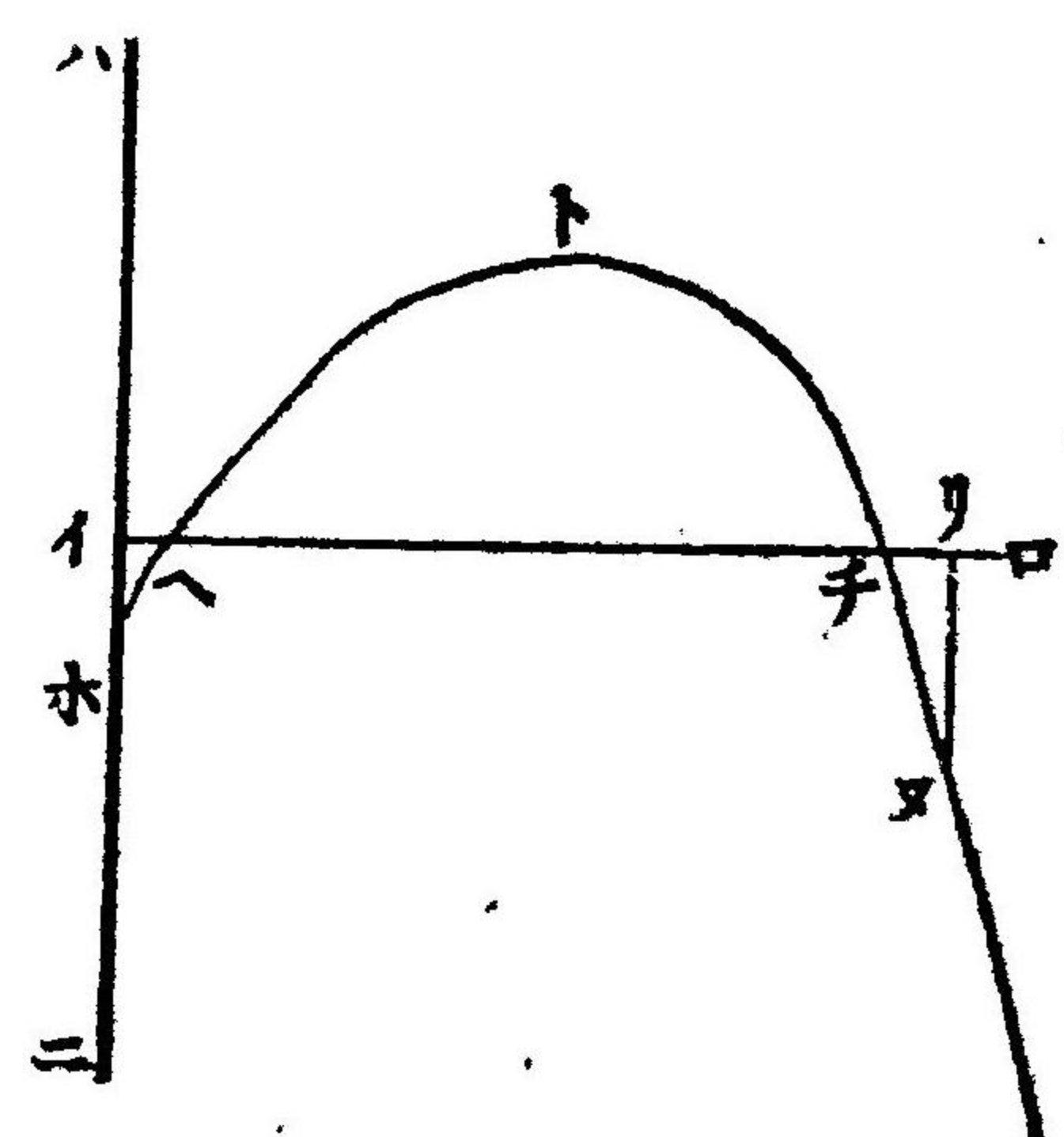
一の勞力と雖も勞働の度を重ね時間の數を増加せば必ず之に多くの報酬を與へざる可からざるは昔人の知る所なり、是れ實に單純の事實なりと雖も理に於ては未だ此の如く簡單ならざるものあり、抑々人類には日用缺く可らざるの需用あり、此需用を充さんが爲には必ず多少の勞苦を

堪ばざる可らず、故に意を決して勞働を爲すときは其初め勞苦を感せず尋て勞働の爲め快を覺ゆることあるべきも、其時間に長さを加ふるに従ひ體疲れ神倦み非常の厚報を得るに非ざれば耐忍の念慮を生せしむるに足らず、然れども勞働の度劇からず、時間の數多からざれば身體の疲勞心神の倦厭なきを以て敢て厚報を要せざるべし、只當初に於て未だ決せざるの意を決せしめ、未だ起きざるの身體を起さしむるを以て足れりとす、此事に就きては英人ゼヴオンズ氏曾て一圖解を製せり、請ふ今事の解し易からんが爲め左に之を掲出せん

次の圖に於て「イロ」の線は勞力の報酬と其長短とを量るものにして「イ」より「ロ」に向ひて進み「イハ」を十錢とし「イチ」を五十錢とせん「イハ」の線は快樂の度を量り其度「イ」より「ハ」に向て進み「イニ」の線は勞苦の度を量り其度「イ」より「ニ」に下向きに進むとし「イ」の點は苦もなく樂もなき處とせん、然るときは苦界より樂界樂界より苦界へ入るに「イロ」の線を経過するときは苦もなく樂もなきものなり、故に今勞力を爲すもの「ホ」より「ヘ」に至るまでは

心體共に未だ勞働に傾向せず少しく之を厭ふの氣味なきにあらざり

第六圖



を得復た他に求むる所なかるべし然るに尙ほ更に進みて勞力に従事すれば即ち勞苦の界に入らざるを得ず故に進みて勞苦を忍び僅に勞銀を増加せんよりは寧ろ之を止めて逸樂を求むべし之を勞力停止の點と爲す彼れ若し非常の勉強家なれば「リ」の勞苦を忍び「チ」の増報を得べし

も之を忍ばざれば「イ」の勞銀を得ること能はず之を得ざれば忽ち饑渴に迫るを以て方めて「ホ」の勞苦を忍ぶべし然れども已に勞働を始めて半時間若くは一時間を経過せば心體之に染み取て勞働を苦とせず「ト」に達するまでは樂を増し其より「チ」に至るまでは絶へず之を減ず而して「チ」に至れば已に平日の勞銀

と雖も之を超過せば勞報相償はず必ず他に非常の報酬を得ざれば勞働に従事せざるべし其他勞力の性質に由りて自ら難易の別あり其度の強弱に依り報酬に厚薄あるべきは固より論を俟たざるなり

第二 危險の多少 勞力の性質に依り勞力者の健康身體に危險なるものあり即ち傳染病者の取扱其排泄物の運搬是等は次に論ずる嫌厭の元素も甚だ多し劇藥の調劑等は皆健康に害ありて身體に危險の虞あり又岩上の石切り、鑛山の抗夫等は他業に比して頗る危險を冒すものなり之に反して農夫、植木屋、人足等の如きは殆ど身體の危險あることなし故に是等の間に於て勞銀に差違あるは疑ふ可らざる事實なりとす

第三 勞力の合意嫌厭 勞力の性質に依り健康に害なく危險の虞なく勞力者の意に適ふものあり花園の手入れ、小細工物の製造の如き即ち是なり之に反して屠獸、死體取扱等の如きは人情の望まざるものなれば勞力の割合には厚報を要す

第四 永久の勞力、一時の勞力 永久に繼續する事業の定備なれば絶へず

勞銀を受くるの望あるを以て勞銀は少しく低廉なるも之に満足すべしと雖も、一時の事業の爲に備入るゝ勞力者は同様の勞力を爲さしむるにも勞銀の割合少しく高からざるを得ず、例へば避暑場等にて一時備入るゝ所の給仕人の如きは市街の旋店にて備入るゝ者より其勞銀高きを通例とす

第五 勞力者天稟の性質 是は頗る勞銀に關係するものなり、仕事の性質に由り勞力者の鋭敏、緻密其他之に類する性質を要するものあり、是等は其性質の爲に異常の厚報を受くることを得べし

第六 信任の多少 金錢の出納財産の管理等の如く特に當事者に信任を置かざる可らざるものあり、此等には其信任の多少に由り報酬の多少あるべし、即ち銀行、保險會社等の役員、財産の管理人等は其勞力の割合には報酬厚きものとす

勞力者各個の勞銀歩合を決する原因は大略斯の如し、勞力者の輩は宜く此理を察し、甲種の勞力者は之を乙種に比して割合に勞銀厚し是れ不公平なり

と云ふが如き無法を唱へて同盟罷工等不心得の事を爲す可らず、勞銀歩合を決するには其全局に於ても亦局部に於ても自ら動かす可らざるの理由存す、此理を究めず妄に其増減多少を論ずるは是れ無法の說なり、凡そ世を害し民を賊ふは無法より甚しきはなし、勞銀増減の理は深く之を講究せざる可らざるなり

第四目 勞銀の高きは必ずしも營業者の不利に非ず

營業所得と勞銀とは共に生産分配の通路にして勞銀高ければ一見營業所得を減ずるの狀あり、又勞銀は事實に於て勞力者が生産を了せざるに先ち營業者が資本を以て一時繰替ゆるものたるが故に勞銀を以て直ちに生産の費用と看做し其高きは營業の發達を障害し營業所得を減ずるものなりと思ふ者多しと雖も、是れ決して然らず、元來勞銀の高低は既に成事の結果にして漫然定まるものに非ず、必ず哉之を定むる所の原因なかる可からず、若し其原因をして疫病、饑饉、戦争等にあらしめば甚だ患ふべしと雖も其歩合の高きは營業所得の多きと同一の原因より生ずる所の結果なるときは却て大に喜ぶべ

きものなりとす。元來勞銀の増加を致す所以のものは彼の勞銀基金の増加にあり。此基金に多きを加へんと欲せば各種の營業利益々多くして此基金へ配當する所の資本總額を増加し得べき結果を生ぜざるを得ず。果して然らば勞銀の増加と營業所得の多きとは同一原因の結果なりと云つべし。而して營業に利あるは之に使用する資本勞力の効驗多きに由る。故に勞銀の高きは即ち勞銀の効驗多きに由るものにして營業者の不利と云ふ可らず。是れ只理論の以て然りとするのみならず古今の實例以て能く此事の虛ならざるを示す。請ふ少しく之を辯せん。

曾て西曆千八百五十年に前後しキヤリフォルニア州及濠洲に金坑を發見するや勞銀俄に増加し其盛時に於ては普通の勞力者にして尙且つ一日五弗の勞銀を得るに至れり。而して營業者の利益を得たるや又此時を以て最とす。然るに金坑の産出漸く減し營業者の利益減するに隨ひ勞銀も亦漸次に減少せり。又北米合衆國の西方は沃野千里の地其麥作に適する天下無雙と稱す。故に農夫の勞銀の高き實に世界に冠たり。是れ其從事する所の事業大に天利を

有し勞力の効驗大なるに由るにあらすして何ぞや。由是觀之勞銀の高きは營業所得の多きと其原因を同くし、互に親子の關係を爲さすして兄弟姉妹の關係を爲すものなれば其高きは必ずしも營業者の不利に非ずして却て大に喜ぶべきものなしとせず。而して其低きは營業者の利益に非ずして其所得の減少に由り已むを得ざるに出づるもの多し。鑑みずんばある可らざるなり。

第五目 人口の増減と勞銀歩合との關係

人口の増減は前目所論の如く勞銀歩合を増減するの一原因たるや疑を容れず。而して其増減は勞銀歩合に二重の効力を驗はすものとす。即ち其原因の如何に拘はらず勞銀基金其他一切生産上の事項に變動を來さざるに人口減少せば勞銀の平均高に多少の増加を來し同時に衣食住に供する物品は従前と同量なるに之を小數の人員に分配するを以て幾分か其代價を減すべし。果して然らば勞力者は増加したる勞銀を以て低價の物品を購買することを得べく其利益鮮少に非ざるべし。而して其人口の減少が新地移住の爲に起りしものとすれば其利益は殊に大なり。元來移住は天下の壯丁を失ひ一見不利の

観なきに非ずと雖も、其原因舊地に溢るゝ所の人口を新地に移すものなることは舊地に於ては之が爲に生産を妨げず、新地の生産は之が爲に發達し其生産物を舊地に致し食品若くは原料品の價を低下し、其製造品の需用を増加し以て商工事業の發達を助くること少しとせず、國內の移住即ち我が内地人民が北海道樺太臺灣に移るが如きは最も然り、然りと雖も生産上の要件に變動なく、勞銀基金の増加せざるに人口増加するときは全く之と反對の效驗を生じ、勞銀の平均高は多少減少せざるを得ず、而して衣食住に供する所の物品は其供給多きを加へざるに多數の人員に之を配賦せざるを得ずして其價格を騰貴するは數の免れざる所なり、然らば則ち勞働社會は其減少したる勞銀を以て騰貴したる物品を購買せざるを得ざるの悲境に陥るは自然の趨勢なり、事茲に至れば其生計の難き固より論を俟たず思ふて茲に至れば轉だ寒心に堪ざるものあり

第六目 勞銀歩合増加の利益を維持する能力の強弱

既論の如く資本の増加、人口の減少は勞銀歩合の平均を増加し勞力者の生

計を進むるの效力あるや多辯を要せず、加之生産物價格の減少は假令直接に勞銀基金の増加を生せずと雖も勞銀歩合の増加と其効驗を均くす、何となれば物價の減少は勞力者をして同額の勞銀を以て多量若くは良質の物品を獲得せしむることを得ればなり、然るに勞力者は概ね智力に乏しく此等の利益を維持すること能はざるの嘆あり、戒めずんばある可らず、彼等の無謀なる人口の減少、資本の増加、物價低廉等の爲め聊か其生計を易うするの實あれば、其永久の原因又は一時の原因より出づるに拘はらず、永久の原因とは國富増加し爲に其資本の増加を來し、又は農工の業進歩し生産の費用を減じ爲に農産工産の價格の減少する等を云ひ、一時の原因とは豐年若くは一時嗜好の變更保護政策等に由り其從事する所の事業の生産物の價格一時大に増加する等を云ふ、忽ち人口を増加し、又は不當の消費を増加し、忽ちにして一時得る所の利益を失ふを通例とす、實に食品價格の減少又は其供給の増加は以て勞力社會の婚姻の數を増加し、隨て人口の増加を促すに至るは古今各國の經驗する所なり、請ふ之を證せん

埃地利に於て西曆千八百五十一年には大麥「メツ」は凡そ我が三斗の價ニ「フローリン」と百分の四十七にして婚姻の數三十三萬六千八百、同千八百五十二年には大麥「メツ」の價ニ「フローリン」一、婚姻の數三十一萬六千八百、此年に於て大麥の價格減少せしも婚姻の數少しく減少せしは前年に其數多かりしに由る、同千八百五十三年には大麥「メツ」の價ニ「フローリン」三、婚姻の數二十八萬三千四百、同千八百五十四年は大麥「メツ」の價ニ「フローリン」三、六、婚姻の數二十五萬八千、同千八百五十五年は大麥「メツ」の價ニ「フローリン」四、三、婚姻の數二十四萬五千四百なりしと云ふ、是等婚姻の數は全國一般に涉り敢て勞力者婚姻の數に限るものに非ずと雖も、富民は平日の貯蓄を有するを以て其婚姻の數は年の豊凶に由り著しき増減を現はさざるべし、唯其食品價格に由り顯著なる増減を示すは勞力者の結婚に係るものたる疑を容れざるなり

又愛蘭に於ては馬鈴薯の耕作の如何に因り食品の供給を増減し、西曆千六百五十四年の人口百三萬四千人なりし、が爾後馬鈴薯の耕作漸次に増加し同

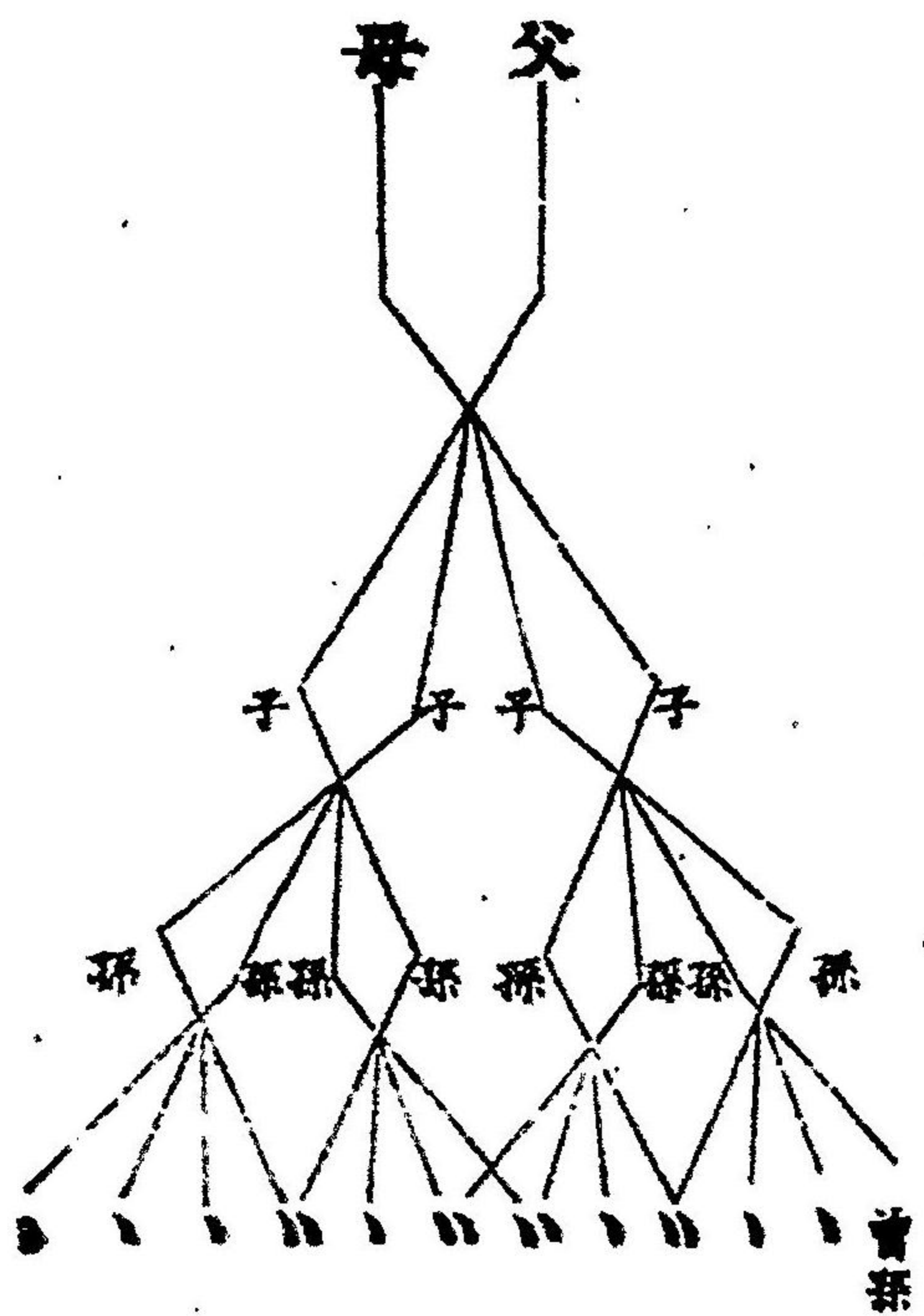
千六百九十五年には二百三十七萬二千人となり、同千八百五十年には五百三十九萬五千人、同千八百二十三年には六百八十萬千八百二十七人、同千八百四十四年には八百十七萬五千人となり、是れ實に著しき増加と謂ふべし、然れども西曆千八百五十一年には馬鈴薯凶作の爲に人口減少して六百五十一萬五千人となり、最近の實況を以て之を見るも大同小異にして西曆千八百九十九年には英國に於ける小麥「クワートル」の價格二十五志八片にして婚姻の數は千人に付き十五人六分なりしに同千九百五年には麥價二十九志八片に上りしに其數急に千人に付き十四人六分に減少せり、食品供給の人口増減に係すること夫れ斯の如し

人口の増加をして永久の原因より來るものならしめば増加の後と雖も人々尙ほ或は従前の生計を保つことを得べきも、一時の原因より來りたるものは即ち然らず、何となれば其原因漸やく消滅し、生産従前の高に減するに至れば其已に増加したる人口は衣食足らず以て非常の困難を來す可ればなり、豈に慎まざる可んや

第七目

人口は勞銀の源泉にして勞力なくんば生産を發達すること能はざるは論を俟たず故に人口をして其適度即ち生産遞減の點迄に達せしむるは固より國家の富強を致す所以の道なりと雖も、其一たび此點に達せし後ち漫に之を増加するは國家の利益に非ざるなり、何となれば需用品生産の増加は之を比例する能はず、各人の消費を節して以て全體の人口を養はざるを得ざるの必要を來す可ればなり、故に生産遞減點を超過する所の人口の増加は生産分配の事業更に發達し能く之を支持し得るの後に非ずんば國家經營の爲め安全なる能はざるなり、然るに彼れ勞力者の輩は敢て深謀遠慮あるに非ず、動もすれば一時の好況の爲め未だ子孫を養育するの餘力あらざるに既に人口を増加し勞銀の歩合を減少するに至るの通弊あり、元來人口の増加は俗に所謂鼠の子算に類するものにして例へば一男一女四子を擧げ、此四子八子を生じ、八子十六子を生すとせば二人の男女より其曾孫の世に至れば已に壯年十六人を増し代を重ねる毎に其増進の度を増加す人口増加の度亦盛なりと謂つべ

第七圖



期間に九億に達し、
 露は今方一億四千
 萬人なるに三億に
 達すへしと云ふ、今
 事の解し易からん
 が爲に一圖解を以
 て其繁殖の景況を
 示せば第七圖の如
 し

し西人の調査に據れば獨逸の人口は方今約六千三百萬人にして増加歩合は一年一步五厘なり、而して百年の後は二億に達すべく、又英語使用の人民は同

然るに食品の増加は國土の開發生産遞減の點に達したる後は人口一人を加ふる毎に其需用高丈けを増加すること能はず、只僅々の増加を見るに止まる、果して然らば人口増加するに従ひて食品の價格益々騰貴すべし、假令資本

の増加は人口に伴ふことありとするも其増加は資金の輸出、原料品騰貴等の爲め擧て之を勞銀基金の増殖に投ずるを得ずして食品騰貴の費用を償ふに足らず爲に勞働社會の困難を増加せざるを得ざるなり

第八目 人口の抑制

人口の増加或程度に達するまでは生産増加の爲め大に利益あるは既論の如しと雖も、無限の増加は只に國家の利益に非ざるのみならず營養の力能く之に堪ゆる所に非ざるなり、是に於て乎人口の増加が國土に比例し或程度に達するときは必ず其増加を抑制する所の自然的及人爲的原因、條件若くは事情を生ず、而して其抑制に四種あり

第一 自然の抑制

第二 人爲の抑制

第三 不期の抑制

第四 遠慮の抑制

是なり、請ふ少しく之を辨せん

地球上温帯の地方に於ては男子生れて十四歳、女子生れて十三歳に至れば生理上既に父母たるの能力を備ふるを通例とす、故に若し人口の増加を自然に放擲して毫も抑制する所なくんば第七圖に示したるが如く二人の男子十六人の曾孫を見るは決して例外の事に非ざるべし、然りと雖も人口を支ふるには衣食住の供給なきを得ず、其供給を増加せんと欲せば土地の以て之に應ずるものなかる可らず、然るに土地の供給固より限りあり、故に生産の増加は人口の増加と其度を均くすること能はず、人口増加して若干の點に達したるときは衣食給せず偶々子孫の生ずるあるも體格孱弱、從て夭折の數を増し、人口は前記の率を以て増加すること能はざるに至るべし、之を自然の抑制とす、人爲の抑制とは人口増加して生計漸く難きを告ぐるに至れば移住、出稼等の事起り以て其地の人口を減ずるを言ふ

元來移住は人世の難事、人情の欲せざる所にして老幼の能く爲し得る所に非ず、移住者は主として壯年者たるを通例とす、而して故國にありては未だ其養育費用の返償を得ざるに壯丁を失ひ頗る損失を免れざるの狀ありと雖も

徒手爲すことなき餘剰の人口あらば之を他國に移住せしめ以て殘餘の人民をして其全力を生産に盡さしむれば同額の生産物を小數の人民に分つるの利あり、又一國中人口稠密なる地方より其稀薄なる地方に移住するが如きは、大に國中の生産を増加し勞力の效驗を大にするの利あり、然れども移住の原因が制度の不良、身體財産の危殆、賦税の過重、干渉の過度、生産の衰頽等にありとせば速に其原因を矯め移住を止めざる可らず、出稼も亦其效驗は移住と同くして却て利益の大なるものあり、何となれば出稼は移住の如く出で、歸らざるに非ず、他邦又は國中の他地方に於て幾分の貯蓄を得携へて故山に歸り一身を立て所謂錦を故郷に飾るものなればなり。

不期の抑制とは疫病、戦争等の如く自然若くは人爲の出來事に由りて人口を減少するを云ふ、抑々疫病の禍たる當に生産に従事する所の勞力者の數を差除するのみならず豫防、療養、埋葬等の爲め巨額の費用を要し國家の富を浪費するは世人の熟知する所なり、而して疫病は老幼に比すれば壯丁を斃すと割合に多し、是れ壯者は其強を頼みて自ら不孳生の弊に陥るに由らずんば

不期の抑

遠慮の抑

ある可らず、備めざるを得ざるなり、戦争(野蠻時代の戦争は食料の不足に原因する者多く、文明世界に於ても疆土に關する争少しとせずは只に生産上最有効の壯丁を斃すのみならず其費用も亦疫病の比に非ず、而して男女其數の比例を失ひ風儀に關することなしとせず、加之世運の進歩するに従ひ戦争の害は益々大なるに至れり、是れ巨大の建築物、商船、鐵道、橋梁、工場等生産上の要具にして戦争の爲め災害を被むる者大に増加し、又往々國家の生産事業を停止せざる可らざることあるに由らずんばある可らざるなり。

又未だ一身を養ふの外餘財なきに既に妻子を養ふの費用を負担するとき、は生計の程度を低下せざるを得ざるは數の免れ能はざる所にして自己の能力を發達すること能はず社會に對し其地位を墮さざるを得ざるに至るは自然の勢なり、故に苟も遠慮の心ある者は先づ自己の才力を磨き以て社會の上流に立つべき準備を爲し、豫め財を積て妻子の養育に備へ、然る後に一家を構成するを通例とす、凡そ此の如き社會に於ては早婚の弊少く、無謀の婚姻も亦稀にして自ら人口の濫増を抑制す、之を遠慮の抑制とす、實に是れ人口の抑

制中最良のものにして大に貴重すべき所のものなり。元來生理上に於ては人間が父母たる力を備ふるは前陳の如く意外に早きものなりと雖も、男子は二十五歳女子は二十歳に達せざれば神脛未だ全く發達せず、筋骨未だ具らず、血氣鎮らず、故に早生の幼兒は概ね體質孱弱、腦力虛薄にして夭折する者亦少なからず、其能く成長する者と雖も健全なる者極めて稀なり、夫れ人類は生れて十五六歳に至るまでは通例自活の力なく、養育を父兄先輩に仰がざるを得ず、幼兒の夭折の如きは實に生産物浪費の極度と云ふべし、其能く成長する者と雖も天性多病、勞力に堪へず、其生産する所の物其消費する所の物に及ばざれば社會の損失固より尠少なざるなり、而して此等の弊を生ずるは多くは早婚に在り、豈に愼まざる可んや、又無謀の婚姻とは血統、年齢、性質、貧富、教育等の事を意とせず、區々の事情の爲め漫りに配偶を定むるを云ふ、抑々血統の禍は之を七世に傳ふ豈に愼まざる可んや、彼腦病、神脛病、血液病等の遺傳實に恐るべきものなり、而して年齢の懸隔は調和を破るの恐あり、性質の不良は家室を亂すの虞あり、貧富一方に偏するは或は夫唱婦隨の弊に過ぎ、或は牝雞の晨た

するの災害を醸成せん、教育なくんば子弟に家庭の教育を布く能はず、其他の流弊擧げて數ふるに暇あらず、遠慮の抑制は能く是等の諸弊を絶つ、其尊むべきは論を俟たざるなり

人口の増加を抑制する原因概ね斯の如し、然るに不幸にして勞力者輩は多くは無學無識にして深謀遠慮に乏しく、抑制中最も利益ある遠慮の抑制の如きは専ら中流以上に行はれ、勞働社會に於ては其勢力甚だ微弱なり、兵亂の如きは人口を減するの效驗ありと雖も大に生産事業の進行を防げ、資本を消耗し、從て勞銀基金の高を減少し、亂後に勞力者の艱苦を増加することなきを保せず、此原因に由りて人口の増加を抑制するは只其數を減少するに過ぎずし、却て大に其分配を亂し、勞働社會に利益を與ふるものなし、只遠慮の抑制を以て其利の最も大なるものとす、然りと雖も勞力者輩亦敢て常識を缺くに非ず、遠慮の抑制の利あるを悟り、深く茲に愼みざる可からず、先覺の士豈に亦進みて之を啓き之を導くの勞を取らずして可ならんや

第九目 勞銀基金の増加は資本の増加と正比例を保つこと

能はず

一國資本の總額を増加せば、勞銀基金の高亦隨て増加するは既論の如しと雖も、勞銀基金の高は必ずしも資本總額の増加と同比例を以て増加すること能はず、却て世の進歩に従ひ比較的減少するの傾向あるを、通例とす。抑々世運進歩し人口増加するに従ひ、其需用漸次多を加へ、優等土地のみに依りて食品及原料品を生産すること能はず、進みて劣等の土地に生産を試みざるを得ざるは、勢の免れざる所なり。然らば、則ち人口増加し事業擴張するに従ひ、一方に於ては食品、原料品の需用を増加し、一方に於ては其生産を困難ならしめ、以て其價格益々貴きを致すは、經濟上普通の順序にして、資本は原料品の購買に、勞銀は食品の購買に、比較的多額を費やさざるを得ざるは、天下の大勢なり。而して、固定資本の如きも、世の進歩に従ひ益々其精を加へ、其數を増加せざるを得ず、之が爲め巨額の金員を要する實に、昔日の比に非ず。資本の増加は、勞銀基金に入るもの割合に少なく、其大部分は固定資本増加の資に供せられ、原料品需用の増加と騰貴との爲に投せらるゝは、概近の情態なり。

加之一國の資本漸やく増加し、總て之を國中に於て使用するとき、は資本家所得の歩合大に減少するに至れば、彼等は資本を内國低利の事業に使用するを欲せず、之を他國に輸出するに至るべし。彼の英國の如きは、夙に外國放資を以て鳴り、資を外國及殖民地に投すること甚た多く、内事業失敗の爲め、露盡せし者少なからざるべしと雖も、本年(四十二年)一月の調査に依れば、英國人民の所有する外國及殖民地の有價證券の高積んで、三百五億圓に達す、而して近時毎年の英國新投資高は十億圓を超へ、其過半は常に外國及殖民地への放下なりとす。今最近西曆千九百七年の實況に據るに、當年の總投資額は十二億五千八百七十萬餘圓、中外國へノ投資額は六億千三百七十六萬餘圓、印度への投資額七千二百七十八萬餘圓、他の殖民地への投資額二億五百六十五萬餘圓、合計海外へ資本を放下せし高約八億九千二百十萬圓の巨額に達し、實に投資總額の約七割に達せり。然るに、同千九百八年には更に増加し、總額二十億三千六百五十一萬餘圓に達し、其中外國への放資八億八千六百九十四萬餘圓、印度一億三千五百五十九萬餘圓、資民地四億五千七百二十三萬餘圓にして、當年英資の

輸出せられたる者都合十四億七千九百七十七万餘圓の巨額に達せり、而して佛國の外國投資額は約百七十四億圓、獨逸は約百三十億圓にして内五億圓は殖民地へ放下する者なり、最近米國亦漸やく外放資を求むるの勢あり、斯の如く一方に於ては固定資本原料品の爲め割合に巨額の資金を要し一方に於ては巨額の資本を輸出するを以て資本の總額増加するも勞銀基金は資本の他の部分と正比例を保つ能はず、勞銀は富の増加と同一の比例を以て増加すること能はざるは勢の免れ能はざる所のものあり而して人口の増加は家屋の不足を來し方今家賃の高き亦往日の比に非ず、獨都伯林の如きは最も甚たしく僅々八百マルクの収入より最低二百マルク、最高四百マルクの家賃を支拂はざるを得ざるの實例あり、勞働者の境遇頗る困難なるものなしとせず、然れども資本總額の増加は多少勞銀の平均を増加すべきを以て大體に於て其利益たる固より論なき耳

第十目 機械の進歩と勞銀との關係

世運進歩し需用漸やく加はり生産の事業盛大に赴くに從ひ機械の使用漸

次に發達し大に勞力を省略す、是に於て機械の使用は如何なる効驗を勞力者に及ぼすやの論題、雖然として世に起れり、殊に勞力者輩の如きは往々事物の關係を推究するの力に乏しく専ら目下直接の影響を考へ、機械を以て勞力の需用を減じ隨て勞銀を減すべきものとし直に其使用の擴張と改良とを嫌厭するの弊あり、又新式機械の使用は勞力者頗る之を難んずるの事情あり、蓋し數年の間舊式機械の使用に馴れ身體筋骨自から之に適合し習ひ性と爲りて殆ど其勞働を意とせざるに突然新式機械を用ゆるときは舊慣其用を失ひ所謂古の固より固まりたる筋骨を以て更に新奇の動作を試みざるを得ず、爲に頗る困難を覺ゆのみならず未だ新式機械の使用に熟練せず當初は新式機械の效力意外に薄弱にして其效用の如何に迷ふもの尠しとせず、然れども是れ只一時の効驗のみ筋骨を訓練する數回幾くもなく能く新規の動作に堪ゆるに至るべし、苟も新式改良の機械にして適當の者たらしめば最後の効驗を全ふするは疑を容れず、一時の効驗を以て永遠の効驗として不利を萬世に傳へ以て咬齧の悔を殘すは迂愚の極と云はざるを得ず、慮らずんばある可らざ

るなり

斯の如く機械使用の擴張と其改良とは一方に於ては直接に労働の需用を減するの思あり、一方に於ては當初労働者が其機械の使用に苦むの事情あるは疑ふ可らずと雖も、凡そ労働歩合は資本家漫りに之を左右し得べきものに非ず、又労働者の隨意に之を昇降し得べきものに非らず、其多少を決するは必ずや之が原因なる可らず、今若し機械の使用又は改良發明の爲め労働基金を減するの結果あらは之を以て多少労働の歩合を減少せざるを得ず、機械の擴張進歩急劇に過ぎ、機械亦其目的を誤まり生産を輔くること能はざる時は或は此結果を來すなきを保し難し、然りと雖も苟も其進歩擴張をして眞に生産の増加を助くるものたらしめは労働基金忽ち舊に復し更に進みて舊に倍するに至らん、今北米合衆國の實況に就て之を見るに西曆千九三年を以て終る所の五十年間に機械の使用に依り生産力は十三倍に増加し労働者の數は五倍半と成り、労働總額の増加は十倍に達せり、故に機械使用の擴張、改良、發明の實施は假令一時労働を減少するの傾向あるも結局労働者の利益と爲る

を常勢とす、然れども若し一國資本の總額を増加するに非らずして工場の新設又は鐵道熱の結果の如く急劇に固定を増加するときは其結果必ず流動資本を減せざるを得ずして労働社會に不利を與ふるは勿論一國の生産上圓滑の動作を失ふは既に第三章に於て論究したるが如し、故に不當の機械擴張は労働者の利益に非ずして國家の進運に害あるものと云はざるを得ず

斯の如く機械の擴張は結局労働者の利益と爲るを遠例と爲すと雖も、精巧労働は改良發明の爲め永久に其精巧より生ずる利益の一部又は全部を失ふの場合なしとせず、例へば茲に一製靴師ありて革を斷ち靴を縫ふの妙伎を得其製する所の靴は品質佳良にして且つ一日に製造する所の分量は他同業者の得て企て及ぶ所に非ず、其伎の精巧なるが爲め他の同業者に比して二倍の労働を得たりとせん、然るに茲に精巧なる製靴機械の發明ありて佳良の靴を製造し、其品質彼の精巧なる靴師の製造品に劣らず而して價格に於ては却て廉價なることを得ば、彼れ其妙伎の利益を壟斷すること能はず、唯尋常一般の製靴師に比すれば少しく顧客多きの利あるか、又は普通の労働者より少しく

高き勞銀を以て製造所に雇はれ得るかに過ぎざるべく、其妙伎より生ぜし特利の如きは最早之を施すに所なく永久に之を失却せざるを得ざるなり、然れども尙ほ伎能の効能は全く消滅せず、其収入は尋常一般の勞力者に比して多少多かるべきは疑を容れず

第十一目 勞力者生計の困難

前數目に論ずる所を以て之を觀れば勞銀基金は資本増加の割合に其額を加へず、人口の抑制は勞力社會に其勢力を退ふること能はず、機械の進歩は結局勞力者一般を利するの効驗ありと雖も、一時其需用を減少するの場合なきを得ず、加るに世運の進歩人口の増加は食品及原料品の價格を高め、獨逸に於ては西曆一八七五年の牛肉の價を百とすれば同一九〇〇年には百十一、小牛の肉は西曆一八七一年の價を百とすれば同一九〇〇年には百二十一と成り、羊毛は西曆一八九七年を百とすれば同一九〇七年には百四十八と成り、木材は同期間に百より百三十九に上れり、機械の進歩は生産費を減じ、工業の價格を減し得へきも其最大の利益を得るは細民の需用品に非ずして中流以上

の需用に係る精巧品にありて細民の需用に係る物品の如きは其原料品の價格の増加に由り割合に低廉なること能はざるなり、何となれば上等精巧品の價格を決するは其製造の手續如何に依るもの多くして原料品の如きは實に其價格の一小部分たるに過ぎざるも、粗造品に至りては即ち然らず其價格の高下は一に原料品を得るの難易に由ればなり、故に進歩改良の大利を占むる者は富民にして細民に非ず、加之人口の増加に従ひ食品益々其價を加ふるの傾向あり、果して然らば勞力者將來の生計其困難を増すは自然の數なりと云ふべし、實に是れ大勢の向ふ所固より人爲の奈何ともすること能はざる所なり

然りと雖も人定まりて而して後ち能く天に勝つ、資本配當の途其宜きを失はず、勞働社會の智力を養ひ其勢力の効驗を増し、勤勉遠慮の念を喚起し以て其地位を進むることを得ば、先天の困難亦何ぞ之を避くるを難しとせんや、然るに世之を悟らず往々誤謬の見を以て之が救済の途を求めんとす、過らざらんと欲すと雖も世に得べけんや、今之を實地に做するに近年我國中流以下人

士の生計漸く困難ならんとす、請ふ左に十年以來物價の變動を表出し、後學考の資に供せんとす、固より列記物品中には專賣制度消費稅等人爲の結果に困るものなきに非すと雖も亦以て大體を觀るに足らん

品目	明治二十年ノ物價	二十年頃ノ流弊ノ故當時ノ相場ヲ以テ換算スルモノ	上開ノ額ヲ現行金價ニ換算スルモノ	明治三十九年ノ物價	實價騰落ノ割合(△印ハ騰)
米(六三升) 實	二、五〇〇	一、九九〇	三、九七〇	七、〇〇〇	△ 〇、九一
米(六三升) 實	二、七七〇	二、一三七	四、二六三	七、二〇〇	六、八九
油	二、三〇〇	一、八五	三、六九	五、七〇	五、四五
油	二、〇〇〇	一、五四	三、〇七	六、〇〇	九、五四
油	一、五〇〇	一、二二	四、六	一、二〇	一、六〇九
油	一、五〇	一、一六	二、三二	三、〇五	五、一五
油	二、四〇	一、八五	三、六九	五、一〇	三、八二
油	六〇	四六	九二	二、四〇	一、六〇九
油	一、五〇	一、一六	二、三二	六、〇〇	一、五、九七
油	九〇〇	六、九四	一、三八五	一、三五〇	△ 〇、二五

品目	明治二十年ノ物價	二十年頃ノ流弊ノ故當時ノ相場ヲ以テ換算スルモノ	上開ノ額ヲ現行金價ニ換算スルモノ	明治三十九年ノ物價	實價騰落ノ割合(△印ハ騰)
新米(一石) 實	二、五〇〇	一、九九〇	三、九七〇	七、〇〇〇	△ 〇、九一
新米(一石) 實	二、七七〇	二、一三七	四、二六三	七、二〇〇	六、八九
油	二、三〇〇	一、八五	三、六九	五、七〇	五、四五
油	二、〇〇〇	一、五四	三、〇七	六、〇〇	九、五四
油	一、五〇〇	一、二二	四、六	一、二〇	一、六〇九
油	一、五〇	一、一六	二、三二	三、〇五	五、一五
油	二、四〇	一、八五	三、六九	五、一〇	三、八二
油	六〇	四六	九二	二、四〇	一、六〇九
油	一、五〇	一、一六	二、三二	六、〇〇	一、五、九七
油	九〇〇	六、九四	一、三八五	一、三五〇	△ 〇、二五
魚類	五〇〇	三、八六	七、七〇	一、五〇〇	九、四八
魚類	六〇〇	四、六三	九、二四	一、四〇〇	五、五八
魚類	六〇〇	四、六三	九、二四	一、四〇〇	九、四八
魚類	九〇〇	六、九四	一、三八五	一、五〇〇	〇、八三
魚類	五〇〇	三、八六	七、七〇	一、五〇〇	九、四八
魚類	六〇〇	四、六三	九、二四	一、四〇〇	五、五八
魚類	六〇〇	四、六三	九、二四	一、四〇〇	九、四八
魚類	九〇〇	六、九四	一、三八五	一、五〇〇	〇、八三
豆類	一、二〇	九三	一、八六	三、六〇	九、三五
豆類	一、八〇	一、三九	二、七七	四、二〇	五、一六
豆類	一、六〇	一、二三	二、四五	四、〇〇	六、三三
豆類	四、五〇	三、四七	六、九二	九、〇〇	三、〇一
豆類	二、〇〇	一、六四	三、二七	五、〇〇	五、二九
豆類	一、七〇	一、三一	二、六一	三、三〇	二、六四
豆類	九〇〇	六、九四	一、三八五	一、三〇〇	△ 〇、六一
豆類	二〇〇	一、六四	三、二七	五、〇〇	五、二九

第四節 分類

一三九

日用品類	日用品類	計
三〇〇	三〇〇	三〇〇
一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇
一四、二〇〇	一〇、九五七	二一、八五九
二二、八五九	一、五四〇	二〇、〇〇〇
三〇〇	六〇〇	三〇、〇〇〇
三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇
七、〇五	二、九九	九、〇四

又近年に於ける物價と勞銀との關係を見るに後者の騰貴は概ね前者に及ばず以て本目論する所を證するに餘りあり

東京市中の物價と工賃

年次	物價指數	工賃指數
明治三十三年	100.0	100.0
明治三十四年	100.0	100.0
明治三十五年	100.0	100.0
明治三十六年	100.0	100.0
明治三十七年	100.0	100.0
明治三十八年	100.0	100.0

年次	物價指數	工賃指數
明治三十九年	100.0	100.0
明治四十年	100.0	100.0
明治四十一年	100.0	100.0

備考

一 物價指數は日本銀行に於て毎月調査せる物價指數の第一類即ち日用必需品にして明治三十三年十月の相場を百として算出せしものなり

一 工賃指數は大藏省理財局にて調査せる諸職工賃の明治三十三年に於ける平均賃金を百として算出せるものなり

一 明治四十一年は三月までの平均なり

最近中流以下の生計漸やく困難ならんとするの狀況斯の如し請ふ今一步を進めて救済法の真正有効なる者と其無効有害なる者とに就て畧陳する所あらんとす

第十二目 職工同盟強請及同盟罷工

勞力者の生計は今日既に難く且つ將來に益々困難を加ふるの傾向あるを以て、勞力者中同盟を爲し規約を設け以て互に疾病又は老後の費用を補助し或は資本家に對して自己の冀望を訴へんと欲するとき其要求を遂るを以て目的とし一致團結することあり、之を職工同盟と云ふ又連合の力に依り強て資本家に迫り其望む所を請求するを強請と云ひ、聽れざるときは同盟して業を罷むるを方法とする者を同盟罷工と云ふ由是觀之職工同盟に二箇の目的あり

第一 互に疾病傷殘等の不幸を助け、老後の安樂を補助すること

第二 資本家が勞金を減少せんとするときは同盟中一致團結して一時に勞働を罷むる等の強迫手段を用ひて其減少を拒み、又は勞銀の増加を請求すること

等是なり、第一の目的の如きは同業相憐み疾病其他の災害に際しては相互に補助し、又は老者の救護を期するものなれば人情宜く此の如くなるべくして固より闒然すべきものなしと雖も、第二の目的の如きは大に論究すべきもの

内下市
には
可
なり

あり、今若し商業沈滞し資本家相當の利益を得る能はざるに尙ほ勞銀を減せず従前の高を支拂ふとせば勢ひ營業所得を減少し甚しきに至りては損失を受けざるを得ざるべし、此時に當り資本家に反對するの同盟を結び勞銀の維持若くは増加を求むるも資本家は決して之に應せず同盟者の失敗に終るや論なき耳、何となれば斯の如き時期に際會しては資本家は寧ろ暫時其業を停止するの利あるを知ればなり、元來斯の如く生産品の捌け方思はしからず下向きの市況を呈するは他の事情に變動なしとせば生品の供給多きに過るに原因す、此時に當り同盟罷工すと雖も毫も資本家に痛痒を感せしむること能はず、却て其喜ぶ所なるや亦知る可らず、然るに同盟の貯蓄固より限りあり焉ぞ久に堪るに足ん、然るを況や此時に方り資本家をして強て従前の勞銀を拂はしめば實際損失を被り彼等其業を全廢せざるを得ざるに於てをや、果して然らば勞力者は終に一錠の勞銀をも得ること能はざるに至るは必然の勢なり故に斯の如き時機に際して同盟罷工を企つるが如きは只徒らに同盟の貯蓄を盡すのみならず弓折れ矢盡き終に兜を説ひて資本家の軍門に降ら

向上市場
成功す

第四章 分配

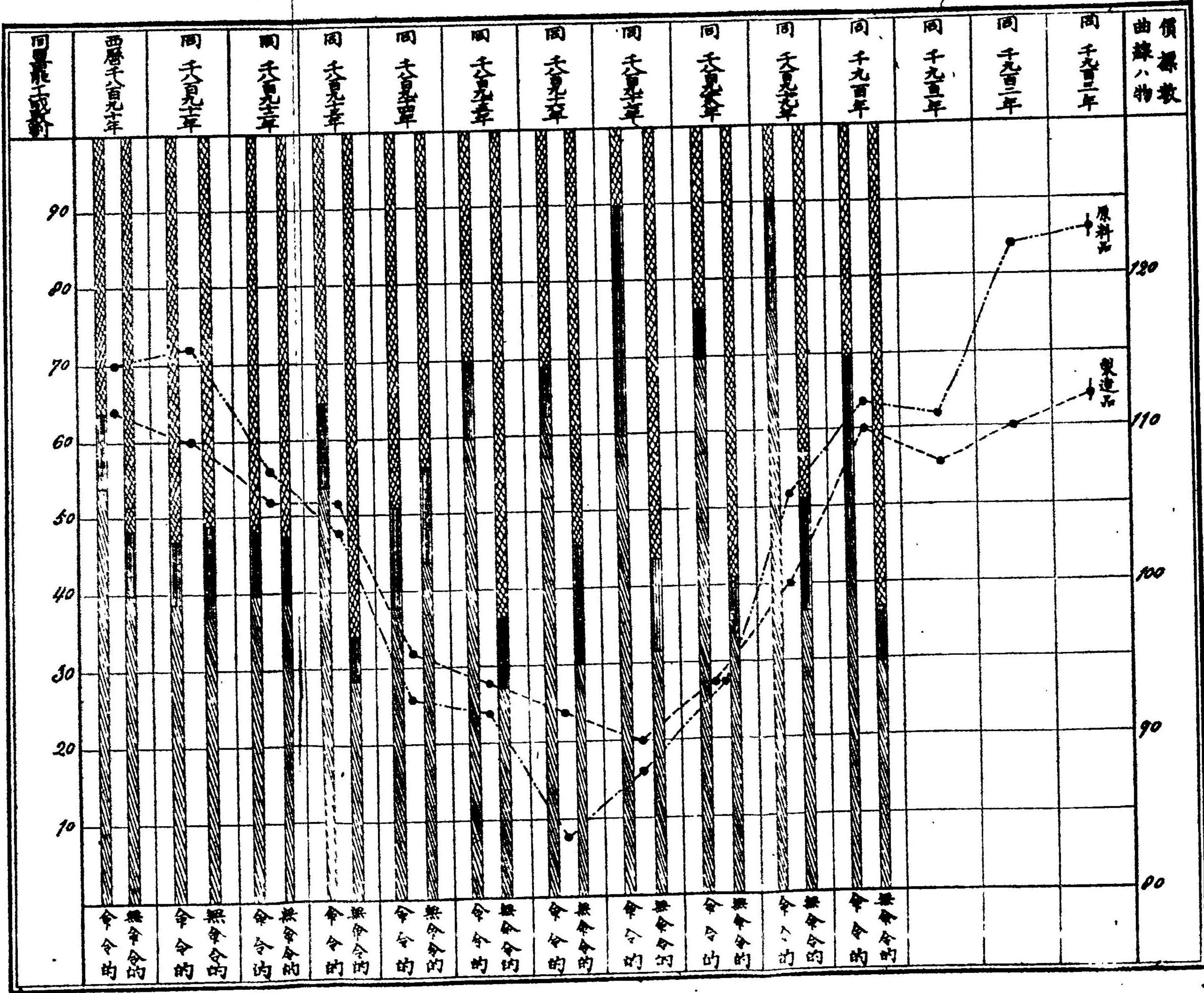
ざる可らず、然らば即ち情願はれ勢屈して、曩の五分減(例へば)或は一割減となるも尙且つなを忍ばざるを得ざるの悲境に陥るなきを保せざるなり。

然りと雖も市場活潑資本家の營業所得漸次に増加し、實際其所得を勞力者に分與することを得べきに當り、尙ほ従前の勞銀歩合を保つときは勞力者より進みて之が増加を請求し、聽れざれば同盟罷工を企るも決して之を不穩當と云ふを得ず、却て之を智慮ある文明的動作と云ふを得べきなり。元來斯の如きの市況に際しては當業者の生産する所の物品は其需用を増加して供給不足を告げ、其價格騰貴し資本家異常の利益を得べきを以て假令一日と雖も罷工に遭遇せば需用正に盛なるの物品を生産すること能はずして恰も龍の玉を失ふが如き思あるは自然の勢なり。此順況に應じ勞銀の増加を請求せば資本家も計算上之を増加し得べきを以て罷工の目的を達すること必然たり、而して是れ固より天の許す所にして決して逆取に非ざるなり。抑々先天の利は進みて以て之を收むべし、天の與ふるを取らずんば却て災あり、而かも逆取は天の許さざる所、夫れ向下轉去は自己の鼻孔人の手裏にあり慮らすんばある

損失を
するの必

可らず、然れども向上轉去は以て他人の鼻孔を穿つに足る世に取て之を忽するを得ん哉同盟罷工の斯の如く時に勢力者の爲め損失となり時に利益となる、禍福の分るゝ所は只々自然に従ふと之に反するに在る耳、然るに勞力者輩は大率見聞狭くして深謀遠慮を缺き、事物の關係を探究し機に乗じて着々其歩を進むるの智力に乏しく、勞銀減少すれば其原因の如何を問はず情に驅られて漫然同盟罷工を設み、資本家の利益多く増給の目的を達し得るの機あるも之に投ずるの才識なく機を失ひ敗を取り尙ほ茫乎として悟らず殆ど傍觀するに忍びざるものあり、先覺の士能く之を導くに非ずんば何を以てか彼等の地位を進むるを得ん、然り而して其宜く罷工を試みるべく宜く之を試みる可らざるの機を察するは決して爲し難きの業に非ざるなり、凡そ經濟界の事物は據る可きの標準あらざるはなし、苟しくも普通の注意を怠らざれば機を逸し誤を爲すこと甚だ難し、例へば茲に多數の勞力者を使用する紡績事業に従事する者ありとせん、生産事項に變動あるに非ずして綿糸の價格日に月に減少を來すが如きことあれば即ち是れ營業所得の歩合減少するの時なり

此時に方り若し勞銀の減少あれば勞力者は宜く柔順に伏従すべし之に反して其價格日に月に増進するときは即ち是れ資本家の所得裕かにして増給を聽るすを得るの時なり然るに資本家より進みて勞銀を増加するが如きは同業者其他より勞力需用の競争を始むるに非されば實地に於て決して之なしと云ふも敢て妨げなかるべし故に斯の如き時機に際會するときは勞力者より進みて増給を請求し聽れざれば罷工を試みるは機宜を制するものにして固より謙讓すべきに非ざるなり然れども斯の如きの機宜を制するは無智の勞力者僅の能く爲し得べき所に非ずして先覺の士之を導くに非ずんば焉んぞ能く其終を全ふするを得ん哉須らく有効の組織を構成し常に内外市場の景況を詳にし進退其宜きを制し大に益する所なる可らず勞力者に此同盟あるは猶ほ兵に隊伍あるが如く其指導者あるは猶ほ隊伍に將校あるが如し先覺亦奮ひて以て指導の勞を惜まず平時に在りては勞力者智識の進歩を計り事あれば即ち其進退を指揮し勢に據り其宜きを制せば世を利する蓋し鮮少に非ざるべし元來勞力者は天下人口の過半を占め以て社會の基礎たり此



元來北米合衆國は職工を以て著名なる國の一にして西曆千八百一一年乃至同千九百五年の職工員数は三萬六千七百五十七にして國籍人員六百七十二萬八千二十八人の多きに達す、抑々合衆國は英國に比し倍數の人口を有するを以て國籍人員に於ては取て過多なりと云ふを得ざるに似たりと雖も主農半工國として頗る多大の數と云はざるを得ず而して其數逐年増加し西曆千八百八十一年には同數四百七十一人、千八百九十一年には千八百三十三、千八百九十五年には千八百三十三、千八百九十四年、千八百九十四年には千三百四十九、千八百九十五年には千三百四十九、千八百九十六年、千八百九十七年、千八百九十八年、千八百九十九年、千九百零一年、千九百零二年、千九百零三年、千九百零四年、千九百零五年、千九百零六年、千九百零七年、千九百零八年、千九百零九年、千九百一十年、千九百一十一年、千九百一十二年、千九百一十三年、千九百一十四年、千九百一十五年、千九百一十六年、千九百一十七年、千九百一十八年、千九百一十九年、千九百二十年の間に於ては、職工の數は年々増加するを忘る可らず、而して職工の原因は主として増加の請求、減給の拒抗、労働時間、労働組合の請求等なり、職工の數は年々増加するは勿論なりと雖も西曆千八百九十八年以降は概して増加し、仲業も漸やく多きを加へ成功の數亦増加の傾向を示し合衆國労働問題も近時多少の面目を改めたり

基礎にして鞏固ならざれば社會の安寧を期するを得ず國力の伸張得て望む可らざるなり勞力者社會の利益豈に夫れ之を忽にするを得ん哉
今事實に就き米國に於ける同盟罷工の實況を示せば左の如し

然り而して英國の實況は左の如し

自西曆千八百九十四年十二月間に於ける英國の資本勞力の争議

種類	名稱	百分比例	原因		結果	
			名稱	百分比例	名稱	百分比例
織業	織山及石坑業	九、〇	勞働時間	六三、五	勞力者ノ勝利	二七、二五
	金屬事業及造船業	四七、〇	役員ニ對スル不平	四、五	資本家ノ勝利	四一、五〇
紡績及織物業	紡績及織物業	一四、五	勞働ノ方法	八、五	仲裁ニテ折合	三一、二五
	衣類業	一五、五	職工同盟	一三、五		
運送業	運送業	四、五	其他	八、〇		
	雜業	四、五		二、〇		
總計		五、〇				

又其回数人員等を示せば左の如し

西曆年次	資本勞力間 争議回数	争議ニ關係シテ 勞力者ノ數	争議間ノ延日數
自一八九五至九	七九三	二二五、〇〇〇	七、五二四、〇〇〇
一九〇〇	六四八	一八八、五三八	三、一五二、六九四
一九〇一	六四二	一七九、五四六	四、一四二、二八七
一九〇二	四四二	二五六、六六七	三、四七九、二五五
一九〇三	三八七	一一六、九〇一	二、三三八、六六八
一九〇四	三五五	八七、二〇八	一、四八四、二二〇
一九〇五	三五八	九三、五〇二	二、四七〇、一八九
一九〇六	四八六	二一七、七七三	三、〇二八、八一六
一九〇七	六〇一	一四七、四九八	二、一六二、一五一
一九〇八	五一九	二六一、一四七	九、七七七、八〇〇

(自一八九五至九〇八年ノ平均ニシテ一九〇八ハ十月二十一日ニ至ルマテノ數ナリ)

英米兩國に於ける同盟罷工の情況は前陳の如し然り而して最近歐洲大陸に於ても商工の事業發達するに随ひ罷工漸やく頻繁にして西曆千八百九十七年乃至同千九百六年に至る滿十ヶ年間佛國に於て起りたる同盟罷工は四

千四百二十一件之に關係したる勞力者の數は百八十八万四千九百七十八人にして一年平均十八万八千四百九十八人なりとす、今西曆千九百一一年の調査に據れば佛國の職工人夫の數は九百四十五万一千九百七十九人なるを以て一ヶ年に於て同盟罷工に關係せし人員は總數の凡そ二分なり、而して罷工には各々長短ありて休業日數も區々なりと雖も右十ヶ年の休業延日數は三千四百四十万二千七百九十八日にして一ヶ年約三百四十四万二百八十日に相當す是れ一見甚た多きが如しと雖も佛國に於ける一ヶ年の勞働日數は三百日なるを以て之を基礎とし一ヶ年の勞働總延日數を計算するときは前記三百四十四万餘日は僅かに其万分の十二に止まり敢て驚くべき大數と云ふを得ず又之を工事に從事せざる官吏公吏の疾病其他の事故休の數即ち西曆千九百一一年の千分の三十三及同千九百年乃至同千九百七年の平均千分の八一に比するも甚た少し故に同盟罷工は其害一見甚だ大なるが如しと雖も一小部分に關し一般に對し其害則ち大ならずと論斷する者あり然りと雖も是れ徒らに重を員數の多少に置き事物の關係を詳かにせざるものにして固

より堂に登るを得ざる所のものたり、何となれば同盟罷工は直ちに生産分配の機關に係り其組織を紊亂し其調和を破り損害測知す可らざるものあればなり、殊に其衝に當る部分の如きは之が爲め大損失を受け加ふるに一般の不便を免れず、今一例を舉んに會て西曆千九百四年マールセイユに於て起りし港人足の同盟罷工の如きは近年に起りし著名なる者の一にして同年三月より九月に連なり殆ど同港の經濟機關を立ち窹みの情態に陥らしめ出入貨物の噸數前年は千四百五十一万二千噸なりしに罷工當年は千三百三十五万三千噸に減し、對向港なるゲンスは之に反し千五百十三万噸より千二百七万噸に増加し、西曆千九百五年に於ては反動の爲めマールセイユを二百二十七万噸に増加し、ゲンスは九十二万噸を減せり、總て運送、通信、點燈等公共的性質を帯ぶる所の事業に於ける罷工は其害の及ぶ所廣且つ大なり、立法上亦大に注意を要す慎まざるばある可らず、又勞力者に就て之を論ずるも罷工の爲め利益を得るは容易に非ず、今前記の例に據り之を見るに十八万八千餘の休業日の平均は一人十五日八分にして一ヶ年の勞働日數三百日の五分二厘七毛に當り

其丈は勞銀を失ひたる勘定なり、假令好時機に罷工を爲し例へは五分の増給を得るとするも五分増にて十五日以上に失ふたる勞銀の全額を回收するは短日月の能く爲し得る所に非ず、況や長日月の罷工は同盟の資金を盡して尙ほ不足を見るは數の免れ能はざる所なるに於てをや、今佛人某の調査に據るに前記十ヶ年間の同盟罷工中勞力者の勝利となり給料の増を得たる高は一日に平均零法三二七にして休業の爲め失うたる者は七十九法四十七零なりとす、果して然らば得を以て失を償ふには二百四十三日の勞働を要す、然れども是れは前記十ヶ年間の平均にして其間種々の事情ありて其結果を異にす、即ち西曆千九百四五年は好景氣なりしを以て回復は七十五日乃至七十八日にて足りしと雖も同千九百六年は不景氣なりしを以て三百六十三日を要し、同千九百一二年の如きは年柄最も悪くして回復には三ヶ年を要する計算となれり、然らば則ち前損を回復せざる中に復た新罷工を生し永劫回收の道なきの不幸に陥るなきを保せず、慮らすんばある可らざるなり

次に記載すべきは西曆千九百六年五月一日に始まり三百九十五の罷工を

惹起し一万二千五百八十五ヶ所の印刷所を動搖せしめたる一大罷工なりとす、此罷工に關係したる勞力者の數二十万二千五百七人にして休業延日數三百五十七萬三千三百三十三日に及べり、是等罷工中の得失は失六百三十七萬六千八百八十三法、得百二萬千七百七十七法にして失の回復の爲め千八百七十一日即ち六年以上を要せり、世に怖れざる可ん哉、元來罷工は協議に前つあり後るゝあり又は仲裁の上協定する者等種々ありて毎時其情況を異にすと雖も前記十ヶ年間の罷工の結果其損失を償ひ得しは平均二百四十三日なりとす、而して成功は總數の二割三分、人員は一割二分に止まり、不成功は三割八分にして人員は二割六分に達し、其他は仲裁にて協議に終れり、然れども長期に亘る罷工は概ね成功少なく、件數は百分の六人員は三分六厘に當れり、獨逸に於ても同様の結果を呈せり、今佛國最近の罷工回數及人員を表出すれば左の如し

西曆年次	回數	人員
一九〇〇	九〇二	二二二、七一四
一九〇一	五二三	一一一、四一二

一九〇二	五一二	二一三七〇四
一九〇三	五六七	一二三、一五一
一九〇四	一、〇二六	二七一、〇九七
一九〇五	八三〇	一七七、六六六
一九〇六	一、三〇九	四三八、四六六

近時獨逸は同盟罷工最も多く西曆千九百六年に於ては資本家と勞力者の
 爭議八千五百四十三件を數へ内四千五百五十八件は仲裁に依り罷工を見ず
 して止めり、尤も佛國に於ては單に勞銀に關する紛議にして協議整ひし者も
 數へず獨に於ては之を數ふるを以て此差違を生ずるも獨に於ては前記年中
 の現に罷工となりたる者三千八百七十五件を數へたり、而して罷工を爲した
 る勞力者は三十一萬六千四十二人、單に勞銀増加の請求又は減少の抵抗を爲
 したる人員は六十萬千七百六人にして前者の成功は五割五分、後者の成功は
 七割八分に達し、失敗は罷工に於て二割一分、勞銀問題に於ては二分に止まり、
 其餘は仲裁に依り讓歩となれり、而して勞銀問題の紛糾に付き要したる費用

五萬八百七十八馬にして罷工の費用は千三百二十九萬七千八百六十二馬に
 達せり、當年の罷工又は協議に依り六十九萬人は三百日即ち五十週問題に就
 て勝利を得一年に六千四百萬馬の利益を得、其内四千二百萬馬は勞銀問題に
 關する者の獲得する所と爲れり、然れども罷工の爲め失ひたる勞銀は二千百
 七十萬馬にして勞銀問題の紛糾中休業したるか爲に失ひたる勞銀は千五百
 萬馬にして休業時間は平均一人に付き四十八日なりとす、爾後の情況も大同
 小異にして大差なく西曆千九百七年に起りし同盟罷工は二千二百七十九回
 にして組合若くは第三者の煽動に係る者千六百七十九回其内千三百四十九
 回は金銀を以て幫助せられたり、而して之に與りたる人員は四十四萬五千百
 六十五人にして其原因は主として勞銀及勞働時間なりとす、今其内容を見る
 に前者中の重なる者は勞銀の維持、増加、時間外勞働に對する特別報酬、從たる
 勞働に對する特別勞銀の請求等にして後者中の重なる者は勞働時間の維持、
 短縮、時間外勞働の短縮若くは廢止、土曜日夜業時間の短縮、勞働時間確定の請
 求等なり、而して其結果は成功三百七十七回、一部成功九百三十三回、不成功則

ち失敗九百六十九回なりとす。越へて西曆千九百八年に於ては回数千三百七、人員十九萬六千七百八十七にして成功二百十回、一部成功四百十五回、失敗六百八十二回にして失敗常に多數を占む。翻つて鎮出の結果を見るに西曆千九百七年に起りし鎮出は二百四十九回にして内同年中に鎮定したる者二百四十六件にして失職者八萬千六百七十七人なりとす。而して其結果は成功百十二、一部成功百十、九、不成功則ち失敗は僅かに十五回なり。同千九百八年に於て起りし鎮出は百八十一回、失職者八萬二千四百四十一人にして成功百十四、一部成功五十六、失敗十一回なりとす。是に由て之を觀れば罷工鎮出は正反對の結果を示し資本勢力の間圓熟の調和を缺くや疑を容れず尙ほ大に研究を積むの要あるや多辯を要せず。

方今同盟罷工及鎮出の實況概ね斯の如し蓋し鎮出とは資本家が單獨若くは協同して勞銀又は勞働時間等に關し自己の主張を買かんか爲め工場を鎮して強制的に勞力者を解雇するを云ひ、罷工と相對して譲らす兩者交々起りて互角の勢を爲し寧罷工より起りて轉して鎮出と成り、又は鎮出の結果變し

て罷工と成るありて時に或は執れを執れと別つ能はさる所のものあり。今近時佛國に於て起りたる有名なる鎮出にして尙ほ吾人の記憶に新たなる者を舉ればブレスルの硝子事業家の鎮出、ローン河のセイント、ルイ港運送業の鎮出、ベサンソンのペンキ塗師の鎮出、巴里の建築業者の鎮出等にして就中最も有名なる者は列記最後の者なりとす。此鎮出は西曆千九百六年五月一日を以て發表せられ急ち罷工と成り事不意に出て勞力者方少しの用意もなく種々の反抗を試みしと雖も終に其大敗に歸せり。是等の事屢々起り雙方の不利甚たしく其弊に堪へざるを以て巴里建築家はアンウエルヌ及マーセイユの例に倣ひ資本家勞力者間に同盟を組織し其費用は資本家方の受持と爲し加入勞力者には他に先ち履傭すへき等の種々の便宜を與へ、勞力者方は之に報するに溢りに罷工を爲さす己を得ざる事情あるときは先つ以て之を仲裁委員に訴へ其指揮に従ふべきものとし之に反する者は解傭の處分を受るものと爲せし等頗る見るべきものあり。今哉我國の事情亦商工漸やく盛ならんとし罷工、鎮出に向て一層の注意を拂はすんばある可らざるの時機に達せり。

前記同盟の規約書中参考すべきもの少しとせず、依て其梗概を左に掲出せん

一 社員の数は無限にして左の三級より成立す

一 正員

二 客員

三 名譽員

正員は建築事業家にして組合格約を遵守す

客員は職工長及職工にして組合格約を遵し規定の利益を受く

名譽員は委員の定むる所の年額を負担す

正員は組合年限即ち三ヶ年間は組合を脱することを、得ず

客員は何時たりとも組合を脱することを得

二 本組合は勞力者の爲め最短勞働時間に就て定められたる最低勞銀を保持するを目的と爲す

三 資本家と勞力者間に生ぜし一切の係争事は總て之を仲裁に附す

四 本組合は左の救護方法を設け建築業に従事する勞力者の物質的及精神的改良に力むへし

一 疾病及休業に對する救護

二 勞力者の寡婦孤兒に對する同上

三 退職者に對する同上

建築事業の雇傭人及監督者は必要あるとき本規約の利益を受るの請求を爲すことを得

五 正員は客員のみにて其事業經營の爲め不足を生ぜし場合の外組合外の勞力者を使用することを得ず

客員は正員以外の建築家の爲に勞働することを得ず但組合所定の最短勞働時間外に於て正員が客員の爲に適當なる勞働を興ふること能はざるときは此限に非ず

六 正員は其使用したる勞力者に支拂ひたる勞銀の年額に比例し加入費保險保給費等の費用を分擔す

- 七 規約書第十五條に従ひ正員及客は仲裁委員に訴ふることなくして締出又は罷工を執行することを得ず
之に反する者は總て同盟より除名せらる
- 八 本組合の事務は正員及各部所屬の客員に依り選はれたる委員之に任す
- 九 選挙は委員の定めたる時と場所に於て無記名投票を以て之を行ふ
- 十 總會には正員客員總て出席す
- 十一 資本家勞力者間の争議は所定の局へ之を提出し局は之を仲裁委員に移牒す
第一仲裁の結果満足ならざるときは委員中より又は名譽員中より双方に於て各々二人を選ひ再審を行はしむ
再審員の説一致せざるときは委員に於て豫て一ヶ年前調製し置きたる建築家の氏名簿中より抽籤を以て一人を定め其説に従ふものとす
- 十二 宣告は總て儀式を用ひず友愛の情を以て説諭的に之を爲す
新組合の組織凡そ斯の如し設立日尙ほ淺く未だ十分に實際の結果を見る

能はずと雖も其資本勞力双方に利ある議論を俟たざるなり。然れども花季風雨多く明月亦雲霧あり世常に平かなること能はず如何なる良法あるも時に或は罷工の災あるを免れず故に近年百尺竿頭一步を進め罷工保険なる者の設立を見るに至り率先之が設備を爲せしは西曆千九百五年六月の設立に係る里昂のロイド會社にして、尋て同千九百七年六月プログレ(進歩)會社の設立ありて頗る世人の注意を惹けり。今其組織の大體を見るに同一事業を各部に分ち勞力者をして其從事する所の業務に従ひ各々其一部局に専屬せしめ、更に中央部を置て各部局を援助し、中央委員(當該事業に關係なき者を以て組織す)を設けて罷工が全く勞力者の利害に係り資本家に關せざるものなるときは之が指導の任に當り、罷工中生計費及勞力者か資本家に向て起す訴訟費を補給し其他罷工より起る費用は之を支出せず、斯の如くして前記第一の會社は西曆千九百八年一月一日には既に二十萬法の保険金を集めたり

又商工同盟組合は左の方法を採用せり罷工の第四日より第二十七日まで前記の如き各部に於て勞力者を救護し第二十八日より第九十日までは之

を中央部に移す、而して被保険者の組合は同一事業の各部専門と土地の區域を以て之を分つ、中央部に於て罷工者の請求理ありと判断するときは資本家は之に従ふの義務あるものとす、此組合も既に三千萬法の保険金を集め結果好良にして紡績事業に於て殊に然りとす

第十三目 職工同盟の利害

職工同盟は互に困厄を助け一致團結して同盟中の利益を計るものにして、理に於て間然する所なく、而して其同盟罷工を爲すも自然の時機に投ずれば敢て資本家の利益を傷はず同時に勞力者を利し會社を益すること少からず、然れども、勞働社會は概ね智識を缺き見聞廣からず、動もすれば罷工其時機を誤り、剩さへ其方法穩當ならず、同盟中罷工に同意せざる者あれば之に暴行を加へ其同意を強ひ、或は資本家の身體財産を傷ひ機械の使用を拒み其改良を欺ばず、或は資本家の同盟外の勞力者を使用するを拒み他地方より勞力者を輸入するを妨げ、資本家が同盟外又は他地方の勞力者を使用せんとすれば彼等は忽ち罷工強迫の勢を示し、資本家をして不自由を感せしめて以て自己等

を使用せしめんとし、或は同盟中の人員を増加せしめざるが爲め故らに其人員を限り、徒弟、見習の數を制限し、其他同盟中に種々不可思議の規定を設け力めて事業を遅延せんとする(例へば煉瓦は一回に五枚以上を運ぶ可らず、又之を運搬するに疾走す可らずと云ふが如し)か如きは職工同盟の通弊なり、其他之に類するの流弊擧て數ふるに遑あらず、是等は皆資本の増殖營業の効驗を増加するの主旨に悖戻し、一時成は同盟中の勞銀低落を防ぐの効あるべきも勞力者一般の利益に反し、勞銀歩合を維持するの効あるに非ず、唯幾かに同盟中の勞銀歩合を維持するに止まり、其奏功は却て同盟外の勞力者の勞銀に著しき減少を來すべし、然りと雖既述の如く資本家中亦同盟あり相談して以て勞銀の増加を豫防し、同業者中勞銀歩合、勞働時間等に就て規約を定め、甲の使用する所の勞力者其勞銀歩合の低きを憤り去りて乙の使役に服し割合善き勞銀を得んと欲するも、甲乙の間に約束あるを以て乙は彼等の爲に勞銀を増加せず、丙に至りても同様丁に至りても同断にして勞力者をして去就を自由にすること能はざらしむ、故に勞力者側に於ても一團を組織し進退の秩序

を保ち隊伍整々堂々の陣を要するは論を俟たず、烏合の衆救へざるの民夫れ將た何を乎爲さんや、然れども茲に最も慎むべきは運輸、交通、點燈等の如き公共の利害安寧に關する事業及兵器、造幣等の如き官業に於て罷工を爲すは國家の進運に係り其害最も甚しきを以て豫め之に備ふるの立法なかる可らず、西曆千九百七年のキヤナダの工事爭議調査法の如きは能く諸般の要素を調和し探て餘師と爲すに足れり、則ち該法の目的は罷工、鎖出又は暴行に對し制裁を設くるに非ずして之を未然に防ぐにあり、例へば鐵道、點燈等の如き公共事業及礦山事業(石炭を目的とす)に於ては罷工及鎖出を許さず、萬一已を得ざる事情あるときは之を政府へ訴へ政府先づ其理由を調査し、理由ありとするときは豫め之を國中に公告し然る後ち之を許すものとす、斯の如くして根底於て營業者及職工の自由行動を妨げずと雖も事苟も國家公共の利害に關する事は容易に罷工又は鎖出の發生を許さず理否を明白にして國民をして豫め覺悟する所あらしむるを得へし、誠に巧妙の立法なりと云ふを得へし、又勞力者に就て一言すへきは假令罷工其目的を達し増給を得るも其得る所は

給料の幾分例へは五分にして失ふ所は罷工中の給料全額なるを以て容易に得失相償ふこと能はさること是なり、是に於てや英國に於ては近年大に其弊に鑑み共同法を擴張し相互協定法を設け以て資本勞力の利害を疏通し融和し其成績頗る見るべきものあり、其最も有名なる者はダラム、礦業同盟、南ウエキ、ルス、礦夫組合等にして綿業、製鐵事業等にも其例少なからず、之を要するに是等の設備は資本家及勞力者間の協定を以て互に和衷協同し相互の利益を失はざるに努むるにあり、又一世の美事なりと云ふを得へし

第十四目 共同法

農工商百般の事業を發達伸暢せんと欲せば資本勞力の利益を調和し相調れ相親み兩者をして互に父子兄弟の思を爲さしむるに若くはなし然るに方今資本勞力の間斯の如きの關係なく一は勞力購買者の地位に立ち、一は勞力販賣者の地位に立ち互に永遠の利益を忘れ利さへ賣買者の利益は相反せず結局同一に歸するの理由を悟らず目下の少利に眩惑し資本勞力互に相敵視し資本家は只管ら勞力減少の機會を窺ひ、勞力者は器具機械の取扱を粗略に

共同の方

し使用品器械に用ゆる油、石炭等を云ふの使用に注意せず必を業務に委ねず時間を竊み監督者の眼を掠め勢力の効験を減じ動もすれば罷工強請を企て以て資本の増加を妨げ、勞銀基金の減少を來し却て自ら其禍に陥ることを知らざるもの滔々たる天下皆是なり、今是等の弊を矯正せんと欲せば資本勢力の利益を一にし、一方に於ては資本家をして勞銀歩合の高きは敢て其損失に非ず他の一方に於ては勞力者をして營業所得歩合の増加は即ち自身の利益たることを知らしむるを以て捷路とす、然りと雖も斯の如き心事の進歩は一朝一夕の能く爲し得べき所に非ず、故に他に適當の良法を求めざる可らず、其良法とは何ぞや曰く共同法是なり

抑々共同法とは資本の所得普通の歩合例へば一割を超過せば其超過したる部分は之を資本家及勞力者に配當すべしと定め、又故らに小額の株券を發行して勞力者中僅少の貯蓄を有す勞者を誘ふて之を購買せしめ、勞力者をして半は資本家、半は勞力者として其會社の事業に従事せしむるを云ふ、果して斯の如くなるを得ば勞力者も自然に勞力を屬み機械器具の使用に注意し使用

品を償み營業所得の多からんことに努むべきは人情自然の勢なり、又既に幾分の貯蓄を爲して小額なりとも平生其の従事し居る所の會社の株券を得たる者は勞銀の外更に其株券に對して割賦を得べく、不知不識の間に勞力者の勉勵は資本家を利し、資本家の利益は彌て勞力者の利益となるの眞理を解し、資本家も亦勞銀の増加は勞力の効験を増し監督の勞を省き以て生産資を減するの結果あるを知り進みて勞銀高きも敢て營業所得の歩合を減せざるの事實を認め、資本、勞力互に相敵視するの妄念釋然として氷解し、是に甫めて同盟罷工、強請等の弊は假令全く其跡を絶つに至らざるも大に其數を減し其害を軽くすべきや疑を容れず、果して然らば國家の生産を増加し、資本の増殖を助け以て勞銀基金を増加するは期して俟つべきなり

第十五目 共同法に對する駁論

共同法の利益たる斯の如く夫れ大なり、然るに其效験を以て甚だ薄しと爲し之を駁する者あり、其言に曰く

共同法の利あるや敢て疑を容る可からずと雖も勞力者の智力進歩せざれ

ば其效驗甚だ薄し、何となれば共同法は勞力者に利益を與ふるに由り、知ち人口を増加し其増加勞銀基金増加の割合に超過し却て勞力者の不幸を醸成す可ればなり。

と、此言たる現在の事情を酌量して論據を人口と勞銀基金との比例に取るものにして敢て一理なきの論に非すと雖も畢竟是れ啾々たる蚊蚋何ぞ風鳴を障けん、蓋し勞力者の無智無謀なるも決して常識を缺くに非ず、豈に福利の愛すべくして貧困の厭ふべきを知らざらんや、若し茲に其道を開き其地位を進むるは敢て爲し難きの業に非ざるを示さば、必ず驕然自ら悟る所あらん、然らば即ち令せずして勤勉の風を爲し、禁せずして無謀の舉動を防遏せん、而して其地位の進むに従ひ遠慮の念亦生すべきなり、假令當初は之が爲め其地位を進むる者多からずして一時或は論者の言の如く人口増加の效驗を生ずることなきに非ざるべしと雖も、星移り時替るに従ひ其進む者と其退く者との間に著しき苦樂の差違を生ずべく、此差違を見ると同時に其進むの難事に非ざるを知らば必ず各自相競ひ奮然邁往し以て後年に逸樂を得んことを力むべし。

し、世世に故らに好みて苦楚を嘗むる者あらんや、是れ最も賭易きの理にして、共同法實施の結果又之を事實に徴して明なり。

抑々方今勞力者輩が世に賤視せらるゝ所以のものは主として其自ら招く所なりと雖も、亦何ぞ其地位を進むるの難きに由るなきを得んや、人生一たび難難の地位に陥りて容易に之を脱却すること能はずんば終に自暴自棄に至るは蓋し自然の勢なりとす、方今勞力者の地位艱難なきに非ず、其自暴自棄の弊に陥り不當の人口増加を見る亦多少恕すべきものなしとせず、一たび之をして寛裕の地位に進ましむれば則ち勤勉の風、遠慮の念隨て生ずべく、其人口増加の抑制に効力ある敢て疑を容れざるなり、抑々勞力者根本の進歩に素より國民教育の力に頼らざるを得ずと、雖も心事の發達を以て風を革め俗を和するは至難の事に屬し一朝一夕の能く爲し得べき所に非ず、其に根本法の外尙ほ之を導くの捷路求めざる可らず、而して其道たるや求めて得難きに非ず、即ち前に述ぶる所の共同法の如き其一なり、一方に應救策を用ひ一方に根本法を講じ内外相待ち以て進行せば富源の發達勞銀基金の増加期して俟つべき

なり由是觀之共同法は人口不當の増加を抑制するの一方法と云ふことを得べし、何ぞ之を以て其増加の原因と爲すを得んや、論者の如きは其一を知りて未だ其二を知らざるに座するものなり

第十六目 共同店

資本家勞力者互に共同し營業の所得を分配するの利益は已に説く所の如し茲に又勞力者中の共同法あり、其方法は勞力者互に職金して、一店を設け、日常の需用品を問屋若くは其生産地より直に買入れ、更に之を其店より通常の市價にて購買し後日出金の高に應じて其利益を分配するか、又は只買入元價に加ふるに店費のみを以てしたる價にて之を購買するものとす、斯の如くして設立したる店を共同店と稱す、元來此方法の利益たる良品を低價に購買し得るに在りて、實際勞銀の増加したると其効驗を同くす、英國に於ては此方法盛に行はれ、各地に共同店を組織し、非常の發達を爲し、巨額の資本を有し其高は西曆千八百八十八年の千三十六萬餘磅より同千九百三年の三千八百八十八萬餘磅に増進して頗る勢力あり、而して其區域を分配の業に止めず更に進

みて生産業に及ぼし自己の船舶を以て海外生産地より食品及原料品を直接輸入するに至れり、然れども米國に於ては未だ共同店の發達を見ず、是れ蓋し英國に於ては勞働社會の生計己に難きが爲め之が必要を感ずるに由ると雖も抑々亦該國には富裕閑散にして爲すべきの才智を有し眞乎に社會を憂ふる所の人士に富み勞力者生計の進歩を計るが如き舉あれば其智力と時間とを假すに吝ならざるに由るなきに非ざるを得んや、而して此方法たる必ずしも之を勞働社會中に限るに非ず、中等社會に在りても亦其便利なきに非ず、故に英國に於ては勞力者に勿論小吏の如きに至りても相團結して共同店を設置するに至れり

抑々共同店に二種あるは既論の如し、而して其物品を通常市價にて販賣し後に利益を配當すると、初めより低價に物品を販賣するとは自から得失あり前者は他の小賣店と競争することなく、而して利益の配當は多少纏まりたる金員を一時に得るの利ありて之を以て直に其店の株を増加することを得べく、又は之を以て新に家具、衣服等を購ひ以て其生計の進歩を後年に傳ふるこ

二種の得

共同店は現金拂を要す

とを得べし、且つ此方法に従へば賣却代價は普通價格なるを以て同盟外の人
 と雖も此店と取引するに差支なし、故に營業を擴張し資本の運轉を一層鋭敏
 にするの利あり、後者に至りては然らず、則ち在來の小賣店と氷炭相容れず、他
 店の忌む所となり其發達を妨ぐることをなきを保せず、又收支相償はざるを以
 て同盟外の人と取引を爲すこと能はざるべし、然れども後者は現在物品を低
 價に販賣するを以て其設立容易なり而して生計に餘裕なく收入一杯にて僅
 かに一家を養ふを得る者の爲には甚だ便利なり、又大都會に於て配當金領收
 の勞多き如き場合に於ては後者を以て便利とするの事情なしとせず

共同店は常に一定の需用者を有し且つ現金拂にして掛賣を爲さるもの
 とす、故に資本の運轉速にして物品も亦隨て新鮮なるを得べし、其販賣現金拂
 なるを以て仕入も亦現金を以て爲すことを得べく精良の物品を低價に得る
 の便宜あり、斯の如く其經營一切現金拂なるを以て掛賣の如く代價の滞りな
 く利益の割合隨て大なり、英國にては小賣營業の掛賣代價滞りの損失を償ふ
 が爲め通例物品代價に二割の割増を掛くると云ふ、由是觀之共同店の方法は

勞力者其他の爲に頗る利益あるものにして其効驗は實際勞銀の増加したる
 と異なることなく却て單に勞銀の金高の増加したるより利ありと云ふべし
 何となれば勞力者多くは自ら營業の株主となり、資本勞力の關係を知るの一
 助となる可れはなり、然り而して中等以下の生計に於ては糧食費其大部分を
 占め歳入額の増進するに隨ひ其比例を減す、今北米合衆國最近の實況を示せ
 は左の如し

千二百弗以上	一、七四〇	三八五	一一八	三、六四五	一五七二	二、五四〇	一〇、〇〇〇
千百弗乃至千二百弗	一、六五九	三六三	一〇八	三、七六九	一四八九	二、六一三	一〇、〇〇〇
千弗乃至千百弗	一、七五三	三七七	一一六	三、八七九	一五〇六	二、三六九	一〇、〇〇〇
九百弗乃至千弗	一、七五八	三八五	一一一	三、九九〇	一四三五	二、三二一	一〇、〇〇〇
八百弗乃至九百弗	一、七〇七	三八七	一一〇	四、一三七	一三五七	二、三〇二	一〇、〇〇〇
七百弗乃至八百弗	一、八一七	四一四	一一二	四、一四四	一三五〇	二、一六三	一〇、〇〇〇
六百弗乃至七百弗	一、八四八	四六五	一一二	四、三四八	一二八八	一、九二九	一〇、〇〇〇
五百弗乃至六百弗	一、八四三	五〇九	一一二	四、六一六	一一九八	一、七三二	一〇、〇〇〇
四百弗乃至五百弗	一、八五七	五五四	一一二	四、六八八	一一三九	一、六五〇	一〇、〇〇〇
三百弗乃至四百弗	一、八六一	五九七	一四一	四、八〇九	一〇〇二	一、六〇九	一〇、〇〇〇

第四章 分記

収入	家賃	燃料	點燈	糧食	被服	雜費	總計
二百磅乃至三百磅	一、八〇二	六〇九	一一三	四、七三三	八六六	一、八七七	一〇、〇〇〇
二百磅以下	一、六九三	六六九	一二七	五、〇八五	八六八	一、五五八	一〇、〇〇〇
							一七二

又、獨逸の實況を見れば左の如し(柏林市なり)

歳入

飲食費百分比例

一、〇〇〇乃至一、二五〇馬	六八、六九
一、二五〇乃至一、五〇〇	四九、六三
一、五〇〇乃至一、七五〇	五〇、六三
一、七五〇乃至二、〇〇〇	五三、六一
二、〇〇〇以上	五五、二五

〔備考〕二、〇〇〇馬以上の収入にして飯食費の多きは家内の人数多く収入には妻子の稼ぎ高を包含する故なり

又英國に於て西曆千九百七年千九百四十四の勞力者家族に就て調査したる結果左の如し

一家一週の收入	食糧費
二一、四、五〇	一四、四、七五
二六、一、七五	一七、一〇、二五
三一、一、二五	二〇、九、二五
三六、六、二五	二二、三、五〇
五二、〇、五〇	二九、八、〇〇

食糧費は共に小収入に比例強さを示して餘りあり

第十七目 勞力者救済に關する次位の設備

勞力者の救済に關し尙ほ前記方法に次ぎて用ゆべきものあり、即ち家屋改良共同療養小兒養育法資法金貸付法等の如き是なり是等の救済法は事小なるが如しと雖も其實必ずしも然らずして頗る勞力者を利し、勞力の効驗を増し勞銀基金の増加を致すの効力あり、請ふ其重要なる者に就きて聊か陳述する所あらん

夫れ家屋は人間三大需要の一に位し其構造の適否は衛生風儀等に関すること尠しとせず、然るに家屋の供給者多くは收利を以て目的とし未だ衛生、風

儀等の點に注意するに暇あらず、頗る遺憾の點なしとせず、都鄙共に家屋の供給は方今の一大問題なり、家賃の高下は之を大體上より論ずれば、家屋需給の關係如何に由るは論なしと雖も、社會的觀察より之を推すときは、是所に多少の慈悲心を加味するの必要あり、抑々方今勞力者住家の家賃は家屋の實價に比して頗る高く、大都會に於て殊に然りとす、即ち獨都伯林の如きは八百マルククの歳入より最高四百マルクク、最低二百マルククの屋賃を拂ひ、九百五十マルククの歳入より最高七百マルクク、最低三百マルククの屋賃を支拂ふの極に達し、倫敦の如きも、西暦千八百八十年の屋賃を百とすれば、同千九百年には百十五、四七に上れり、而して其東廓外の如きは二三十年以來工場大に起り、廓外の村落一變して方今(四十年)二百万の人口を以て満たさるゝに至り、爲に家屋缺乏し、十英尺平方の一室一週間の借料従前三四志なりしに、今哉六志以上となり、一家同居する能はず、妻子を救貧院に託し、自ら一泊四片の木賃宿に起臥するの例、夥しとせず、甚しきに至りては住家の賃借の如きは最早昔日の夢と化し去り、問題は寢臺の賃借となり、更に一步を進めて寢臺の賃借となり、就業時間の都

合を計り三人にて一寢臺を借受け更代して之を用ひ、小兒の如きは己事を得ず、寢臺の下に臥せしむるの窮狀を呈せり、事情斯の如くなるを以て、細民の進歩を謀るに熱心なる者相集まりて一社を組織し、空氣の流通、光線の注射、間取の都合、厨、廁、井戸の位置、下水の疏通等に注意して、家屋を建築し、之を勞力者に貸付け、以て相當の家賃を收むるの方法起れり、此方法に依れば、勞力者は同額の家賃を以て比較的完全の住居を得、從て身體の健康を増すを得べきを以て、其勞力の効驗を増加するに裨益あること少からず、而して相當の家賃は固より之を徴するものにして、出資者の利益を害することなし、只需給自然の數に依り、營利的に出來得る丈の家賃を徴收せざるにある耳、英國に於ては右の趣意を以て、已に二千有餘の建築會社を設立し、社員は八十四萬餘人に達し、通例年四分の純益あり、而して其資金は西暦千九百四年には約六千六百万磅に達せり、今英國に於ては、其公債證書の利子は二分五厘なるを以て、年四分の利益は決して薄利と云ふ可らず、又右建築會社にて年賦を以て家屋を現住者に賣渡すの方法あり、此の如くするとき、一方に於ては勞力者中少しく餘裕ある

者は数年の後に一家屋の所有者となるの望あるが故に努めて儉約を爲し又大に家屋の保存に注意し一方に於ては會社は速に資本を回收することを得て益々其事業を擴張するの便あり、勿論建築會社は常に勞力者に適當する家屋を建築するに止まらず中等社會にも家屋を供給する方法を設け頗る社會の進歩改良に裨益す

諸國に於ける勞力者住家の情況斯の如し、今試みに英獨兩國の一般勞力者一週間の家賃支拂額を比較するに左の如し

英

獨

室數	屋賃	室數	屋賃
二	自三〇、〇至三六、〇	二	自二八、〇至三六、〇
三	自三九、〇至四六、〇	三	自三六、〇至四九、〇
四	自四六、〇至五六、〇	四	自四三、〇至六〇、〇

是れ一見一獨の方利あるが如しと雖も英國の屋賃には地方公課を含み獨に於ては稀れに上水料を含むことあるも其他の公課を含まず而して室の構

共同療養法

造品位も亦頗る劣等なり、依て之を英國の品位標準に引直し比較するに英百とすれば獨は百二十三となるの結果なり、英國の家賃之を前目記載の勞力者收入に比して決して輕きに非ず而して獨の勞銀は英の其に比して遙かに下位(主要なる事業に於て平均一割九分強)にあるも家賃の實額は却つて二割三步の上位に居るものなり、況や前記の如き極端の例に乏しからざるに於てをや爲に一擲の涙なからんと欲すと雖も豈に得へけん哉(因に云ふ勞働時間は一週間英四十九乃至五千七時獨五十四乃至六十時間なり)

共同療養法とは勞力者同盟して一團結を爲し例へば月に五錢若くは十錢又は其得る所の勞銀の百分の一と云ふが如き比例を定め儲金して以て相當の醫師を選み毎月之に若干の給料を與へ同盟中に疾病、怪我等あるときは直に診察治療を請ふことを得るものとす、固より特に高價の藥品、六ヶ敷き手術等を要するときは定まりの月給の外に療養費を要することあるべしと雖も普通疾病の場合の如きは右の儲金を以て其費用に充ることを得べし、斯の如くなれば一人の力を以て療養し能はざる所の疾病と雖も容易に治療を受く